始

修補 諏訪氏系圖 續編

故 延川和彦著
飯田好太郎補

緒言中ニ云フ鎌倉諏訪兵衛尉盛重入道蓮佛、諏訪杢左衛門尉弘重入道直性共ニ古系都テ載セサルヲ以テ金剌盛澄ノ流ナランカト疑問ニ附シオキシカド、同氏ガ代々鎌倉ニアルモ上社ニ關係アル形跡著明ナル上高時ノ遺子龍壽ヲ盛高（直性ノ子）ガ大祝時繼ニ依托セシ事蹟ヨリ見ルモ本氏ノ支流ナルヘク所感ユ、故ニ樣ノ一ハ平家物語卷ノ七ノ一ニ北國下向ノ事トアル段、壽永二年三月上旬ニ云云、木そ（義仲）しんしゐ、いしゆなきよしを、顯サムガ爲メちやく子清水冠者義重（清水冠者ハ都テ義隆トアリテ十三歳トセリ）トヲ生年十一歳ニナリケレカ疑者ニ海野、望月、すは、藤澤ナド云フ一人當千ノ兵ヲ相ソヘテ、兵衛ノ佐ノ本へ、ワカハス云云

清水冠者ハ木曾系圖、源平盛衰記、大日本史等都テ義隆ト見ユ、一書ニ歳十七トアリ、海野ハ幸氏ナリ

頼朝其女ヲ以テ義隆ニ妻ハス、義仲討死ノ後頼朝之ヲ害セント欲ス、侍女悟リテ事ヲ源氏（頼朝ノ女ノ名）ニ告ク、源氏義隆ニ計リ逃走セシム、幸氏等ソノ空房ニ集ヒ共ニ圍碁ニ擬托シ喧騒ヲ洩シ他ヲシテ其不在ヲ悟ラシメズ、頼朝之レヲ探知シ堀親家ヲシテ追蹤セシメ竟ニ入間河原ニ之ヲ殺サシム、此所ニ「すは」トアルハ或書ニ諏訪次郎（上宮）トアリ、サレバ安藝權守貞光ノ二子諏訪次郎清貞ニシテ、藤澤トアルハ次郎清親ナルベシ、清貞清親共ニ清水冠者被害ノ後チ頼朝ニ屬シ、尚ホ鎌倉ニ留マリシガ後チニ藤

澤次郎ハ流鏑馬及ヒ弓場始メ等ノ射手ニ其名見エタルモ清貞ノ氏名ハ絶エテ見エス、神氏系圖、諏訪氏系表トモニ其子孫ノ有無ヲ記載スルヿナシ故レ思フニ清水冠者ノ窃ニ鎌倉ヲ逃脱スルヤ、彼レ必ス單獨ナルニハアラサルベシ、サレバ其保護者タル清貞之レニ隨伴シテ共ニ其難ニ罹リシニハ非ル歟而モカノ神氏系圖、諏訪氏系表其他トモ其事更ニ所見ナシ、又其子孫ノサテ絶エタリトモ覺エズ、サレバ蓮佛入道コソ其出ナルヘケント所思ユ、年歴モ亦能ク相應スレハナリ、此ハ予ガ一已ノ考ナレバ果シテ然ルヤ否暫ク所見ヲ記シテ復タ他ノ詮考ヲ俟ツ

補ニ云フ　盛重入道蓮佛ハ諏訪次郎清貞ノ子胤ニハ非ズ、蓮佛ノ出自ハ本傳中ニ反覆考證ヲ立テヽ掲記セリ、就テ見ルヘシ

偖諏訪次郎ハ大祝敦光ノ弟ニシテ、一系ニハ桑原居住ニシテ桑原ヲ氏ニ稱セリ云云ト記セリ、而シテ清貞ニ三子アリ、長男ハ眞範諏訪二郎、次男ハ眞盛矢ケ崎神六、三男ハ清繼福島八郎トス、子胤聯々繁衍セル趣キ也

活版本吾妻鏡、建長、正嘉ノ間、諏訪刑部左衛門入道（盛高）諏訪三郎左衛門尉盛經（著者云フ又一ニ諏訪三郎盛綱アリ、仝人カ共ニ三郎ニシテ經、綱字形又國訓ノ稍似タリ、思フニ活字ノ誤植ナランカ考フヘシ）諏訪兵衛四郎盛頼等ノ名見ユ蓮佛入道ノ枝葉ナリト、其世系ニ記シタルモノ數種ニシテ確據シ難キモ、他日ノ參考ニ資センガ爲メ其多キニ就テ左ニ掲出ス

◉盛重　兵衛尉

入道蓮佛

承久中大祝後退職仕ニ鎌倉一、

補ニ云フ　盛重ノ事績ノ東鑑ニ見ユルハ寛喜二年二月三十日ノ條、丑ノ刻俄ニ鎌倉中騒動ス云云

嘉禎元年九月一日法華堂前、湯屋失火防止

寛元五年六月二日御前賜鎧ノ役云云

寶治二年六月十日新誕若君乳母トシテ蓮佛妻、被レ召云云、同年七月九日始行ニ寶壽公雜事一云云

建長三年十二月廿六日ノ條、近江太夫判官氏信等以下反逆ノ事聞ユ仔細ヲ推問（中略）逆心悉ク露顯云云

同五年十一月二十九日、山内ニ一堂ヲ建立今日遂ニ供養ニ云云、其實頼朝之冥福ヲ祈ルガ爲メ一寺建立ト云云

正嘉二年八月建長寺前ニ於テ諏訪刑部左衛門入道盛高ガ伊具四郎入道ヲ暗殺セシ疑問ノ記事

弘長元年六月二十二日、蓮佛及平左衛門尉盛時等於ニ龜谷石切邊一、生ニ捕故駿河前司義村ノ子息太夫律師良賢一依レ是有ニ謀叛之企一

盛高　刑部左衛門尉

正嘉二年八月建長寺前ニ於テ伊具入道四郎ヲ暗殺（遂ニ審旨一被レ所ニ梟首一畢）云云

重頼　大進房

盛經　三郎左衛門尉

補ニ曰フ　東鑑建長五年正月三日垸飯、相公羽林、上ニ御簾一御引出物進役人ノ内ニ諏訪三郎左衛門尉盛綱、同四郎時盛ト見ユ、盛經、盛綱同人カ別人カ未考

大系圖ニハ此ノ種ノ出自ヲ信澄手塚太郎トシ、次ハ信綱手塚又太郎、次ハ盛重右兵衛尉諏訪太郎トシ、一男盛高諏訪太郎左衛門尉トシ、次男盛經諏訪三郎左衛門尉トシ、三男盛頼左衛門尉入道直性トシ、其弟ヲ重頼大進房トシ、以テ兄弟四人ヲ列記セリ、一本ニハ此ノ系下諏訪氏ト稱ス、而シテ二男盛經ノ男ヲ宗經ト次テタリ、本系ト差違アルコト甚シ、元來大系圖ニハ諏訪氏ヲ源氏ニ係ケテ記セリ、何ノ據ル所ヲ知ラス、諏訪氏ハ實ニ諏訪大神ノ神胤ニシテ、姓神人部ヲ賜ハリテ以テ稱スル所トス、而シテ

也云云ノ記事迄凡ソ三十有餘年鎌倉在住ノ趣キ也、依レ是覩レ之盛重ノ年齒已ニ知命ヲ過クルモノヽ如シ

予ガ舊友故鮎澤政彦ハ大祝盛重ト蓮師盛重トハ同名異人ナリト說破スレトモ信シ難シ如何トナレバ東鑑承久三年辛巳六月十一日ノ條ニ諏訪大祝盛重去八日之狀、今日到ニ來鎌倉一、

爲ニ懇祈一之由、献ニ卷數一、又子息太郎信重相具小笠原上洛云云、依レ是考察スルニ盛重ハ父ニシテ信重ハ子息タルモノ、如シ、

尙考フルニ信重ノ記事ニ延應元巳亥年十一月一日ノ條ニ近日信濃國司、初ヲ任ニ檢註事一云云（中略）仍而今日有ニ評定一、被レ尋ニ問先例於當社大祝信濃權守信重一（檢註事ハ檢註使カ）

同月九日信濃國司、初ヲ任ニ檢註事一、諏訪大祝信重、捧ニ請文一、當社五月會御射山以下頭人等申、國檢事依ニ當番相當一、不レ限ニ其被免一、一任之間之事爲ニ先例一之由、仍ヲ重ヲ下諏訪神胤ハ金刺姓ニシテ、畏クモ神八井耳命ノ苗裔ナリ、決シテ源氏出自ノ姓ニ非ス、建長參年十一月廿七日下諏訪三郎盛綱上洛ス、之レ准后爲ニ御訪一ナリ云云トアリ

下諏訪氏ハ金刺姓ナリ

神人部姓並ニ金刺姓ノ者モ共ニ諏訪大神ニ奉仕セルヨリ共ニ祖神諏訪ノ神ノ尊名、諏訪ヲ氏號ニ稱スルニ至リシナリ、此諏訪氏ノ支流數十ニ繁殖シ、信濃及ヒ諸國郡鄕ニ分布シテ其居地ヲ氏號ニ稱スルモノ擧ケテ數フルニ遑アラズ、而シテ多々ノ年所ヲ經ル內ニ家名ヲ失フモノモ多カリキ、此際他姓ノ者其名跡ヲ繼テ自己ノ姓ヲ冠シ以テ變姓ヲ稱スルモノ又多々ニ及ベリ、例セバ金刺姓ニモ手塚太郎光盛アリ世ニ著ル、源氏ノ信澄手塚太郎ト稱ス、異姓同稱ノ氏號アリ、是等ノ區別ヲ委ク究メズシテ神姓ノ冒頭ニ源姓ノ手塚太郎信澄ヲ祖トシ、其孫ヲ右兵衛尉盛重入道蓮佛ト次デタル如キ源姓

御沙汰之趣、不レ及ニ異議一云云

如上ノ記事ヲ綜合シ以テ審按スルニ信重ノ大祝在任ハ延應中既ニ就職シアルガ如シ、而シテ信濃權守、同年己亥十一月九日ノ條初ヲ任ニ檢註事一、トアルニ注目セバ權守初テ拜任ノ趣旨明瞭タルモノヽ如シ、其記事ニ續キテ諏訪大祝信重捧ニ請文一當社五月會、御射山以下云云トアレバ、大祝就任ハ少シク先立チシモノト察セラルヽ也、依テ盛重ニ續イテ大祝ヲ拜任セシハ子息信重ト確信スヘシ

又一說ニ大祝盛重トアルモ此ハ敦信ノ誤傳ナリ云云、故鮎澤政彦云フ、古寫本神氏系圖ニ據ルニ敦信ガ盛重ト稱セシコト見エズ盛重ハ敦信五代ノ孫也トストアリ

前揭又一說ノ盛重トアルモ、此ハ敦信ノ誤傳ナリ云云ノ記事ハ全ク無根ノ構造說ト認ムヘシ、故鮎澤氏ガ古寫本神氏系圖ニ據ルニ敦信盛重ト稱セシコト見エス、盛重ハ敦ト神姓ヲ混入セシコト最モ不審ノ至リナリ

按ニ源氏ノ手塚太郎信澄ハ信濃權守源爲公延久頃ノ人ヨリ四代ノ孫ト其家系ニ見ユ、然レハ一代三十年宛ノ在主トシテ鎌倉開府ノ時代ニ當ルナリ、仍テ考フルニ手塚太郎金剌光盛、木曾公ト共ニ滅亡セシ名跡ヲ繼テ手塚太郎ト襲名セシニヤ、爾後源姓ニ改變シ以テ神家ノ盛重ヲ源姓ノ流ニ係ケテ系譜ヲ僞作セシモノト見ユ、大系圖ノ編纂者其僞作ノ系譜ヲ其儘信據シ一系譜トシテ世ニ傳ヘシモノナルヘシ、今純粹ノ神氏系圖世ニ再ヒ顯露セショリ識者初メテ源姓ト神姓ノ系表ヲ混同シテ一ツノ系圖トナセシコトヲ看破シ、彌々源姓ノ諏訪氏ト題セル系圖ハ悉ク僞書ナルコトヲ認ムルニ至レリ、嗚呼快事ノ至極ト云フヘシ、源氏手塚太郎信澄ノ出自ハ後ニ揭出スル諏訪沿革考ノ部寬永諸家系圖傳ヲ合セ見テ神氏トノ差違ヲ察スヘシ

信五代ノ孫ナリトアリ云云ト云ヘルガ如ク敦信盛重云云ノ記事ハ信ヲ置キ難シ、但此ノ五代ノ孫云云モ誤也、唯リ此系表ニ據レハ右兵衛尉盛重入道蓮佛其一男ヲ刑部左衛門尉盛高トシ、次男ヲ大進房重頼トシ、三男ヲ三郎左衛門尉盛經トシ、四男ヲ兵衛四郎盛頼トセリ、東鑑ニ云フ、盛重ノ子息信重トアル如ク盛重ヲ父トシ、信重ヲ子息ト記セス、信重ノ名本系更ニ載セズ甚タ不審ナリ、順序ヨリ云フトキハ盛重ノ一男盛高コソ信重ト記スヘキナリ、本系表盛重ノ次男盛經其男宗經、其男ヲ時綱トス、而シテ盛經ノ次男ヲ經重トシ、其弟ヲ弘重トス、此ノ弘重ノ男ヲ時重トシ、次男ヲ盛時トシ三男ヲ三郎盛高トシ、五男ヲ盛世トス、其兄盛高三郎ト數世以前同名盛高ト云フアリ按ルニ前ノ盛高又信重ト呼ヒシコトアルカ斯ク論究スルニ此ノ系表ハ他ニ類例ナキモノナリ、本著者ガ殊ニ掲ケシモノタレバ茲ニ予モ特ニ掲記シテ參考ニ供フ、本系ハ看客ノ取捨ニ任ズ

盛頼　兵衛四郎

補ニ云フ　東鑑嘉暦二戊午年正月六日ノ條御的始射手ノ内諏訪四郎兵衛尉云云トアリ之レナルヘシ

文應二辛酉年正月一日垸飯祝式、將軍家出ニ御南殿ニ、御門中納言、上ニ御簾ニ、御引出物如レ恒之内ニモ諏訪四郎兵衛尉見ユ、文永二乙丑年十一月二十日甲寅信濃國善光寺ノ事且爲レ被レ鎮ニ寺辻之惡黨ニ、警固被ニ定置ニ奉行人トシテ所レ謂和田石見入道佛阿、原宮内左衛門入道西蓮、窪寺左衛門入道光阿諏訪四郎兵衛尉入道定心等也云云

〈按ニ叙上ノ數氏ハ皆悉ク信濃國ノ武人ト見ユ〉然レバ兵衛四郎盛頼入道シテ定心ト號セシナラム

宗經　左馬介

時綱　左衛門尉

元德二年、預ニ右少辨藏人俊基朝臣一令ニ鎌倉禁籠一云云

（太平記ニ七月廿六日トアリ）

補ニ云フ　藤原俊基朝臣再ヒ鎌倉下向ノ時、遠州菊川宿ニ於テ一詩ヲ賦シ旅館ノ柱ニ書セリト曰ハク

昔南陽縣菊水、汲ニ下流一而延レ齡。朝臣豫メ知ニ誅戮一故題スト此ノ故事人口ニ膾炙セリ

頼綱

一、綱字凡經、時綱ノ次有ニ頼綱一云云

元弘二年六月十日、俊基朝臣於ニ眞葛ケ原一誅討云云

補ニ云フ　俊基ハ南朝ノ忠臣タレハ官社トシテ祀ル、即チ鎌倉葛原岡及吉野宮ノ攝社是レナリ

經重

一本維重

弘重　左馬介　左衛門尉
入道直性
元弘三年五月北條崇鑒相伴自殺

時重　左衛門尉
入道見松
一書時重ハ盛時ノ子トス、可レ從レ之乎云云

時信　信濃守
明德二年山名氏清騒乱之時有二戰功一云云

盛時　次郎左衛門尉
東鑑文應二年六月二十二日之條、於二龜谷石切邊一生二捕故駿河前司義村之子息律師良賢一、依レ是有二謀叛之企一也云云

忠滿　五郎　法名雪窓
一ニ持重
義持將軍賜二一字一持重ニ改ムカ、忠重ノ譜合セ考フヘシ、重ノ字ニ依テ考フルニ義持將軍ヨリ持ノ一字拜領ニ由テ持重ト改ムカ、然レハ忠重一ニ持重ト云ヒシナルヘシ

忠重　信濃守　太郎左衛門尉
一ニ忠重ハ持重ノ初名カト云云

盛高　三郎
元弘三年北條龜壽相具シテ落二來本國信濃一憑二大祝一云云、或書ニ元弘三年五月十八日、鎌倉合戰、片瀬、稻村ケ崎、前濱、鳥居脇ニテ致二忠戰一、若黨家子合二討死一、同廿一日ヨリ廿二日迄、於二葛西谷一致二忠戰一賜二本領一、建武三年八月二十二日死ス顯綱トアリ、盛高ノ改名ナラムカト云云

盛世　五郎　始師重
觀應二年、攻二高播摩守師冬一於甲州洲澤城一、依レ有二舊緣一、入レ城共二自殺一云云
補ニ云フ　高師冬ト共ニ自殺セシヲ大日本史ニハ甲斐ノ人諏訪眞種トセリ
又師冬ヲ攻伐セシハ同史ニ諏訪種隆ト記セリ、（私云如上ノ人名出自未考）
太平記ニハ諏訪下宮祝、甲斐ノ洲澤城ニ高師冬ヲ亡ストアリ
又或人云フ、洲澤城ニ師冬ヲ攻殺セシハ金刺與春ナルヘシト云云
如上ノ始末紛々トシテ孰レヲ是カ非カ決シ難シ
南山巡狩錄ニハ正平六年正月高播摩守師冬去年冬、甲斐國ニ

落チ下リ洲澤城ニ籠ル、諏訪下宮祝部神祇少副隆種六千餘騎ノ勢ヲ以テ此城ニ攻メ入リシ程ニ城兵八代六郎高金討死ス、斯リシカバ城ハ唯今落ツベシト見エタリ、茲ニ諏訪眞親、諏訪祝部ノ勢ニ隨ヒ寄手ニ有リケルガ、抑我身ハ執事ノ烏帽子トシテ父子ノ契約アリ、今ニ當リテ不義ノ行跡有ルヘカラズト言ヒ、寄手ノ大將ニ最期ノ暇ヲ請ヒ、忽チ城中ニ懸ケ入リ城將自害ノ席ニ臨ミ播摩守師冬ト手ヲ組ミ腹掻キ切ツテゾ死シタリケル、是ヲ見テ義ヲ重ンズル侍六十四人一同ニ自害シケレバ城ハ忽チ陷リケル云云、下社祝部隆種、諏訪眞親共ニ系表凡テ見エズ如何ニヤ

諏訪氏ノ系統ヲ清和天皇ヨリ出テタリトシタルハ、此系表寛永諸家系譜傳ト稱シテ寫本四百貳卷、寛永二十年癸未九月吉日從五位下太田備中守源資宗鑒修、林信篤選輯トアルモノ之ノナリ

◉源經基
- 滿快（下野守）
  - 滿國（甲斐守）
    - 爲滿
    - 爲公（信濃權守）
      - 爲實（號依田）
        - 實信
          - 信行
      - 信澄（號手塚）
        - 信綱
          - 盛重（號諏訪）
          - 盛高
          - 盛經
            - 宗經
              - 經重
            - 盛賴
            - 重賴
            - 時綱（左衛門尉）
            - 弘重
              - 盛時
                - 時重（信濃權守）
                - 頼繼時代ノ人本系ニ參照スベシ
                - 盛高
                - 盛世
              - 時信
                - 持重（一信重）
              - 忠滿
                - 忠重
            - 頼繼（信濃權守）
            - 繼宗（左馬介）
            - 信嗣（安藝守）
            - 頼隣
              - 信有
                - 滿有
                - 政滿
                - 頼滿

- 賴隆
  - 賴隣
    - 賴重 — 長岌 侍者
    - 賴豐
    - 賴忠 — 賴水 — 忠恒

寛永諸家系圖傳卷百十一ニ收メシ諏訪氏ノ系表如上ノ通リ
又寛政諸家系圖纂ト云フ太田侯等選定ノ系圖傳ニ補遺ヲ加ヘシモノニテ、諏訪氏系圖纂左ノ如シ、寛永編纂ノ系圖ト對照スヘシ、稍密ナルモノヽ如シ

清和天皇四代滿仲弟

◉ 滿快 相模守 右衛門尉 下野守 從五位下 滿國 遠江守 伊豆守 甲斐守 從五位下
檢非違使

- 爲滿 甲斐守 從五位下
  - 爲公 伊豆守 右馬介 信濃守 從五位下
    母賴信女
- 爲實 依田六郎
  - 信實 依田次郎太夫
    - 信行 依田三郎
- 信澄 手塚太郎
  - 信綱 手塚又太郎

- 盛重 右兵衛尉 諏訪太郎
  法名蓮佛
  嘉禎元年鎌倉失火ノ時盛重速カニ馳付諸人ニ抽シテ其火ヲ打消シ火災ヲ救ヘリ
  建長五年一堂ヲ山之内ニ建立
  - 盛高 諏訪太郎左衛門尉
  - 盛經 諏訪三郎左衛門尉
    建長年中鎌倉ニ仕フ
    - 盛賴 左衛門尉
      僧ト成リ眞性ト號ス
    - 重賴 大進房
- 宗經 信濃守
  - 信重 信濃權守
- 時繼 左衛門尉
  元德二年俊基朝臣ヲ預リ禁錮ス
  - 賴重 三河守 從五位下
    元弘三年北條高時滅亡ノ時、賴重陰カニ高時ノ子龜壽ヲ携ヘ信州ニ落チ建武中、兵ヲ起シテ鎌倉足利直義ヲ追ヒ敗ル、龜壽後ニ時行ト稱ス其後足利高氏ノ爲メニ打敗ラレテ時行以下大御堂ニ於テ自殺ス

- 弘重　左馬介
  - 後僧ト成リ直性ト號ス
  - 元弘三年五月二十三日北條高時滅亡ノ時自殺ス
  - 盛時　次郎左衛門尉
    - 時重　小太郎
      - 僧ト成リ見松ト号ス
      - 盛世　五郎左衛門尉
        - 觀應貳年高播摩守師冬、甲州洲澤城ニ籠ル時、盛世諏訪大祝ト共ニ攻ムルト雖モ盛世元ヨリ師冬ト因緣アルヲ以テ城中ニ入リ師冬ト共ニ自殺ス
  - 補ニ云フ　茲ニ記スル頼重ハ諸系凡テ時繼ノ父トセリ此系表ノミ唯リ時繼ヲ父トシ頼重ヲ子トス錯置カ
- 時信　信濃守
  - 明德年中、山名氏清謀叛ノ時功アリ
  - 忠滿　五郎　法名雪窓
  - 忠重　太郎左衛門尉
- 頼繼　小太郎　信濃守　法名普寛
  - 應仁中、細川勝元ニ属ス
  - 補ニ云フ　頼繼ヲ頼重ノ子トス是父子ヲ錯置セル也頼繼ハ頼重ノ子時繼ノ子トスヘシ

諏訪神氏系圖ニ從フベシ

- 頼隣　刑部大輔　法名道海
  - 信貞　信濃守　一貞作員　法名道宗
    - 高遠ヲ領ス故ニ高遠ノ祖ト稱ス
  - 信有　信濃守　法名良淳
    - 滿有　次郎左衛門尉　法名心叟
- 政滿　信濃守　從五位下　法名雪庭
  - 諏訪大祝、諏訪氏ヲ亡ホシ其領地ヲ奪ハントシ文明年中政滿ヲ暗殺シ終ニ領地ヲ押領ス然レトモ家臣等再興ヲ謀リ終ニ本領ヲ取返セリ之ヨリ永ク領地ヲ失セシコトナシ
  - 頼滿　安藝守　從五位下　法名宗昌
- 頼隆　刑部太夫
  - 頼重　刑部太輔
    - 長岌　侍者
    - 武田信玄ノ妹ヲ妻トス、甲州板垣ニテ信玄ノ爲ニ暗殺セラル
- 滿隣　新次郎　法名竺溪
  - 頼重ノ叔父

頼豐 新六郎　越中守

滿隣一男

頼忠 中興初代　小太郎　安藝守　從五位下

甲州向山ノ娘ヲ妻トス

頼重自殺ノ後、諏訪氏ヲ繼クモノナキカ故頼忠諏訪氏ヲ繼ク德川家康ニ仕ヘ數々功アリ

天正十年信州一圓酒井左衛門尉領地ト爲リシトキ頼忠憤リテ酒井氏ニ從ハス依テ屢調停ノ上、終ニ諏訪郡ヲ元ノ如ク頼忠ニ給ハル爾來眞田攻メ長久手、小田原、奥州等ノ軍役ニ從ヒ功甚大ナリ

後武州奈良梨、羽生、蛭川ニテ一万二千石ヲ賜ハル、之レ諏訪郡ハ領地甚タ荒蕪シテ六千貫ニ充ツルノミナルニヨルト云フ

後又文祿元年上州惣社ニテ加增セラレテ移ル、是ハ舊領諏訪郡ト稻平等ノ價値ニ達スト云云七十一年ニテ卒ス

頼水 因幡守　從五位下

母甲州向山ノ娘

秀忠公ニ仕フ、慶長六年台命ニ依テ諏訪郡ヲ賜ハリ歸參、領地二万七千石外ニ眞田城ノ武具ヲ給ハル

元和元年中迄甲府城番、同四年筑摩郡ニテ五千石加增、寛永十八年卒七十二

頼定 久三郎

女子 土岐定義妻

女子 三枝守昌妻

忠澄 小太郎　生國上州惣社

女子 大久保長重妻

頼鄕 隼人正　生國同前

頼長 左門　生國信州諏訪

女子 山口但馬守弘隆妻

女子 右京亮　生國江戸

某

家紋白地ニ三葉黑梶、初メ梶葉

以上ハ德川幕府命ヲ傳ヘテ諸侯伯並ニ幕府ノ麾下、又諸大夫家等ノ系圖譜牒ヲ蒐集シ以テ編纂セシ所ノ內ノ諏訪氏ノ系譜ヲ抄出セシモノニシテ、出自ヲ清和源氏トシ、該傳書中卷百十一ニ載錄セリ、其系表ニ揭クル所ノ世系人名清和源氏滿快公ヲ元祖トナシ、中途ニ至リ手塚太郎信澄、信綱ト云人ヲ混入セリ、右信澄、信綱ハ大系圖ニモ手塚太郎トシ載記シ以テ盛重諏訪太郎後入道蓮佛ノ祖トス、此ノ盛重ハ諸先輩各其出自ノ不詳ナルニ歸シテ或ハ源氏出自トシ、或ハ諏訪下社金刺盛澄ノ男トナシ、或ハ又諏訪ノ支流トシ、諸論紛々歸スル所ナキモノ、如シ

飯田武鄉氏曾テ諏訪神家並ニ科野國造考ト云フモノヲ起稿シ予ニ其稿本ヲ示セリ、內ニ盛重出自ノ條ニ云フ（上略）手塚太郎盛隆（一ニ信澄）ノ子ニ盛綱（一ニ信綱）ト云アリ、其子ヲ諏訪六郎（一ニ太郎）盛重ト爲シタルハ不審ナリ、盛重ハ神氏ノ嫡流ニシテ諏訪大祝ナルコト東鑑、北條九代記、又神氏系圖神長筆記大祝立退覺等ニモ見ユ、何ソ金刺盛澄ノ子ナラムヤ、盛重ハ純粹ナル神氏ノ裔ナリトアリ、金刺古系盛澄ヲ盛隆ニ作ルアリ參照スベシ

尙諏訪上社服忌令曆仁元年戊戌十二月十三日、伊豆國北條左近藏人正信、使者トシテ當社ニ渡サル、大祝信時ノ子信盛舍弟盛重讀之云云ト見ユ、以テ盛重出自判明スヘシ、唯守矢氏記敎貞、貞方二名ヲ信時、信盛トス精信ニ近カラムカ

或一說ニ寬永中德川幕府諸家系圖傳ヲ編成スルニ方リ、諸家當時德川氏ノ威力ニ怖レ各幕府ノ意ヲ迎ヘ、猥リニ眞正ノ家系譜牒ヲ隱秘シ、清和源氏ヲ標榜シ以テ其同姓ヲ名乘リ、表面二心無キノ意ヲ示セルノ腐心ヨリ出ヅシ怪事ト云云

友人故鮎澤政彥云フ、大系圖ニ諏訪氏ヲ源爲公ノ子依田六郎爲實ノ子孫ニ係ケタルハ彼ノ爲公、諏訪神太爲仲ノ舅タリ、爲仲若年不慮ニ自裁シテ果テヌ、其子爲盛尙幼、外祖爲公ノ家ニ成人ス、其子孫或ハ爲實ノ養子トナリテ漸次繁衍セシモノカ、爲公ハ清和源氏其子爲實依田ヲ號トシ、信濃源氏ノ祖ト爲ル、其子胤國中ニ蕃殖シ其勢力他氏ヲ壓倒スルニ至レリ

或書ニ諏訪祝ハ元ト神氏ト稱シ、諏訪大神ノ神孫ナリ、信濃源氏ニ改メ稱スルニ至リ其ノ爲メ系圖、古文書等ヲ燔棄シタリト舊藩ニハ別ニ口傳アリト云云

仍テ以上ヲ概論決定スルニ諏訪氏ハ神氏ノ子孫ニシテ源氏ニアラズ、金刺氏ハ神八井耳命ノ胤ニシテ是レ亦源氏ニ非ルナリ

因ニ記ス、信濃源氏ノ系表ヲ略抄シテ諏訪氏出自僞作ヲ左ニ示ス

◉清和天皇——貞純親王（第六皇子トス）——經基——滿仲（武田、小笠原ノ祖）

- 滿快（滿仲弟）
  - 爲衡（中津乘太郎）
  - 爲扶（伊那太郎）
  - 爲邦（信濃村上）
  - 爲國——爲國——爲滿——爲公（右馬介　伊豆守　信濃守　從五位下　母河內守頼信女）

爲實 ── 實信 ── 信澄 ── 信綱 源氏ノ流
一ニ手塚太郎トス　一ニ手塚又太郎トス

爲基 片桐源八

爲氏 堤源三

盛重 神氏諏訪太郎
右兵衛尉
此盛重ヲ信綱ノ男トス偽作ノ發端ナリ

盛高 諏訪太郎左衛門尉

盛經 諏訪三郎
左衛門尉

宗經

補ニ云フ　以上源氏爲公ノ孫ト偽作ノモノ讀者注意ヲ拂ヒ能ク研究シテ取捨スヘシ

神氏支末苗字輯記

關屋、深澤、皆野、三塚、四宮、若尾、不覺、保科、神野 笠原、中澤、千野（千野又茅野）藤澤、松島、座光寺、栗原、上原、栗林、矢崎（一ニ矢島）風間 平島、平方、栗澤、遠山、向山、中村、西保、眞志野、眞野、脇間、薗屋、大妻、小島、中野、中島、禰津、浦野、大垣、有賀、平井、平井豆、神田、神内、知久、垣原、宮所、小坂、安倍、元澤、高遠、原、安部、

以上ノ諸氏ハ本編系表ニ現出セル所ニシテ其他神氏ノ一黨三十二家ト太平記ニ掲記シアルコトハ皆人ノ知ル所ナリ、其三十二家云云ハ南朝ニ供奉セシモノヲ擧ケタルニ過キズ

補ニ云フ　實ハ神氏ノ餘流眞ニ幾千アルカハ茲ニ明記スルコト不能仍テ他ノ類本又ハ見聞セシモノヲ本著ニ併セテ記スルコト左ノ如シ

栗田、三輪、箕輪、埴原田、一ノ瀨（保科氏ノ支流ト云フ）武井（武居トモ）安宿、足羽（基葉トモ越前ニ在リ今諏訪ト云フ）桑原、山ノ井（紀州ニ在リ栗田ノ支流ト云フ）花岡（小坂氏ノ支流也）關（有賀氏ノ一族）大平、大島、小野、林（若林中林上林等ノ一族ト云フ）小林、平林、周防、片倉、藤森、原、矢澤、宮下、宮崎、金山、津波木、岩波、高木、横田、海口、西條、櫻井、栗澤、福島、春日、大拙、宮坂、吉田（福島縣ニ在リ）小井豆、香坂、平栗、早出、濱、波間、古田、木村、大木（甲州ニ有リ）

右ノ内華族ノ林家モ同出ナリト、或ハ云フ林ノ一類ハ金刺氏ノ支流ナラムカト

補ニ云フ　華族ノ林家ハ武鑑ニハ小笠原家ノ支流トス

以上

亦左ニ列擧スル澤又何澤ト云フ名稱ヲ帶フル諸氏モ神氏支流ニシテ信、甲二ケ國ハ更ナリ上州、武州其他ニモ往々居住スルモノアリト聞ケリ、然レトモ是ハ出自明瞭ナラス、他日各氏號ニ就キ其本土及紋章等ニ因テ探査セハ大概其出自ハ知了シ得ラルヘキカ、今猶ヲ附シテ見安カラシム、他ハ普通民籍ニ在ルモノトス

△印ヲ冠セルモノハ既ニ本編系表ニ載錄スルモノナリ

△深澤、栗澤、中澤、元澤、藤澤、

×印ヲ冠セルモノハ略ホ出自ヲ知得ス（キモノ

×胡桃澤、栗澤、

□印ヲ冠セルモノハ多ク士族籍ヲ有シタルモノトス

□三澤（一ニ水澤）石澤（一ニ伊澤）柿澤、柳澤、澤、鮎澤、小澤、增澤、黑澤、矢澤、

○印ヲ冠スルモノハ各地方ノ各支社ニ奉職スル神職ヲ云フ

○鹽澤、宮澤、唐澤（一ニ柄澤）福澤、松澤、大澤、増澤、

右ノ外何澤ト稱スルモノハ各民籍ニ散在セルモノヲ云フ

谷澤（一ニ丹澤甲州ニ多シ）吉澤（一ニ芳澤各府縣ニ多シ）金澤（一ニ久保澤、信、上、甲、越、飛、濃、遠等ニ散在ス）柴澤、平澤、米澤、蕗澤、神澤、大澤、熊澤、駒澤（信、甲ニ多ク散在ス）西澤、北澤、奥澤、前澤、横澤（甲州ニ多シ）赤澤、蘆澤、白澤、樋澤、戸澤、立澤（一ニ高澤）岡澤、長澤、廣澤、尾澤、鳴澤、瀬澤、

此等諸氏以外

古澤、今澤（甲州ニ有リ）入澤、木澤、笹澤、田澤、野澤、菅澤、芹澤、有澤、味澤（一ニ蟻澤）二澤、櫻澤

右ノ外ニモ尚多カルベシ、又他氏ニモ同氏苗ヲ稱スモノ數多アルモノヽ如シ、案ニ此等氏苗者中ニハ何レノ時カ詳カナラザレトモ相互ニ來往婚姻等ノ機會ヲ得テ混同セシモノモアルヘシ、本氏ニ屬スルモノハ其ノ原ト諏訪ト佐波ト通音韻ナルヲ以テ直チニ本氏ヲ憚リテ特ニ其住所等ニ依テ稱號トナスモアリ、或ハ其時所位等ノ關係ト便宜トノ狀勢ニ因テ稱號ト爲セシモノモアルヘシ

神氏ノ餘裔ハ諏訪大明神緣起繪詞卷ニモ一族數多居ニ住于西國、北國ニ是皆恩賞之地、後胤數代相ニ續之ニ云云トアリ、是等ノ事態ニ因テ各府縣下ニ繁衍シ有ルナルベシ、

神氏支流諸家所用ノ紋章

但シ概知セルモノノミヲ擧グ

一穀（カヅ）葉之類

三枝葉穀、追穀抱穀、一本穀、一本穀根付、三本根付穀、以上ニ輪廓ヲ有スルモノモアリ、以下之レニ倣フ、又鹿頭ヲ添ユルモアリ

一柏葉之類

三ツ葉柏、根付柏葉、蘿付柏葉、一葉柏、抱葉柏、逆ヲ柏葉、逆柏葉（上総國一之宮領主千葉加納家ノ紋章）二葉ニテ幣ヲ外ニ出セルモノ

一鹿角之類

枝丸鹿角、片枝鹿角、抱鹿角（此紋ハ小澤金子氏ノ用ヰル章也）

一千木之類

一組千木、二組千木、（支流三輪等ノ紋）

一桔梗之類

一葉桔梗、二葉桔梗、花瓣桔梗（此紋ハ知久家ニ用フ）

一太鼓ニ撥一

子爵林家ノ紋章、此氏號ハ一ニ金剌出自トモ云フ

一車輪一ニ御所車

伊那郡知久家ノ紋章

一菱ニ穀葉

一鏡之類

菱形鏡、八菱形鏡

一跳ネ獅子ニ牡丹花

但シ諏訪氏ノ紋章トシテ室町御所ニ於テ紋章評決ノ者、鹿抱角ノ紋章モ同時評決ノモノ也（詳審類從紋章部ニ出ツ）

一五葉穀矢車形紋章

右ハ神氏ノ子胤安部家ノ紋章ナリ、武州岡部城主子爵ノ榮班ニ居ル家ノ紋章トス

一違井桁之紋章

奥州刈田郡白石藩主片倉家ノ紋章旗紋ハ鈎鐘也

一鷹之羽打違

伊那郡座光寺家等ノ紋章

一三連星三段ノ紋章　（縱横九星紋トモ云フ）

上総國飯野藩主二万石、子爵保科盛之助家ニテ用フル紋章ナリ、故ニ世人保科九曜ト呼ブ

補曰

信濃國造金刺姓一ニ神家ヲ稱シテ諏訪氏ヲ號ス、其ハ按フニ健御名方命ノ裔孫ト婚嫁ノ因緣アリシヨリ神氏ヲ稱スルニナム故ニ諏訪神家系圖ニ附帶シ以テ揭記スルモ敢テ不審カシキ事ニモ非ストシテ左ニ金刺系圖ヲ抄錄補記シテ參考トス

金刺氏略系圖

金刺姓科野國造祖

◉武五百建命

后神ハ建御名方命ノ裔會知早雄命ノ女阿蘇比賣命也

崇神帝ノ時來任、舊事紀神八井耳命十一世武五百建命磯城瑞籬宮崇神天皇御宇定ニ賜科野國造ニ云云、國造ノ居館地ハ下諏訪町字宮津子ト云フ是ナリト、或ハ云フ宮津子ハ隱退後ノ居地之レナリト、一古系健五百建命又名建磐龍命、阿蘇國造速瓶玉命ノ父神ナリ、子孫世襲シテ阿蘇國造ヲ奉スト即チ阿蘇男爵家是也云云

健稻背命

健甕富命

女子

建御名方命十九世建隈照命ノ嫡妻

諸日子命　一ニ武諸日命　又諸日別命

幼時喪レ父爲レ孤、建隈照命（姉嬪）取育レ之於レ是茨城國造許々男命（男一ニ意トス）長谷朝倉大宮（雄略帝）朝、拜ニ科野國造一、數年之内、許々意命、失ニ絞撫之道一、而去矣、諸日子命代拜ニ科野國造一、再襲ニ父健甕富命之業一也、

補ニ云フ　故飯田武郷翁所論（上略）健隈照命、科野國造健甕富命之女ヲ妻ルトアレバ、此頃ハ科野國造、諏訪神家ノ族ト親ク姻ヲ結ヒシ樣ナリ、偖國造健甕富命ノ子、諸日別命幼稚

ナリシニ依テ　朝廷ヨリ茨木國造之祖許々意命ヲ遣ハシテ科野國造ニ任シ給ヘルナリ、而シテ國造本紀ヲ按スルニ科野國造禪代ハ應神天皇御世頃ノ事ナルヘシ、尙國造本紀云フ、茨城國造ハ輕島豐明宮朝御世、天津彦根命孫、筑紫刀禰定ニ賜國造ニトアル此ノ筑紫刀禰ノ裔ナルヘシ、筑紫刀禰ハ常陸風土記ニ依ルニ、天津彦根命十四世ノ孫、建許呂命（十四世據ニ姓氏錄奄知造高市縣主條ヽ）有ニ子八人ヽ中男筑波使主、茨城郡湯坐連等ノ初祖トアル、筑波使主ト同人ニテ應神天皇御世ノ人ナレバ、許々意命ハ其ヨリ二三代ヲモ經タル人ト覺エタリ（下略）云云

叙上ハ飯田翁ノ所論ニテ、本編神氏系圖文中ニ神代之事幽邈而難レ記焉、傳曰諏訪大明神者（下畧）云云トアル所ニ揭記シアレトモ、金刺姓ト諏訪神家ノ族ト親ク姻ヲ結ヒシ樣ナリ云云トアルニ關聯スルヲ證スル爲メ復贅ノ嫌ヒアレトモ聊カ茲ニ加補セリ

- 莒止理命 ― 伊努古乃直 ― 世襲彦
  - 金弓乃直 ― 麻背 ― 乙頴
    - 八麿　類聚三代格弘仁三年大政官符及ヒ日本續紀等ニ信濃國當伊那郡大領外從五位下勳磯城島大宮御宇欽明天皇御世科野國造、爲ニ大舍人ニ供奉之、故貞ニ金刺舍人造姓ニ　小墾田大宮御宇敏達天皇詔而令レ祭ニ諏訪大神百八十神ニ奉ニ千代田刺忌串ヽ齋レ之矣
    - 目子

六等金刺舍人云云

- 鋤麿 ― 子虫 ― 石次 ― 男繼　外正六位上　諏訪郡大領
- 金福 ― 白虫　諏訪大祝 ― 廣前 ― 貞麿
  - 補ニ云フ　諏訪大祝トアルハ下諏訪大祝トスヘシ
  - 以下倣レ之
- 貞永 ― 一ニ貞長　左近衛將監正六位上 ― 貞繼　諏訪大祝　散位正六位下
  - 貞觀五年賜ニ姓太朝臣ヽ（三代實錄貞觀五年九月五日ノ條參照スベシ）一ニ弘仁、寛平ニ至ル大祝ト云フ　負ニ金刺舍人姓ヽ在職十九年
- 長清　諏訪大祝 ― 長頴　諏訪大祝 ― 盛友　諏訪大祝
  - 承平中ヨリノ任　天元年間ヨリノ任　長元中ヨリノ任
  - 一系ニ貞長ノ次ノ大祝トス

輔頼 諏訪大祝 永保中ヨリノ任

輔光 諏訪大祝 保安中ヨリノ任

光頼 諏訪大祝 承安、安元中ノ任

盛澄 一ニ盛隆

治承中ノ任

補ニ云フ　盛澄平氏ニ属ス、仍テ源頼朝ノ不興ヲ蒙リ捕ヘラレテ梶原景時ニ預ケラル、文治二年射藝ノ妙手ヲ以テ罪ヲ許サレ頼朝ノ家人トナリテ仕フ、御弓始メ射手數次勤仕、又建久三年頼朝善光寺參詣隨行、後老テ退隱本土ニ歸住、正治二年梶原景時滅亡ト聞クヤ舊恩ヲ報スル爲メ景時ノ靈ヲ鎭祭ス、是ヲ上座堂梶原塚ト云フ、其地下諏訪友之町ニ属セリ、近年下諏訪停車場ヲ設置スルニ當リ、梶原塚ノ碑石ヲ下諏訪小學校ノ西下ニ移シ祭ル今尚現立ス、碑石ニ上座堂梶原塚ノ文字アリ、按ニ此碑ハ後代ノ建造ト見ユ

一本金刺系圖ニ

⊙手塚太郎太夫 實名不記

補ニ云フ　明月記、三長記等ニ元久三年四月三日ノ條ニ、金刺左馬權頭盛忠ナルモノ見ユ出自未考、若クハ手塚氏ノ族ナラムカ、附テ以テ博考ニ供フ

太夫盛澄 大祝 ―― 太郎太夫盛綱

補ニ云フ　下宮大祝遠江權守權覺寺自筆、延慶五年五月一日云云トアル古文書中ノ諏訪七郎帝名盛綱トアルハ此人ノコトニヤ、東鑑ニモ此人ノ事往々見ユ

光盛 太郎

次郎 天

三郎

四郎太夫盛次 初メ盛以大祝 ―― 大祝盛任 安貞ヨリノ任

一古文書ニ建久二年二月二十一日ノ鎌倉府政所下文左ニ抄出ス

前右大將家政所下　捧　池五近永

可ニ早辨ニ濟諏訪下宮神領摠尻西條所當物事一副下御下文

右所當稱ニ作田不作之由一乍ニ耕作一田數追年不レ辨ニ濟所當一之由祝四郎太夫盛次所ニ訴申一也事實者甚不當也慥可ニ辨濟一也案又令レ追ニ捕百姓等一搜ニ取資財物一居ニ住鄉内一盛次可レ從男女十七人寄ニ事於左右一搦取之由訴申事實者早糺返之狀如件

建久二年二月廿一日

政所別當　前因幡守平朝臣廣元　案主　藤井俊長　鎌田新藤次

全主計允　藤原朝臣　行政　知家事　中原光家　岩平小中太

云云トアリ、依レ之觀レ是盛次下宮大祝タルコト炳乎トシテ見ルヘシ

又故中田憲信翁提供ノ金刺姓手塚氏ノ一系ハ左ノ如シ

⊙金刺宿禰諏訪大祝清主 ―― 有範 諏訪下宮別當

光清 手塚別當 — 光繼 手塚三郎 — 光賢 手塚別當次郎

盛賢 武井神次郎

是武井又武居氏之祖也云云

補ニ云フ　諏訪郡ニハ武居ト云フ地名上下神社ノ内ニ有リテ現存ス、建御名方神ノ武勇ニ因ミテ号ツクル所ト云フ、又建御名方神ヲ一ニ武居明神トモ云フ、最初鎮坐ノ地ナルカ故ノ稱トスト、故ニ共ニ氏號モ出ヲ、上社武居ハ家紋鉏醋樂、下社武居ハ丸ニ結鴈、又丸ニ菱等ヲ用ヰテ區別スト云云

蓮仲 諏訪大祝

寛元中ヨリノ任

盛基 諏訪大祝

文永中ヨリノ任

補ニ云フ　延慶年中下諏訪大祝遠江權守盛基入道權覺寺自筆之事、諏訪入道殿〔蓮仲〕下向之節五月會ニ諏訪十郎盛清三的以下ノ作物ヲ射ル、其時諏訪七郎入道〔谷水盛綱〕殿ノ許ヘ諏訪十郎ニ神妙ニ敷ヘタル由ノ御自筆ノ御感ノ狀ニ、七郎入道殿ニ盛久相傳スル間子息諏訪遊四郎殿彼ノ御狀ヲ所望シテ家ノ日記ニ副ヘテ是ヲ畫ク、但シ五月會ニ作物ヲ射ラレケル中ニ手挾ハ敷ヘサルニ依テ射サル由七郎入道殿仰セラレシナリ、盛基大祝殿御狀ヲハ遊四郎多年ノ間惜マレ申シ、カドモ盛久、故入道殿ヨリ流鏑馬ヲ相傳ノ間、頻リニ所望シテ正文ヲ是レニ留メテ案文ニ判形ヲ加エテ是ヲ遣ハシ候

延慶三年五月一日　　前遠江權守權覺寺　判

盛　久　居判

云云ト古文書ニ見ユ、依ツテ按スルニ盛基大祝在職ハ延慶中モ尙ホ奉仕セルモノヽ如シ但シ奥附末文ニ前遠江權守權覺寺判ト署スレバ或ハ退職後ノ自筆文ニヤ尙考ヲ俟ツ、或ハ盛久ヨリ指セルニ仍テ前遠江權守權覺寺判ト云フカ

盛久 諏訪大祝

永仁中ヨリノ任、歌人、玉葉集及ヒ後新

還和歌集ニ歌ヲ載ス

時澄 諏訪大祝

正中年間ヨリノ任

豊久 諏訪大祝

奥國中ヨリ應安元年迄ノ任

補ニ云フ　水戸藩士碩學故菅政友翁ノ編、征夷大將軍宮宗良親王事績考ト云フモノニ奥國二年秋、遠州井伊谷城陷落セシカバ親王駿河國安部城主狩野貞長ノ許ニ至リ數日御滯座、賊軍掃蕩ノ御謀略ヲ議シ、甲信地方ヲ歷訪マシマスベク、御出テ立チ富士山麓ヲ北進、甲斐都留

郡宇都城主富士大宮司ノ館ニ入ラセ玉ヒ關東防備ノ策ヲ授ケ夫ヨリ甲斐ノ北部ニ進ミ、白須ノ松原ニ於ケル景趣ヲ愛テ玉ヒ「かりそめの行きかよひ路とは聞しかといさや白須のまつ人もなし」ノ歌ヲ詠シ玉ヒ抔シテ諏訪ノ郡ニ移ラセ下諏訪社大祝ノ館ニ御滯在ナシ、駿州ヨリ送リ來リシ人々ヲ遣リ還スニ方リ、「富士のねの煙を見ても君とへよ淺間のたけはいかゝもゆると」ト一首ノ歌ヲ詠シ駿ノ貞長ニ贈レリ、又或夜親王下宮御寶前ニ通夜シ、國家平和克復ノ祈願ヲ爲シ玉ヘリシニ秋夜碧空一点ノ曇リナク冴ヘ互リテ清凉御肌エニ浸ミシカハ「すはの海や神の誓のいかなれは秋さへ月のこほりしくらむ」ト歌詠シ玉ヒ、尙千首法樂ノ詠歌ヲ祈誓シ玉ヒシト云云、偖又下宮大祝社頭ノ傍近ニ新ニ親王ノ御在所ヲ營ミ、之レニ奉遷シ以テ皇家復古ノ籌略ヲ奉伺セリト其御座所ノ舊址トテ長地村東堀區柴宮八幡社地、及ヒ傍ラニ御所ノ土手、御所清水、其他口碑ニ傳フル舊跡存ス、之レヨリ親王ヲ信濃宮ト奉稱シ信州ノ宮方諏訪神家ノ一族三十二家、滋野一族二十人、仁科、香坂、大妻、根津、高梨、伴野、村上等皆宮方ト爲リテ親王ニ供奉セリ、親王信州ニ御在スコト三十餘年ト諸錄ニ散見ス又贅スルニ及ハズ、而シテ當時下宮ノ大祝ハ時澄、豊久ノ二主ニ係レルモノヽ如シ、故ニ茲ニ附記シテ參考ニ供ス而シテ豊久觀應元年五月兵六千餘騎ヲ率キテ甲斐國洲澤城（今中巨摩郡源村ノ内ニテ須澤ト書ス古城址現存ス遠遠ノ地也）ヲ攻メ、高師冬ヲ亡ボス、延文二年四月攝州ノ役ニ參陣シテ功アリ、應安元年白華山慈雲寺ヲ剏立、一山一寧ヲ請シテ開山トス、同二年正月廿五日卒ス、事蹟ハ慈雲寺梵鐘ニ略彫ス就テ見ルヘシ、然ルニ狩南錄ニハ甲州洲澤城ヲ攻撃セシハ下諏訪大祝都神祇小副隆種トアリ又一ニハ正平六年六月下社祝神祇少副種隆（前記ト名字顚倒）六千騎ヲ率キテ甲州洲澤城ヲ攻メ高師冬ヲ擊殺ス、此時味方寄手ノ内ヨリ諏訪五郎眞種ナルモノ師冬ノ烏帽子タレハ、義トシテ共ニ自害スヘシトテ味方ニ暇乞シテ城中ニ馳入、師冬ト刺違ヘテ討死セシ云云ト記セリ、或人ハ此眞種ハ藤澤氏ノ人ナルヘシト云ヒ、又或人ハ下宮大祝神五郎左衛門盛世ナルヘシト云フ、是非未考、附テ云フ、延文四年十二月廿三日、足利義詮ノ南征中ニ諏訪信濃守ト云フアリ、又應安六年足利氏九州征伐軍ノ中ニモ諏訪氏アリ、下諏訪氏ハ北朝ニ隨從ノ事諸錄ニ記ス故ニ茲ニ附テ參考トス、下諏訪町慈雲寺記云フ、豊久甫テ八歳ノ時、諏訪大神ノ託宣ヲ以テ延慶二年巳酉五月五日一宇ヲ創設ス、之レヲ當山ノ濫觴トナスト、龍門夜話云、又信州諏訪郡主金剌滿貞居士、號ニ一了、參ニ一山、悟入、山付レ衣、爲レ信、創ニ慈雲精舍、請レ山、主レ之（下略）開基金剌豊久應安四辛亥年正月二十五日薨ス、法名慈雲寺殿前大祝金剌禪源徹心大禪定門云云

基久 諏訪大祝

基澄 諏訪大祝

基春 諏訪大祝

應安、至德、明德迄ノ任　應永中ヨリノ任　文安中ヨリノ任

盛昌 諏訪大祝

昌春 諏訪大祝

晴長 諏訪大祝　從五位下

文正中ヨリノ任　永正中ヨリノ任　大永ヨリノ任　永祿六年十月廿一日叙任

豊保 諏訪大祝　右馬助

天文中ヨリ任、在職中軍旅ニ鞅掌セルヲ以テ神職ハ金剌善政ニ委任ス、善政ハ武居祝ノ祖也

堯存

父豊保ト俱ニ軍兵ヲ率キ武田信玄ニ抗シ屢々相戰ヘリ、信玄誘降ヲ勸ムル事數次ナレトモ遂ニ降ラズ、家ヲ擧ケテ國ヲ去テ其終ル所ヲ知ラズト、或ハ云フ、薩州ニ下リ島津家ニ客タリ、食祿七千石ヲ島津家ヨリ給セラレ、終ニ家臣トナリテ仕フ、子胤相承今尚薩州ニ住居スト、又分創數戸アリ各諏訪ヲ氏トスト

補ニ云フ　金刺惣領家堯存父子、本土ヲ去テ後ハ下諏訪神社神役ハ空名無人ノ大祝職ヲ置キ神事ノ時ハ神職ノ内、或ハ高島藩老職ノ中ヨリ滿十五歳以下ノ冑子ヲ選出シ、之レヲ大祝ト崇稱シ首座トナシ祭儀ヲ執行セシト、而シテ永祿八乙丑年十一月一日、武田信玄諏訪上下社神事祭典再興條令ヲ制定發布シ、下諏訪宮ハ武居祝（今井氏ニ稱ス）大和監物、高木喜兵衛、辰野傳兵衛、竹居宮内丞（武ヲ竹ニ稱スルハ信玄ノ命スル所ト）諏訪刑部左衛門尉ノ六氏ヲ以テ宮奉行ト爲セリ、而シテ金刺善政ノ男豊政ヲ假リニ大祝職ヲ襲カシム、其後ニ至リ更ニ空名無人ノ大祝職ヲ置キ是ニ武居祝以下五官（五官モ後ニ姓氏交代セリ）ト云フアリテ神役ヲ奉行シ、明治更始迄ニ至レリ、然レトモ金刺姓本州所在ニ殘存セリ、凡二十年ノ經歴中傍系繁殖スルコト幾千ヲ以テ數フベキニヤ、實ニ科野國造ノ祖建五百武命ノ餘恵天地ト共ニ窮リナカルヘシ、眞ニ敬虔スベキ極ト云フヘシ

◉金刺兼遠（信濃權守）

補ニ云フ　諸錄ニ兼遠木曾宮ノ腰ニ居ル、又駒岳城ハ兼遠木曾冠者ヲ養育セシ所ト云フ、尚依田城ト山吹城ト對照シテ見ルベシ

兼光（樋口次郎）

補ニ云フ　信濃佐々禮石ニ木曾宮ノ腰ニ城テ居ル云云

兼平（今井四郎）

補ニ云フ　信濃佐々禮石ニ更科郡今井城兼平始テ城テ居ル、仍テ今井ヲ氏トスト、又一說ニハ木曾長野郷今井ニ居ル故ニ氏トスト云云

女子（巴ノ前）

木曾公ノ妾

補ニ云フ　木曾將軍粟津戰役ニ臨ミ諭シテ舊里ニ歸ス、巴剃髮尼トナリ公ノ冥福ヲ祈リ越

兼重

父京都ニテ討死ノ時六歳也、建久九年源右府頼朝ニ召サレテ仕ヘ父ノ遺領ヲ給ハリテ伊那郡樋口城ニ住ス

補ニ云フ　古城址トテ樋口荒神山ノ南下平坦展望ノ佳所其レナリト傳ヘ云フ、一株ノ古松存スルノミ全廓悉ク田園ニ化ス、木曾公四天王ノ城地モ天龍ノ水ハ晋筑ヲ鳴ラシ記念ニ殘ル松籟昔時ノ餘韻ヲ奏スルノミ

中國石黒氏ニ依テ一實圓頓ニ日モ足ラズシテ終ル九十三歲

兼朝 ― 光久（長門守）― 光賴 ― 光時

居城ヲ大石ニ移ス

光平 ― 光家 ― 光安 ― 光忠

光信

天文十三年武田晴信ノ家臣、秋山、馬場等ノ爲メ攻落シ遂ニ降參ス、同十八年城地破却

光守 ― 光敎

保科正直ニ仕ヘ部將タリ

保科正之ニ從フ、後保科氏羽州山形城ニ移ル、光敎之レニ從フ、子孫連々今ニ至ルト云フ

補

信濃國官社諏訪神社神長官守矢家略系圖（官幣大社諏訪神社所藏本抄出）

◉洩矢神

補ニ云フ　諏訪郡川岸村、村社洩矢社由緒書（上略）ニ藤島明神、洩矢神（御子神御相殿）守宅神、諏訪神社舊記ニ曰ハク、藤島明神、往昔洩矢ノ惡賊神居ヲ妨ケントセシ件、洩矢ハ鉄輪ヲ持シテ爭ヒ、明神ハ藤枝ヲ取リ是ヲ伏シ給フ、終ニ邪輪ヲ降シテ正法ヲ興ス、明神誓ヲ發シ藤枝ヲ投ケ給ヒシカバ、則チ根ヲ挿シテ枝葉榮エシメ花蕊アザヤカニシテ戰場ノ驗ヲ万代ニ殘ス、藤島明神ト號ス所以ナリ、又諏訪神社舊記ニ云ハク、洩矢神、御名方刀美命、逃ニ出雲ニ到ニ于洲羽海ニ之時、有ニ洩矢神ニ居ニ海畔ニ（橋原ニ社有リ）拒レ之、以ニ藤枝ト鉄輪ニ爭ヒ雖レ有ニ互相爭事ニ、遂服ス御名方刀美命ノ御稜威ニ、誓曰奉ニ此地ニ永致ニ命祭政ヲ御名方刀美命歌ヲ曰ク、「鹿兒弓乃眞弓乎持豆宮滿茂里、矢竹心爾仕倍摩都連」ト挿ニ彼藤枝ニ、後繁茂ス、曰ニ藤洲羽森ニ、俱謀氏國作ルニ有ニ一男一女ニ、一女曰ニ多滿留姫ニ嫁ニ大神ニ、生ニ御子出早雄神ニ、守矢神、生有ニ靈異幹力ニ代レ父、名レ之曰ニ千鹿頭神ニ、（下略）云云トアリ、此ノ由緒書ニ藤嶋明神、洩矢神（御子神御相殿）守宅神ト記セルハ三柱ノ神ノ如クニ見ユ、割註ノ御子神御相殿トセルハ何神ノ御子神ヲ相殿ニ祀ルニヤ少ク解シ難ク覺ユ、洩矢神ノ御子神トスレバ本由緒書ノ末尾ニ記セル有ニ一男一女ニ、一女ハ多滿留姫トセル一男一女ノ二柱神ヲ指セルニヤ、一男トハ千鹿頭神カ、出早、守宅ノ二神カ、守宅神ト割註ノ下ニ錄載セルハ洩矢神ノ御子神トナスニヤ、錯雜シテ解シ難キ記載ト覺ユ、又藤嶋明神トハ藤枝ヲ投ケ給ヒシモノ、根付キ榮エタレバ靈有リトシテ神

ニ祀リシ如ク見ユ、是事ハ諏訪繪詞ニ出ツ、而シテ藤島明神ハ湖南村田邊ニ鎮座諏訪上社ノ攝社ナリ、本由緒ニ記セル藤嶋明神ト同神ニテ分座カ本座カ詳カナラズ、上諏訪神社ニテハ藤嶋明神ヲ一ニ木花開耶姫命ト云フ、社例ノ御田植神事ヲ是ノ社前ニ於テ奉仕セシ事ヲ記シテ七不思議ノ一トス、當地藤嶋神ハ昔蔓藤天龍川ノ西岸三澤ノ荒神社ニ根アリ、川ヲ越エテ洩矢社々木ニ纏ハリ航舟ヲ妨ケシヨリ、伐採セシカバ神罰ヲ得テ死人出シト、其說ハ今モ唱フ神名是ニ出ツルカ

守矢神

諏訪郡守屋山上ニ鎮座、三代實錄貞觀元年二月十一日從五位上ニ昇階

補ニ云フ　守屋山今ハ諏訪ト上伊那兩郡ニ跨ソリ、靈驗顯著ノ神ニシテ農作物豊穣ノ守護神ト云フ、故ニ麓下ノ農民春播種ノ候ヨリ秋收獲ニ至ル六ケ月輪番日參ヲ欠カス豊穣ヲ祈ル爲メ登山ス、俚歌アリ云フ「尾尻はれ守屋へ雲をさき上けて百舌鳥さちめかは鎌を磨くへし」ト云云、其意農始ノ時候ト怠業トヲ戒メシモノナラム、又云フ、永明村天白七五三社由緒ニ、宇宮渡祭神矢塚男命此地ニ穴居ス、健御名方命此國ニ到リシ時洩矢神ト弓矢ヲ以テ戰フ、矢塚男其矢ニ中リテ死セントシ、建御名方命ニ云フ、我ハ大神ニ隨フベシ、一女アリ献ラムト言ヒ終テ死ストノ口傳アリ（下畧）云云トアリ、矢塚男洩矢神ナルカ或ハ從神カ

千鹿頭神　別名内縣神

補ニ云フ　内縣神ハ諏訪郡ヲ統治シ玉ヘリト、弟神ノ外縣神ハ伊奈郡ヲ大縣神ハ佐久郡ヲ統理セシト云云

兒玉彦神

補ニ云フ　此神ハ片倉邊神ノ子ニシテ上諏訪町湯之脇ニ鎮坐、靈石ヲ以テ神体トス、靈石ノ形容上卷ニ既揭セリ、參照スヘシ

八櫛神

補ニ云フ　三代實錄貞觀五年二月從五位下ヲ授カル、此神水内郡樂山上ニ鎮坐、石像ヲ以テ神体トス、俗ニ「ぶらんど」藥師ト稱ス

以下一千三百餘歲、三十餘代爾志氏武麻呂ナル者嗣ニ家職ニ止家之口傳ニ云フ云云トハ本系闕ニ添記スル所ナリ

武麿

三十二代用明帝御宇、物部守屋大連爲國殞ニ身於河内國澁川館ニ、兒孫逃匿ニ葦原ニ或逃亡、長子雄君入ニ美濃ニ、次子武麻呂入ニ信濃洲羽ニ、來豆娶ニ神氏女ニ嗣ニ長職ニ

種雅

守彦

因ニ于感夢ニ立ニ大連之廟ニ氏祭留

麻毘子

此時　勅使來豆定二神樂諸祭禮式一、次

子重彦有レ故爲二一氏祖一

神太麻呂

大進

彦丸

清實

正員

延暦中ノ人飯田郷ヲ給ハレリ

此時御衣着祝有員大祝ニ立、

授二社例及ビ十三所行事一從レ是

代々如二此例一

時實　初メ有實

宗實

繼實　後改號定之

正員無レ子養二大祝有員之子一、爲レ

時實奉二遺言一豆立二其弟一、

子、及二晩年一、有二二子一、臨終謂二

季弟出氏立二他氏一

嗣子時實一曰、使二兒繼二家職一

直實

員實

滿實

守員　後改守實

爲實

時實　後改時眞

弟眞保子保忠無レ子故兼二白河祝一

眞保

寛治中依二戰功一賜二藤原姓一、領二於筑摩郡白河郷一

爲二白河祝一

信實

盛實

頼實　後改直實、復改頼實

建久三年、將軍家以二執權大江廣元一、賜二祭典下知狀一、源頼朝、伐二于平族一之時、薩摩守忠度

季子匿二信濃洲羽蔵萱止云所一結二草菴一居、迎取養爲レ子以レ女妻、故十文字下開菴乎画岐爲二幕

之紋一、其冬亦迎二其僕立石隼人者在レ山一、爲二家臣一嘉禎四年之冬、物忌令定矣

重實　後改政實

頼實無レ子、使二盛實弟襲一其職一、任二信濃守一

信實　志摩守

惟家

家忠　彦九郎

有忠　十郎

流鏑馬之達人也、寛元年中、

仕二官鎌倉一

依二鎌倉府之下知一、白川祝、

號ニ白川越後守藤原惟家ニ、

重實 後改正實

寶治元年、將軍賴嗣以ニ北條時賴ニ賜ニ下知狀ニ、水內郡內北高田鄕內北堀爲ニ神領ニ、

朝實

文永八年將軍宗尊親王以ニ北條武藏守、同相摸守ニ、賜下水內郡高田兩鄕、永可レ令ニ神領ニ之下知狀上

賴實 盛實 眞賴

正應四年五月六日將軍久明親王以ニ北條武藏守、同相摸守ニ寄ニ進水內郡內和田鄕ニ

有實 時實 賴實 某 權九郎 副祝ト成ル

建武元年九月廿六日自ニ南朝ニ、賜下御頭造宮神領神田諸宮、公事可レ致ニ成敗ニ之下知狀上

氏實 越後守 正四位下

康曆二年七月十八日叙任、至德四年從ニ將軍足利義滿ニ、寄ニ進許多神領地ニ、

氏信

嘉慶元丁卯年九月二十六日、戰ニ死府中熊井原ニ、

貞實 滿實 繼實 神平 宮內少丞

文明三年四月二十六日任ニ信濃守ニ

文明十八年正月十六日叙任

有實 六郎 初メ號ニ義實ニ 後曰ニ貞書記ニ 實ハ繼實弟

兄繼實之長子幼而不レ能レ即レ職、攝レ任以俟ニ其長ニ、

賴眞 正三位

累歷、天文二十二年叙任、以ニ般舟院ニ奏奉ニ請諏訪神名ニ、此時 後奈良天皇御宇也 帝固嘉ニ助ニ其造宮之資ニ、乃奏賜ニ 御宸筆ニ、

補ニ云フ 賴眞博學、就職前後自ラ見聞セル所ヲ筆記シテ子孫ニ傳フ、之ヲ賴眞日記ト云フ、因ニ記ス、當一社中ヨリ皇室御造營ノ資若干金ヲ献ス、賴眞參內シテ献金ス、故ニ高位ニ叙スト

幸實　彦九郎　實ハ貞書記之子

叔父頼眞從ニ甲斐武田氏ニ、赴ニ戰地ニ、故幸實留守ヲ務ニ神長官職ニ、後移居爲ニ武田氏之家臣ニ、

氏實

實ハ幸實ノ弟也、頼眞、幸實赴ニ戰地ニ之時、留守ヲ務ニ神長官職ニ、專主ニ祭政ニ、後屬ニ頼忠ニ、

信實　後改信眞　犬太郎　從五位下宮內少輔

實ハ頼眞之長子也、武田晴信賜レ名曰ニ神平信實ニ、永祿二年八月二日叙爵、賜ニ座次之永宣旨ニ、

補ニ云フ　武田晴信命名書アリ

重實　民部　始名勝實

副祝宗平之時、有レ故次子內記重辰繼ニ其職ニ、正保二年賀ニ正於江府城ニ、同二月十六日奉レ獻ニ御玉會ニ、從レ是年々以爲レ例、慶安元年社領賜ニ千石ニ、

補ニ云フ　三代將軍家光公ノ朱章ニヲ諏訪上社領ノ章ナリ、當時全國社寺ニ寄附ス、年月日略ホ同一ナリキ

政實　民部　一ニ政眞　正六位下伊賀守

寛文六年叙任

盛眞　民部　後改盛實

元文三年戊午二月二十八日卒

惟實　後改實胤　主税

寶曆八戊寅年卒、御柱年ナルニ因テ別廟ニ葬ル

實綿　岩江

實ハ大祝頼紀ノ子也、實友養爲レ子女以ニ末女ニ、文化十四年八月十四日卒、行年五十六歲

實延　主殿

嘉永七甲寅年七月廿二日卒、御柱年ナルニ因テ買地シテ本廟ニ葬ル、行年六十九歲

實顯　眞賢木　初メ宮內正誼

實ハ禰宜太夫矢島正敏長男、實延養テ爲レ子一女ヲ以テ妻トス

實友　主殿

寛政六甲寅年八月十九日卒、行年七十五歲、御柱年ナルニ因テ買地シテ本廟ニ葬ル

實久　幼名靜馬　篁山ト号ス

母ハ祖父實延ノ女

篁石翁ノ門弟トナリ繪画ヲ學フ、其技巧見ルベキモノアリ、惜哉夭折ス、實子無キヲ以テ

弟眞幸ヲ養テ子トナシ家祀ヲ嗣カシム

眞幸　實ハ實久弟

守矢氏舊神長官家ノ現戸主也、現今長野高等女學校教諭ヲ奉職ス

遠祖

◉八杵命

健御名方命之神兒也

天正十年織田右府、武田氏征討之節當社災上、守ニ神輿一、而籠ニ于守屋山一、當ニ此時一、所持之系譜燒失仍而古代之事不詳

補ニ云フ　大日本史神祇志ニ阿波國八杵神社（今在ニ宮内村一稱ニ八杵明神一舊爲ニ竹原莊十八村ノ氏神一）

蓋祀ニ建御名方命曾孫八杵命一（延喜式神氏系圖）元慶七年自ニ從五位下一、加ニ從五位上一、（三代實錄）延喜制、列ニ小社一（延喜式）云云トアリ、當家ノ遠祖ハ即チ此神ナリ、但神氏系圖及諏訪神系圖等ニハ建御名方命ノ御子神トス、大日本史ニ曾孫トセルハ恐ク誤リナルベシ、尙阿州ニハ建御名方命及ビ同神ノ孫神、伊自波夜比賣神社等アリテ共ニ官社ナリ、孰レモ上卷ニ揭ケタリ就テ見ルベシ

又故飯田武郷云フ、神氏一族ニ八木氏アリ、小諸藩士ニ八木氏ヲ稱スル人アリ、同族ニヤ、而シテ此神ハ諏訪郡四賀村神戸區鎭座村社タリ、又諏訪上社攝社若宮社祭神十三柱ノ内ニモ齋ク神ナリ

神胤胤　中興初代　禰宜小出美濃

妻擬祝貞滿女

補ニ云フ　此人ノ名字嵐嵐ト同字ヲ以テ名ツク、恐クハ一字ヲ誤ルナラム、今材料發見セズシテ訂シ難シ、君子ヲ俟ツ

神廣嵐　禰宜小出比禮雄

女子　擬祝貞則妻

稻摩呂

伊藤市兵衛貞景養嗣子

神貞文　禰宜小出伊豆　正六位下

妻副祝重辰之女

眞貞榮　禰宜太夫　小出玄蕃允

妻伊奈郡小出村工藤清滿女、後罷レ職小出村ニ隱退ス

神重秀　禰宜太夫　初メ守屋彦太郎後內記

實ハ副祝從辰ノ男ニテ禰宜職ヲ次ク、此時廢ス小出氏ハ改ニ守屋一

妻先代貞榮ノ女

神好重　禰宜太夫　守屋采女

女子　從ニ於祖父一小出村ニ退ク

萬次郎　權祝養子ト成ル

神重與　禰宜太夫　守屋采女

實ハ副祝英紀五男

妻矢島氏ノ女

神宣嵐　禰宜太夫　守屋要人

妻濱氏ノ女

神安貞　禰宜太夫　守屋要人

妻和田氏ノ女

神弘文　禰宜太夫　守屋要人

明治初年四方ヲ周遊志士ト交ハリ維新更始ノ創造ニ與リテ日ヲ消ス、數年ヲ經テ歸來シ一子健吾ノ保育ヲ爲シ居ルコト數年、又去テ東京ニ移リ專ラ健吾ノ教育ヲ事トシ老テ彼ノ地ニ歿セリト

健吾

父弘文ノ保育ニ依テ人ト爲リ今米國ニ徙居ス、其名聲人ノ儀表タリト

補ニ云フ　此人生ルヽヤ母ヲ失ヒ、家僕三嶋藤兵衛ナルモノ襁褓ノ內ヨリ介抱シ、隣接ノ乳汁アル婦人ニ請フテ哺乳ヲ得能ク健全ニ成育セシメタリト云フ、三嶋家僕ノ心勞ヲ盡セシコ

ト眞ニ生母モ留ナラザル慈德ナリトテ今ニ鄕里ノ口碑ニ存ス、且ツ生計ハ窮迫シテ時ニ餒腹ヲ抱キ天ヲ仰キテ怨ムカ如キコト屢々ニシテ止マス、其困苦ヲ厭ハス、又風雨晝夜ヲ分タス家僕三島ハ嬰兒ヲ負荷シ乳婦ノ有ル家ヲ歷訪シ哺乳ヲ請フテ兒ニ飽カシム、現今ノ如ク人工ノ哺乳品絕無ノ時代凡ソ三年間兒母ト爲リテ努力シ、能ク嬰兒ヲシテ尋常ニ育成セシメタリ其他家計一切ヲ一身ニ負フテ公課モ人ニ先ツテ盡シ、他人トノ交際モ欠点ナク勤メタリ、實ニ得難キ義僕トシテ賞スヘキニコソ、今此義僕幽界ニ去テ在ラズ、澆季ノ世、人宜シク神明トシテ則ルベシ

補

官社諏訪神社權祝矢島家略系（同上抄本）

⊙池生神

健御名方神ノ御子ナリ、池生若御子神世々相副來ル、又大神ノ祭祀ヲ掌ルト云フ、此間數代アリト雖モ不詳、神若丸ニ至テヨリ十二代ヲ經テ天永二年繼重磯並邊ニ營居テ祝職ヲ繼グ

補ニ云フ　諏訪郡境村內池之袋鎭座、池生神ノ由緒ニ權祝神姓之遠祖也、舊記ニ信濃國諏訪郡池之袋村ニ社アリ、元慶五年十月從五位下ヲ授ク、夜神磯魚申下シトアリ、三代實錄元慶五年十月九日甲申授ニ信濃國正六位上池生神、御厩中央御玉神並從五位下ニ云云

繼重 八嶋三郎
繼ニ祝職一

繼貴 八嶋太郎
繼レ職、無ニ男子一、養ニ海野信濃守幸親之子一、爲レ子、以レ女妻レ之

行重 稱ニ矢嶋四郎一
武勇强力之人也、以ニ矢嶋一爲レ氏繼レ職、

行繼 太郎次
繼レ職、

重隆 平三郎
有レ故仕ニ官鎌倉一、

重廣 平四郎
實ハ行繼之弟也、爲ニ兄嗣一

繼教 太郎
繼レ職

正教 右馬助
繼レ職、弓馬之達人也、正嘉四年七月御射山獵ニテ獲ニ獸類一多シ

正辰 庄太
繼レ職

正忠 六郎左衛門尉
繼レ職、正平十年十月戰死
補ニ云フ 正平十年乙未八月、諏訪祝矢島左衛門尉正忠府中ニ發向、一族同美作守滿綱、同山城守光政、同讚岐守政賴、同勘兵衛尉助成、同伯耆守友幸、同南枝軒入道同桑春入道、同神次郎維正、三輪知家、栗田寬範入道、越後守爲賢、藤森次郎入道貞景、小出、藤澤、千野、香坂、平栗、早出、上原、金子等ノ衆從諏訪打立、府中勢者、小笠原信濃守長亮、坂西、麻生、麻澤、山家、平瀨、吉野、新井、赤澤等桔梗ヶ原陣取、同月二十日有ニ合戰一、敵味方死人數多

正藤 千次郎
大隅孫三郎入道ノ養子

政資 兵部
繼レ職

政友 兵衛 後沙彌號ニ桑春一
左衛門尉爲ニ流矢一被レ遂ニ討死一候畢云云、大日本史ニ正平十年八月征東將軍宗良親王起ニ兵信濃一、諏訪祝某、仁科某應レ之（下略）云云トアリ、按ニ矢島正忠以下此戰ヒニ參加セシカ、附ヲ博考ニ供フ

政孝 幼名新次郎 五郎太夫
繼レ職

政繼 幼名近長丸 左衛門尉
繼レ職

賴綱 次郎三郎 美作守
爲ニ奉行職一

繼政 幼名大石丸 善太郎
繼レ職

繼高 秀三郎
文明十二年八月、合ニ戰仁科氏一敗走之時負ニ深手一、死

政滿 六郎 權阿彌

繼レ職、享祿三年四月五日歿、壽六十三

政綱 傳左衛門 剃髮ト心入道

繼レ職、甲州韮崎合戰ノ時流矢ニ片目ヲ失フ、永祿二年十二月廿一日卒、行年六十九

政興 又次郎

屬ニ武田晴信一、瀨澤合戰ニ討死

政基 捨五郎

兄政興討死ノ後繼ニ其跡一

忠政 幼名鶴若丸 源次郎 太郎左衛門 次郎左衛門

忠綱 吉重郎 典左衛門尉改重綱織部丞

繼レ職、天正十八年十月五日行年六十七歲卒

補ニ云フ 諏訪郡宮川村杖突嶺下神袋三社由緒ニ同社御社宮司社ト云フアリ、諏訪上社權祝神袋館ニ居ル則チ矢嶋典左衛門尉神忠綱代天文二十二年迄數代神袋館ニ居リ其祖神トシテ構內ニ祭ル所ナリ、普通御社宮司社ト異ニシテ此御社宮司社ハ池生神及ヒ其御子神ニ限リテ祀ルモノト云云

資綱 兵部 河內守

屬ニ諏訪頼忠一、伊勢崎合戰ニひわ毛馬ニ騎シテ戰死ス、依テ後代ひわ毛馬ヲ乘馬ニ用ヰルコトヲ禁ス

繼レ職、無ニ實子一、日根野織部正老臣三上久成ノ子ヲ養子トシ、弟滿綱ノ女ヲ嫁ハス、忠政元和四年正月九日卒、行年五十二歲

滿綱 勝若丸 隼人 傳左衛門

爲ニ叔父資綱嗣一、寬永十年四月八日歿、行年六十四歲

綱政 傳左衛門 宮內

繼レ職、謁ニ德川將軍一、從レ此代々每五年有レ之明曆三年正月晦日歿行年六十三歲

廣政 幼名猪之助 宮內少丞 市郎左衛門 正六位下

繼レ職、寬文七年四月十二日叙任、寶永六年八月九日卒、壽九十一歲

正次 新五郎 平內

保科肥後守家臣

正運 源之丞

松平阿波守家老職

政賢 幼名辰之助 改正庸 齋宮 宮內

繼レ職、無ニ實子一、禰宜太夫守屋重秀ノ次男ヲ養子トス、寶曆五年八月十七日歿、壽九十三歲

正珉 隼人 左京

繼レ職、明和八年七月二十八日歿、壽六十一歲

正 倫 新十郎

保科氏家臣、矢島新左衛門ノ養子ト成ル

正 郷 幼名方五郎 和助 勘解由 左京 正六位下 能登守

繼ル職、寛政五年九月二十五日叙任、文化十年八月三日卒、行年七十五歳

正 敏 幼名樓三郎 左京

繼ル職、子息宮内正誼神長官守矢實延ノ養子、嫡子鐵之助早世、依テ下諏訪社禰宜太夫桃井保高ノ次男ヲ養子トナス、且祖先廣政之統緣、井手成美ノ女子ヲ娶リテ嗣子正方ニ配ス、安政四年七月十一日歿、行年七十九歳

正 方 左京

繼ル職、明治二年三月十六日京都ニ於テ歿ス、行年四十七歳

正 守 幼名志摩 志麻根 正八位

繼ル職、維新革命後官幣大社諏訪神社禰宜ニ補任、後依ル願辭職、現戸主ナリ

補

官社諏訪神社舊擬祝家略系 （同上抄本）

遠祖者當社御子神、別水蒼命ノ神孫ト申傳ヘ來テ系譜等所持シアリシニ天正十年織田右府武田氏征討之砌當社炎上、守ニ護羽車神實ヲ、籠ニ于守屋山ヲ、當ニ此時ヲ、家族散乱、家之重寶、系譜等不レ殘燒失ス、故ニ審カナラズ、依レ時俗苗ハ換ヘタレトモ前記ノ通リ神孫ト申シ傳ヘ來レリ、當今ニ至ルモ姓ニ神ノ字ヲ書シ來レリ

◉神貞滿 俗名小出舍人

天正十八庚寅年三月廿一日死、歳五十九

貞親 俗名小出主膳

實ハ副祝昌親ノ次男、天正十八年庚寅八月襲レ職、慶長十七壬子年六月退職、元和三丁未年五月十六日死、年六十四、妻貞滿女

貞則 俗名小出靱負

慶長十七壬子年六月襲レ職、寛永八辛未年九月十一日死、年四十六

貞辰 俗名小出舍人 正六位下 和泉守

寛永九壬申年十月襲レ職、寛文七丁未年叙任、元祿三庚午年九月二日死、年七十一

貞好 俗名 伊藤主膳

實ハ日根野織部正浪士、伊藤市右衛門次男ニシテ嗣養子ト成ル、元祿三庚午年十一月襲レ職、寛延元戊辰年閏十月退職、同二己巳年四月十三日卒、歳七十五、妻貞辰女

定該 俗名 伊藤監物

實ハ諏訪出雲守家臣、小林岡右衛門六男、寛延元戊辰年十一月襲レ職、安永九庚子年正月二十二日於ニ江戸一死、年四十八

定靜 俗名 伊藤縫殿

實ハ諏訪安藝守家臣、波多野左膳次男、安永九庚子年十二月襲レ職、文化七庚午年十一月退職、文政七甲申年九月廿九日卒、年七十六、妻定該女

貞章 俗名 伊藤桂木

實ハ神長官實綿次男養嗣子ト成ル、文化七庚午年十一月襲レ職、明治二丁巳年十一月退職、妻ハ諏訪伊勢守家臣松島元碩政長ノ女

定之 俗名 伊藤守禮

明治二丁巳年十一月襲職、而ルニ明治維新改正ノ令ニ依テ家職ヲ廢止、尋テ家祿ヲ奉還シ士族籍ニ編入セラレ後家名ヲ養子愛丸ニ讓ル、明治三十九年八月歿ス、年八十一

愛丸

實ハ京都高野子爵家（舊公卿知行高二百六拾壹石餘）保美ノ三男ニシテ養嗣子ト成レリ、現今官幣大社諏訪神社禰宜ヲ奉職中、當家ノ戸主ナリ

補ニ云フ　高野保美卿ハ公家中御門家、藤原姓ニシテ慶應公家鑑ニ高野從三位保美卿、知行高百五十石、京都梨本町東側南角居住、兄ハ高野從四位下右少將保建朝臣トアリ、伊藤愛丸君ハ前記少將保建朝臣ノ實弟ナリ、又明治三十三年七月發兌ノ華族名鑑ニハ高野宗順子爵正五位貴族院議員、舊高百五十石、現石二百六十一石、京都市上京區新烏丸頭町二十二番戸居住云云トアリ

補

官社諏訪神社舊副祝家略系

（同上抄本）

遠祖

⊙片倉邊命

健御名方命ノ御子也、當副祝家ハ此御子神ノ子孫ニテ系譜所持シ來リシ所數度之兵乱且天正十年織田右府武田氏征討之砌當社炎上、神輿ヲ守リ守屋山ニ籠ル、此時ニ方リ家ノ重寶、系譜等燒失ス、偶々殘ル處ノ舊記ヲ揭ケテ系譜ト爲ス、故ニ數十世ノ間不詳

神胤重　武居隼人　副祝

延久五癸巳年立職、娶ニ中西氏女一　武居丘ニ移ル、仍テ又武居氏ヲ稱ス

重親　七郎兵衛

繼ニ原氏一、後胤鎌倉ニ出仕

景廣　右馬助

景俊　大炊助

景久　亦太郎

一族出ニ仕鎌倉一

宗綱　平六郎

景國　曾兵衛　改七郎兵衛

繼ニ原氏一

景繼

補ニ云フ　分創爲ニ一家一、奥州白石舊祖是也

爲繼　甚四郎　左衛門尉

元弘元辛未年二月立職、娶ニ中村氏之女一、永和二丙辰年七十三歳ニテ卒

補ニ云フ　建武大乱神家一族新田小太郎義貞ニ參加シ勤王ス、凡ソ四十年間軍馬ニ跨リ都下ヲ叱咤シ功アリ、仍テ儲國ニ領土ヲ賜ル、子孫分封繁衍シテ今ニ至ル

榮辰　隼人

實ハ神長官守矢時眞ノ次男、實家ノ姓氏ヲ取テ稱號トス仍テ爾後守矢ヲ氏トナス、延文五庚子年八月立職、原七郎兵衛景國ノ長女ヲ娶リ妻トス

補ニ云フ　此女ハ先代爲繼ノ從兄弟ニテ片倉氏ノ出自ナリ、爲繼軍馬鞍掌ノ爲メ職ヲ讓ル榮辰之レヲ繼クニ方リ養家ノ血族ヲ以テ配シ祖祀ヲ奉セシム、應永十三丙子年九月十日榮辰卒、六十九歳

政純　幼名彦太郎　隼人

明德二辛未年十一月立職、應永八辛巳年五月於二青柳里一討死、行年三十九歲、妻澤氏ノ女

補ニ云フ　諸記ニ正平二十四年十月武家方上杉朝房、畠山基國等大擧シテ幕府ノ命ヲ受ケ伊那郡大河原城ヲ攻擊セシム、宗良親王信州ノ宮方ヲ糾合シ之レヲ防カシム、即チ諏訪上宮大祝頼繼ハ一族一黨ヲ率キテ和田嶺ヲ扼シ、澁谷氏ノ一族ハ青柳口ヲ守備シ、木曾、上松ノ諸族ハ擔尻嶺ヲ控シテ甚タ嚴重ナリ、其他伊奈ノ諏訪形城ニハ小田切彈正アリ、松島城ニハ滋野、矢嶋等アリ、向山城ニハ桃井氏、大嶋城ニハ大島氏、庄神山城ニハ笠原氏市之瀬城ニハ黑河內、中條ノ二氏、神之平ニハ知久四郎左衛門信超アリテ擬手ノ防拒ニ備ハレリ、同月二十日上杉朝房、畠山基國等千葉、宇都宮、小山、佐久ノ諸族ヲ率キテ和田嶺ニ迫ル衆五万ト註ス、小笠原氏ノ一族應援トシテ擔尻嶺ノ宮方ト戰フ、和田嶺ノ守備諏訪一族防禦能ク努メタリト雖モ、兵寡クシテ力屈シ下諏訪社近傍ニ退ク、敵嶺ヲ越エテ諏訪ニ入ル、畠山基國ノ一隊ハ青柳口ニ迫ル既ニシテ宮方敗レ退カムトス、適々大雪連日降リ寒威膚ヲ劈クカ如シ、兵卒凍傷ニ罹リ戰鬪ニ堪エス、敵味方互ニ野營シテ相持ス、時ニ香坂高宗五百餘騎ヲ率キ來リ援ケ、十二月二十一日夜弟香坂高行ト合シ、青柳口ニ向ヒ敵ヲ急襲シテ大ニ敗ル、尋テ和田嶺ノ敵ヲ追窮ス、是ニ於テ宮方大ニ力ヲ得和田嶺ヲ復スルコトヲ得タリ、上杉朝房、畠山基國漸ク血路ヲ得逃レテ武藏ニ歸ル、依テ信國又賊軍ノ隻影ヲ見ス云云トアリ、政純青柳口ニテ討死トアルハ蓋シ此時ノ合戰ニ討死セシニハ非ルカ應永八年五月青柳口ノ合戰云云他ニ所見ナシ、附シテ以テ博考ニ供フ、因ニ記ス、古戰場址今ニ存在セリ

又云フ　上杉、畠山等信州ニ侵入スルコト再三アリシモ建德二年以後ニハ右兩氏信州ニ來侵ノ事所見ナシ、然レハ政純討死ハ孰レノ合戰ニ於ケルニヤ、併テ君子ヲ俟ツ

政胤　兵部助

實祖父榮辰四男、應永八年八月立職、同十六己丑年於二桑原里一、與二政綱一共ニ討死、行年三十一歲

謙政　修理助

應永十六己丑年十二月立職、娶二宮崎宗忠女一、應仁二戊子年三月二十九日七十六歲ニテ卒、實ハ政祖父政繼ノ男也

基政　隼人

寛正四癸未年十一月立職、文明十六年甲辰七月於二御射山一、從隨之士等、起二口論一競爭、時基政揮二勇力一、鎭二騷動一、元來勇幹而達二弓馬一、妻小出氏女、永正八辛未年十月六十八歲卒

順政　內記

受二父之讓一立職、時ニ明應八己未年也、大力之人也、娶二杉田勘助女一、天文十二年癸卯年六

十三歳卒

眞慶 改重庸

近藤久四郎氏重ノ養子

誠政 主計

實ハ近藤重庸ノ次男、依二父命一立職、于時享祿元戊子年也、妻二笠原中務丞女一、天正十六年戊子二月六日七十八歳ニテ卒

昌親 隼人 正六位下 志摩守

元龜二辛未年九月立職、娶二杉田兵部助女一、天正十年三月織田右府武田氏征討之時、當社炎上守二神輿一懸二守屋山一、方二此時一、傳家重寶、系譜等爲二動乱一、燒失畢、慶長十八癸丑年六月三日七十六歳卒

宗半 主計

慶長十七壬子年十二月立職、元和八壬戌年十月有レ故退職而以二重辰一爲二養子一

良親

爲二擬祝養子一

重辰 内記

元和八壬戌年十一月立職、實ハ神長官重眞次男先代ノ養子ト成ル、妻祖父昌親女、延寶四丙辰年八十二歳ニテ卒

從辰 掃部 正六位下 壹岐守

万治三庚子年六月立職、寛文七丁未年叙任、娶二河野氏女一寶永二乙酉年七十九歳卒

重秀 内記

貞享二乙丑年四月立職、元祿十六癸未年有レ故、繼二禰宜太夫職一

三英 衛守

實ハ諏訪勘右衛門三安之三男也、元祿十六癸未年十二月立職、然親戚諫而令レ改レ姓、故廢二諏訪氏一、採二外戚之姓一、爲二長坂氏一、妻重秀之妹、元文二丁巳年七十三歳卒

英純 主計衛守ト改ム

享保八癸卯年立職、娶二大祝頼央之女一、天明二壬寅年十月六日七十八歳卒

重與

爲ニ爾宜太夫養子ー

純明　主計

安永六丁酉年八月十三日立職、娶ニ大祝頼紀女ー、天保元庚寅年十二月二十九日八十三歳卒

光穀　掃部

文化十三丙子年十一月立職、妻渡邊三左衛門之女先卒、依娶ニ矢島志兵衛姉ー、亦卒、更娶ニ赤沼東作女ー、光穀弘化二乙巳年十一月二十四日六十六歳卒

補ニ云フ　光穀先妻ノ岳父ハ高島藩士高百石、物成七十五俵、御役中二人扶持、江戸常居料三十石、物成廿二俵二斗、勤方押合、御勘定奉行、繼妻以下ノ出自ハ冗ヲ厭ヒテ省略ス

頼文　主計　後號ニ廣海ー

實ハ高坂宗藏次男（此ノ高坂家ハ伊那郡日曾利村ノ豪農高坂氏ニシテ信州著名ノ門閥家タリ）天保十二辛丑年十一月立職、妻先代光穀女

頼純　初名巖　主計

實ハ祖父光穀ノ男ナリ、先代子ナシ、故ニ嫡子ト爲ツテ相續ス、明治維新改革ニ付廢職、後チ家眷ヲ擧ケテ東京府ヘ移住シ彼ノ地ノ貫族トナレリ、紋章ハ丸ニ梶ノ葉ヲ用フ

補ニ云フ　當職頼純ハ常識ニ富ミ、家庭ノ處理揮テ慈仁ヲ以テ主トセリ、故ニ家僕伊藤繁吉ハ幼年ヨリ從屬シ主頼純ノ薫陶ヲ蒙リ、人ト爲リ温順慈仁ノ志厚ク數十年一日ノ如ク勤仕シ、長坂家衰微ヲ支持シ、其ノ誠忠ハ實ニ摸範的タリシカバ、縣廳是ヲ賞シテ金若干ヲ賜ハリタリ、今茲ニ彰表ノ賞狀ヲ掲ケ以テ未タ見聞セサル人ニ紹介セムトス

諏訪郡泉野村　伊藤繁吉

資性篤實年甫メテ十四、諏訪上社五官長坂主計ノ僕ト爲リ、幼弱ノ身ヲ以テ夙夜恪勤十有七年ノ久シキ忠實能ク之ニ仕フ、後チ同神社神長官守矢實顯ノ屬望スル所トナリ、亦之レニ事フル事舊主ニ於ルカ如シ、里人爲ニ義僕ト稱スルニ至ル、尋テ明治二十一年諏訪郡泉野村中道區ノ使丁ト爲リ爾來忠誠、公ニ奉シテ以テ今日ニ至ル、其志操ヲ渝エサルコト多年一日ノ如ク門閭悉ナ其德ヲ稱ス洵ニ奇特トス、依テ爲其賞金五圓下賜候事

大正三年一月四日　長野縣知事正五位勳四等　依田銈次郎

頼明

實ハ先代頼純ノ實弟ニシテ明治維新後分創シテ一家ヲ爲ス、但シ祖先傳來ノ家宅並ニ居屋敷ハ兄頼純ノ讓渡スル所ト云フ、此人不幸ニシテ身体不隨症ヲ患ヒ十有餘年床中ニ呻吟ス病魔ハ倍々增長シ、終ニ明治二十六年九月十九日病死ス、行年五十四歳、神式ヲ以テ葬儀ヲ執行セリ

補ニ云フ　頼明重患ニ陷リ養女たき至誠能ク看護ノ任ニ當ル、此女天性至孝ニシテ數年

間一日ノ如シ、仍テ其美德ハ世人ノ認ムル所トナレリ、即チたき子ノ孝節ヲ里長ヨリ官ニ上達ス、官廳之レヲ彰表スルコト左ノ如シ

長野縣信濃國諏訪郡中洲村　長坂頼明養女　たき

資性温良明治十五年頼明ノ養女トナル、適々養父重症ニ罹リ進退自由ナラサルニ際シ專ラ勞役ニ服シ生計ノ資藥餌ノ料悉ク看護ノ暇ヲ以テ經理シ、又入夫ヲ勸ムルアルモ孝養ニ缺クルヲ慮リテ之レヲ肯セス、獨身養父ニ孝事スル多年一日ノ如シ、其志行洵ニ奇特ニ付爲其賞金貳圓下賜ス

明治二十六年七月三日　長野縣知事從四位勳三等　淺田徳則

叙上ノ如ク彰表ヲ受ク眞ニ婦女子ノ龜鑑ナリ、里人ノ傳ヘたき子ノ孝節ハ某書籍ニ掲記シ、既ニ業ニ世ニ公ニセリト、但其書籍ノ題名ヲ知ル者ナキハ惜ムヘシ、按ニ孝子義僕ノ傳記ノ類ナラム、此頃編者ノ畏友前中洲學校校長小平亥之助氏ニたき子刀自ノ事蹟ヲ質セシニ同氏云フ、在校中餘暇ヲ以テ吾カ郷土ト題名シ、中洲村ニ係ル人物古今ヲ問ハス調査シ數冊ノ稿本ヲ編成セリ、其中孝子節婦ノ部ニたき子ノ事蹟ヲ掲記セル等ナリ、就テ見ラレヨト示教セラル、但シ此時たき子刀自ノ事蹟ヲ印刷ニ附スルノ日時ナリ、遺憾ナカラ中洲小學校ヲ訪問スヘキ餘地ナシ、今故たき子ノ夫、省二君ヨリ提供セラレシ賞狀ノ寫ヲ根據トナシテ印刷ニ附セリ、故ニ概略ノ記事ニ過キス見ム人恕セヨ、因ニ記ス、長坂家ハ實ニ世ニ稀有ノ美談ヲ生ミシ家庭ナリ、兄頼純ハ義僕ヲ出シ弟頼明ハ孝女ヲ出ス、二人倶ニ官ヨリ彰表セラレシ事、各其賞狀ノ文旨ニ徵シテ明ラカナリ

省二

前記たき子ニ入夫セリ、今上諏訪町ニ移住、實ハ本郡舊高嶋藩士

因ニ記ス、日露戰役當時常陸丸乘組員ニテ玄海灘航海中、敵艦ニ追擊セラレ之レヲ避クルニ由ナク沈沒ノ時殉死セシ、中島謙吉君ハ此省二氏ノ實弟ナリ、謙吉氏ノ男ヲ武ト云フ今陸軍大尉タリ

妻たき明治三十年十一月二日病死、行年三十五歳、たき子ハ舊高島藩士、本郡上諏訪町大字大和區、渡邊奥左衛門三女ナリ、長男頼存ヲ擧ケシモ不幸二歳ニシテ夭セリ、今一女子アリ千代子ト云フ、母ノ生家渡邊家ノ嗣子タリ

頼幸

頼純ノ嫡男ナリ、父ニ從ヒ東京市ニ移住、現時ハ私立學校ヲ設立シ之レカ校長タリ

同神社舊大祝政所兩奉行矢島家略系

（同上抄本）

◉高志沼河比賣命

此神ハ吾諏訪大神之御母而鎮ニ座于諏訪郡矢ケ崎邑御座石社ニ、所レ齋神主之遠祖亦吾大神四世之孫是爲ニ高志奈男一矣、其後裔世々相嗣來氏ニ矢崎一中世其族別徙ニ居於本社ニ、更氏ニ矢島一、職掌ニ奉行献供一兼輔ニ翼大祝一、統ニ監祭事公事一、因號ニ兩奉行一、次ニ席于副祝一、往古系圖爲ニ兵火一所ニ燒亡一焉故不レ詳矣

- 正通
  - 天文二癸巳年五十歳而立職、文祿四乙未年九月十三日死、六十二歳
  - 補ニ云フ　此ノ正通時代ニ相當シテ天正六年武田家制定ノ御造營帳ニ上社前宮三ノ御柱仕所一貫文矢嶋兵部丞トアリ、同族ノ人カ
- 氏吉
  - 氏家
  - 氏時
  - 則實
- 正之
  - 之勝
  - 基成
  - 繁春
- 昌清
  - 昌友
  - 高干
  - 能之
- 綱祐
  - 信門
  - 綱輝
  - 政瀧
- 政繩
  - 政經
  - 政盈
  - 正秀
- 正友
  - 正房
  - 正仲
  - 正壽
- 泰輔

同上同職花岡家略系（同上抄本）

洩宅神之末裔ト云、先代住ニ花岡邑ニ、因而氏トス、祖先久遠ニシテ不詳（花岡氏ノ事ハ上卷ニ掲ク見ルヘシ）

補ニ云フ　狩倉ノ里ノ由來ニ、守矢神ノ神族繁榮住居セシガ湖水干潟スルニ從ヒ平土ニ移レリ、之ヲ守矢ノ神族兼ト云フト、蓋シ本氏又同族ナラムトノ説アリ

◉正保

元祿六酉年七月廿四日卒

補ニ云フ　守矢神ヲ洩矢神ト同神ナリトノ説アリ、永明村一本湛エニ守矢稻荷社ト云フアリ、當氏ノ祖神ト同神ナルカ附テ考ニ供フ

正貞

享保九辰年七月九日卒

正房

寶曆七丑年十二月二日卒

正永

安永四年未十二月三日卒

正敬

天明二寅年九月十四日卒

正方

天保二卯年二月十六日卒

賛方

嘉永七寅年十月廿六日卒

儀正

正高

補ニ云フ　武田信玄諏訪上社神領貫文高之内、花岡知行五十貫文トアリ、又雅樂十人ノ内花岡抱之神子給壹貫二百文云云トアリ、往古ヨリ當社ニ奉仕ノコト察知スルニ足ル、而シテ德川幕府寄進ノ神領ノ内ノ配當祿モ花岡分知行二十五石トス、然ルニ花岡氏系圖祖先久遠ニシテ不詳ト序シ、正保元祿六年死ストシテ歷代ノ冒頭ニ記セリ、按ニ其正保以前ノ系圖ハ傳ハラザルモノヽ如シ、惜ムヘキコトナリ、然レトモ天正六年戊寅二月二日ノ清書帳ト題セル諏訪神社御造營目錄中ニ、前宮一ノ御柱建立仕所ノ内一貫六百文、小祝小池金兵衛、花岡土佐之レヲ取ル、但シ土佐死後ハ平島彌左衛門之レヲ取ル云云ト記セリ、尙同帳面中所々ニ花岡云云トアリ、蓋シ當氏ノ先祖ニヤ、將又同流ニヤ、一言添ヘテ參考ニ供フ

正夫

同神社舊頭主小坂家略系

（同上抄本）

遠祖不詳

補ニ云フ　小坂家往古ハ甚タ族類繁衍セシ趣キ神家系圖ニ見ユ、而シテ南北朝ノ頃ニ至リ、諏訪大明神縁起繪詞卷ヲ成桑セシ、小坂圓忠ノ如キハ祖神以來神家ノ事蹟ヲ網羅敘述シ、以テ當社ノ靈驗ヲ万世ニ傳來セシムル程ノ敬神ノ志ニ厚キ人ナレトモ、武家方足利尊氏ニ隨從一族ヲ擧ケテ京師ニ上リ六波羅廳ニ奉職シテ殊遇ヲ蒙リテ本土ノ宮方トハ消息ヲ絶チテ顧ミス、終ニ北朝ニ供奉シテ彼ノ地ニ終リシカ如シ、故ニ上國及關西地方ニ子胤繁榮今ニ小坂、諏訪等ノ氏號ヲ稱スルモノ幾百ニ至レリト云フ、而シテ南朝ニ勤仕セシ諏訪大祝ニ隨屬セシ小坂氏ハ祖神ノ靈德ヲ崇尊シテ勤王ノ志ヲ變セズ供奉セシカ如シ、此小坂氏蓋シ當社頭主ヲ奉セシカ、年代モ克ク符合セリ一言以テ博雅ノ君子ヲ俟ツ

⊙小坂九郎義遠

應永四年御頭任ニ御符ニ、勤役ス

補ニ云フ　信濃佐々禮石ニ、綿内春山城ノ條ニ壽永二癸卯年、木曾公筑摩川合戰ノ後井上三郎滿實ノ次男、時田次郎光平春山ニ城キテ居リテ春山次郎光平ト稱ス、其子小坂九郎義遠ヨリ以後代々後村上信濃守基國ノ高家トナリ、天文十六丁未八月廿四日村上義淸沒落ノ後、武田家ニ降リ反逆ノ疑ヲ受ケ誅セラルトアリ、恐クハ此說誤リナラムモ疑ヲ存シテ君子ヲ俟ツ

治郎義季

文安年中ノ頭主而シテ此後ノ間數代不明

直員

元龜二年辛未十一月二十四日死ス、附テ云フ後爲ニ武田氏領國ニ、如ニ舊規ニ、勤役ノ判物ヲ賜ハリタリ

武田家ヨリ上諏訪社領千六百六十六貫七百三十七文ノ内一貫二百五十文小坂之介錯ト見ユ、即チ頭主ノ事カ、又同社領帳ニ小坂鎭守御柱、澤底之原口之田前錢ニテ立申候、一反ニ付キ十九文懸ケ候也、此御請申候人小坂石見守云云トアリ、當社ト同流ニテ小坂鄕在住ノ趣キ也

長吉

慶長二未年八月死

長幸

寛永廿未年九月死

補ニ云フ　三代將軍德川家光寄進、當上社千石社領配當米一石二斗、小坂九郎ト見ユ之レナリ

政周

寛文二寅年十一月死

政言

貞享元子年七月死

治政
享保六丑年六月死

政芳
明和九辰年九月死

直邦
安永二巳年四月死

直矩
文化四卯年十一月死

直朗
天保六未年一月死

直廣
万延元申年八月死

安行

杣江

同神社大祝寶劒持宮島家略系（同上抄本）

天兒屋根命之末裔佐貝知始來ニ壬諏訪ニ隨ニ從於有員ニト云フ、久遠ニシテ歴代不詳、抑モ當社神劒根曲在ニ於大祝宅地、中部屋社神劒所レ藏也、祭神春日大神矣、由レ是子孫承嗣守ニ衛寶劒ニ、以ニ居地宮島ニ、爲レ氏焉

補ニ云フ　當社神劒ハ健御名方神ノ佩フル所ト云フ、根曲ノ劒ハ神代ノ形式ナルコト諸錄ニ見ユ、大神ノ佩ヒシ寶劒ナリト云フ宜ナル哉、是ヲ子胤大祝家ニ傳ヘテ祭祀供奉ノ時、宮嶋氏之レヲ持シテ隨行スルノ例也ト云畏クモ　天皇行幸ノ時奉持スル三種ノ神器ニ略擬セリ尊キ儀式ト拜承スヘシ然ルヲ春日大神即チ健御雷之男神ヲ祀リテ神劒藏置ノ大祝宅地中部屋神ノ祭神トシ、其神ノ子孫宮島氏之レカ守衛ノ任ニ當ルト云フハ不審シキ事ニナム、是ハ按フニ皇家ニ於ル寶劒豐布都ノ神ノ事ヲ似擬セシニハ非ルカ誤レリト云ヘシ、其ハ皇宗神武天皇大和ノ賊ヲ征シ玉フトキ、頭八咫烏皇軍ノ嚮導ヲナシ遂ニ平定ノ功ヲ奏ス、天皇甚悅ヒ玉ヒ、豐布都ノ劒ヲ授ケテ頭八咫烏ヲ賞セシ事正史ニ見ユ、後其神劒ヲ大和國石上神宮ノ神体ニ奉シテ齋ケリ、又後神劒ヲ常陸國鹿島神宮ニ奉齋スト云フ、鹿島神即チ春日大神ナリ、蓋シ諏訪大祝家神劒ヲ皇家ニ於テ祭ルニ倣ヒ宮嶋氏亦藤原氏ノ所役ヲ摸擬シテ云フニヤ、當社神劒ハ祖神健御名神ノ佩ヒ玉ヒシ寶器ナレハ純粹ニ諏訪神家式ヲ以テ神劒モ祭ルヘシ、守衛所役ノ人ハ神家ヲ稱スヘキヲ正當トス、故ニ編者ハ諏訪大祝神劒ヲ祀リテ春日大神トナスコト、並ニ守衛宮嶋氏ヲ春日大神ノ神孫ト云フヲ誤レリト斷ス、尙識者ヲ俟ツ

◉貞利

貞高
天文九庚子年十月十八日卒、行年七十三歳

貞介
永祿四辛酉年五月朔日卒、行年五十九歳

貞申
天正三丁丑年正月二十九日卒、行年四十三歳

貞辰
慶長十三戊申年六月十日卒、行年五十一歳
補ニ云フ　千石社領ノ内十二石三斗宮嶋
給トアリ

貞武
正保二乙酉年九月十一日卒、行年六十一歳

貞昌
天和三癸亥年七月二十日卒

貞牛
寶永六己丑年四月七日卒、行年七十二歳

貞茂
享保十九甲寅年十一月十三日卒
行年六十九歳

貞丘
寶暦十三癸未年九月十八日卒、行年七十二歳

貞壽
明和七庚寅年五月廿六日卒、行年五十四歳

貞豪
享和四甲子年三月十九日卒、行年六十四歳

貞重
文政三庚辰年四月十七日卒、行年三十二歳

貞頭

葦六

同神社舊外記太夫家略系

（同上抄本）

遠祖不詳

補ニ云フ　外記太夫職ハ茅野氏ノ所役ナリ、遠祖不詳ト云フニ非ス、諏訪神家系圖大祝敦貞（寛治中任）ノ次男諏訪次郎敦眞ノ嫡男千野太夫光親ヲ祖トス（千野茅野通用ス）而シテ光親及其子光弘等ノ事ハ平語及ヒ諸軍記ニ散見ス、光親諏訪上宮ニ住ス云云ト、叙上ノ記錄ニアリテ人ノ能ク知ル所ナリ、一言茲ニ附記ス

⊙光親　茅野太夫

久壽二乙亥年三月二十二日死ス

補ニ云フ　一本系圖ニハ元暦元年正月、樋口家光成レ虜被レ爲レ刑ノ條ニ、信濃國上諏訪宮住人茅野太郎光弘、同國同宮住人茅野太夫光家、舍弟茅野七郎光重ノ三人ハ樋口次郎カ縁族ナリ云云、其他源平盛衰記、又木曾軍記等ヲ參照スヘシ

光弘　茅野太夫

元暦元年三月戰死

補ニ云フ　平語ニ樋口次郎ノ手ニ在リ、京都四塚ノ地迄出テ大敵中ニテ鐙踏張高聲ニ云フ其勢之中ニ甲斐一條殿ノ人座シマスカト問フ、一條ガ手ニ非サレバ戰ハセヌカト、ドット笑フ、笑ハレテ名乘ル、我ハ信濃國諏訪上社ノ住人茅野太夫光家ガ子、茅野太郎光弘ト云フ者ナリ、子供二人信濃國ニ殘シ置キタル故我親ハ克クテヤ死シタルカ、惡クテヤ死シタルカト存スナラム、甲斐一條次郎殿ノ手ニ弟七郎アリ、此度ノ討死スル事ヲ口傳申ス也ト云フテ彼レニ馳合、是レニ馳合、武者三騎切落シ四人ニ當リ敵ト引組差違ヘテ死ス（下略）云云

而シテ以下二十代間名不明云云、然レトモ一本茅野系圖ヲ按スルニ承久中光眞、建長中光家弘安中時家、嘉元中外記光近、正平中光顯、宗良親王ニ供奉、應永中光利尹良親王ニ奉仕、永享中光時、寛正中光代、文龜中外記光武、天文中山城入道宗光、神長官ニ大熊御左口神云々ノ證文ニ名見ユ、天文永祿中光安出雲ト稱ス、青柳、茅野、田澤ノ地頭職ニ任ス、又船渡堪神事領辰野郷ニテ拜領云云ノ證文ヲ帶フ、以上十二代相承シテ見ユ、癸ヅ二十代名不分明ト云フヲ得ンヤ、但名字判明ノ人十二代ノミ、廿代ヲ是トスヘキカ、將十二代ヲ非トスヘキカ後考ヲ俟ツ

光則

慶長五庚子年六月二十九日死ス

補ニ云フ　此人金子八幡社ノ神職ニ補セラル、千野伊豆守、千野大炊允等當社神領配當ヲ得テ奉仕ノ事諸記ニ見ユ同族ノ趣キ也、孰レモ貫文ノ祿給ヲ帶ベリ

光枝

明暦三丁酉年四月二十五日死ス

補ニ云フ　此時代俸給祿廿五石、神宮寺村高部村、駒澤村、金子郷等ニテ拜領シ、當社神樂役、小別當職等ヲ奉仕ス、後給所神之原、山田新田、丸山新田、田澤等ニ引替エラル

光昭

延寶四辰年七月十七日死

補ニ云フ　此時代先例ニ依テ御生飯笛並ニ樂器一式ノ御預ヲ命セラル、又湖上御渡見屆所役、高嶋城内殿舍ニテ四季祈禱奉仕ス、高遠藩ヨリ御柱祭供奉所役人ノ宿館等モ命セラル

光秀

元祿三年六月九日死

光兼

元祿七戌年正月十五日死ス

貞光

享保十四酉年四月十日死

光貞

天明五乙巳年正月廿五日死ス

補ニ云フ　當社太々神樂ヲ再興ス、又中絶セシ酒室太夫、源太夫ノ二職ヲ再興シ奉仕セシム（因ニ記ス、明治改正ニ付以上廢止セラル）

光義

文政七庚午年十一月廿六日死ス

光定

フ、元治元甲子年七月廿一日死ス

補ニ云フ　水眼ト號ス、妻ハ甲府勤番福嶋氏ノ女

光宅

明治八年八月三日死ス

補ニ云フ　妻高遠藩士柿木古龍女、此夫人多子長男早世、次男良玄光顯ハ醫ヲ以テ紀州藩ニ仕フ、三男家督、四男泰菴光繼ハ伊那郡伊那部村須田家ニ養子醫ヲ以テ業ヲ嗣ク、五男光武ハ武州兒玉郡青柳原村木村家ニ入壻陸軍武官ヲ奉ス、六男光秋醫業ヲ嗣テ同上木村家ノ養子タリシカ早世、依テ兄光武代ツテ同家ヲ相承セリ、以上皆子胤アリ

光豐

大正六年死ス、妻ハ高遠藩士柿木門連ノ長女也

補ニ云フ　明治三年正月太政官布告ニ依リ家祿ヲ奉還セリ、同四年同官布告ニテ舊神職名廢止、同五年諏訪郡北眞志野村鄕社蓼宮神社々司、外村社々掌拜命奉仕シテ生涯ヲ終フ

三郎

補ニ云フ　先代光豐ノ三男ニテ家督、現戸主ニシテ神職ヲ奉ス

妻ハ諏訪郡落合村佐伯類之助ノ一女ナリ

諏訪下社舊大祝五官以下社家略系

官幣大社諏訪神社下社、舊大祝家並ニ五官、又社家數氏ノ家傳ヲ同神社上社、舊大祝家以下ト同ク掲記セント爲セシモ未タ其材料ヲ覓メ得ス、仍テ明治初年下諏訪神社ヨリ管轄廳ヘ提出セシ下社取調帳ト云フモノニ載錄セル所ニ據ツテ左記ノ如ク掲出ス、看客之レヲ諒セヨ

大祝

崇神天皇之御世神八井耳命之孫、建五百健命ヲ科野之國造ニ定メ賜フ、建五百建命、健御名方命ノ裔會知早雄命ノ女、阿蘇比賣ヲ嫡妻トシテ速瓶玉命ヲ生ム、是レ即チ下社大祝ノ始祖也、但シ爾來世代名家等不詳、貞觀五年九月諏訪郡之人、右近將監正六位上金刺舍人貞長、賜ニ姓大朝臣ヘ神八井耳命之苗裔也ト三代實錄ニ見ユ、貞長ノ子長清ヨリ十九代ノ孫、堯存慶長年中故有ツテ國ヲ去リ往ク所ヲ知ラス、大祝ノ裔爰ニ絶ユ、依リテ武居祝善政ノ子豐政ヲ以テ假リニ其職ヲ襲ハシム、爾後五官及ヒ本藩（本藩トハ諏訪藩ヲ云フ）士族ノ子弟歳十五ニ滿タサル者ヲ選ミテ職ヲ襲カシム、豐政ヨリ二十四傳ニシテ今ノ大祝ニ至ル、名ハ豐尙、權祝光春ノ子也云云、因ニ記ス、大明神御渡リ事由記載ノ内、永正十五年下宮遠江守金刺昌春萩倉城ノ要害自落シテ一族ノ面々家系悉ク斷絶畢云云トアリ、然レハ下宮大祝家ノ滅亡ハ蓋シ萩倉城自落ノ時ニ於テナルヘシ、其原因ハ上宮大祝刑部大輔神賴滿ト對戰屢次ナリシガ下宮方敗軍ニ依ツテ滅亡ヲ招キシモノナルヘシ、本文堯存慶長中故有ツテ國ヲ去リ往ク所ヲ知ラスト記セルモ、祖父昌春自落ノ餘波ヲ以テナラム、既ニ前ニモ述ヘタル如ク其子孫薩州藩ニ仕事シテ歷々ノ家職ヲ有スト聞ケリ、或ハ眞ナルヘシ

補ニ云フ　肥後國官幣大社阿蘇神社々記ニ云フ、一ノ殿主神健磐龍命、又名阿蘇都比古命、二之宮阿蘇都媛命、即チ一ノ宮神ノ妃ニシテ是即チ二之殿ノ主神ナリ、其系皇宗神武天皇ノ皇子神八井耳命ヨリ出ツ、神八井耳命ノ御子國龍神、又名彦八井命ト云フ、第三之宮主神タリ、四之宮比賣御子神即チ第三宮ノ妃ナリ、是レ即チ四之宮主神トス、御子新比古命、又名武宇都彦命ト云フ、七之宮主神タリ、七之宮彌比賣命ハ七之宮ノ妃ナリ、御子ハ若彦神、又名武速前命、或ハ敷桁彦命トモ云フ、第九ノ宮主神ナリ、御子ハ即チ一ノ宮主神健磐龍命トス、其御子ハ十一ノ宮國造速瓶玉命トス是レ即チ第三殿ニ祀ル所ノ主神タリ（因ニ記ス、第一殿ハ御父健磐龍命、第二殿ハ御母阿蘇都媛命ニシテ前ニ記セル會知早雄命ノ女ニシテ健御名方命ノ御孫女ナリ、第三殿ニ祀ル所ハ本文ニ云フ速瓶玉命ニシテ御嫡子神ナリ、此命初メ科野國造ヲ奉セシニ成務天皇御宇阿蘇國造ニ定メ賜ハリテ彼ノ地ニ移レリ、偖科野國造ニハ御同胞ノ健稻背脛命ヲ定メ賜ハレリト云云）而シテ速瓶玉命ノ御子ハ彦御子神、又名惟人命、或ハ健停美命ト云フ、第五之宮ノ主神ナリ、妃神ハ若比賣命ト云ヒ、第六之宮主神タリ云云、又一本系圖ニ阿蘇三社大宮司家ハ宇治姓、文書別ニ有リトシ祖神ヲ神日本磐余彦尊（神武天皇ノ御尊名也）次ハ神八井耳命、次ハ速瓶玉命、號ニ國造一三社之内、次ハ稚人君命、次ハ部吉見姫命トモ云フ、正四位三社之内、次ハ健磐龍命正一位三社之内、妃神ハ阿蘇比賣命、草成彙丸ヨリ成輔、高正、高範、友則、友彙、惟彙、惟風、利名、賴高、成時、則高、惟敎、惟文惟氏、忠行、惟峯、友助從四位上、友仲、賴元、惟助、惟親、惟信、惟通、惟滿、惟經、惟遠正三位、惟雅從四位下、惟綜、惟員、惟行、則眞、是員、友幸正五位下、友實、友房從五位下、惟俊惟宣、資長、惟恭、惟次、惟義從三位、惟景、惟國、惟直、惟時、惟澄、惟村、惟鄕從三位中務大輔、惟忠正三位、惟歳、惟家、惟垂、惟長從五位下、惟豐從二位、惟將、惟種、惟光從四位下、惟善、友貞中務大輔、右貞享二年迄、友隆宮内少輔從四位下、右貞享六年迄、右阿蘇大宮司系圖、貞

享二乙丑之夏以二友隆家藏本一寫云云トアリ、其以下省略、明治維新ノ後チ阿蘇惟孝男爵從四位ニ叙爵、阿蘇神社宮司舊知行高八十七石、熊本縣阿蘇郡阿蘇宮地村居住ト云フ、諏訪下社大祝家ト同系ニシテ帝國日本屈指ノ舊家タリ、今諏訪下神社大祝家ノ系譜ヲ揭記スルニ方リ、參考トシテ阿蘇男爵家ノ系譜ヲ併記セリ、之レ下社大祝系圖トシテ明治初年官廳ヘ提出セシト云フモノ、甚タ省略ニ過キテ殆ト要領ヲ得サルカ如シ、故ニ冗長ヲ厭ハス茲ニ阿蘇男爵家ノ系譜ヲ提記シ、曩ニ本編前揭ニ記セル金刺系圖即チ科野國造家、後下諏訪神社大祝ト爲リ天文中武田氏ノ侵畧ニ堪エズシテ逃走セシ堯存時代マデノ代歷ト對照シテ研究スヘキ資トナサムトス看客高覽ノ勞ヲ客マス、一讀シ以テ信濃國ノ金刺氏ノ家系ノ凡ナラザルコトヲ悟得セラルヽヲ懇希シテ止マサルノミ、噫

武居祝

今井氏　其先祖ヲ詳カニセス、傳(云フ、諏訪大神鎭座ノ初メ國津神有リ武居大友主ト曰フ、大神ニ奉仕シテ武居鄕ニ居ルト云云、武居ノ名稱蓋シ此ニ出ル乎、天文中大祝昌春ノ次男善政職ヲ襲キ、其子豐政ヨリ十三代、今ノ武居祝麻須美ニ至ル

禰宜太夫

桃井氏　初メ志津野氏、寶永、正德ノ頃今ノ氏ニ改ム、其先祖ヲ詳カニセス、古來當職ヲ相傳ス、寬文年中、與政ト云フ者有リ、志津野左京進ト稱ス、其子利政ヨリ八代今ノ禰宜大夫保之ニ至ル

權祝

神姓古田氏　初メ山田氏、文祿慶長ノ頃今ノ氏ニ改ム、其先祖ヲ詳カニセス、古來當職ヲ相傳ス、永祿、天正ノ間、重眞ト云フ者有リ山田左兵衛尉ト稱ス、其子重信ヨリ十三代、今ノ權祝光春ニ至ル

擬祝

神姓山田氏　其先祖ヲ詳カニセス、古來當職ヲ相傳ス、建久ノ頃重貞ト云フ者有リ山田右馬助ト稱ス其子重綱ヨリ十七代、今ノ擬祝重矩ニ至ル

副祝

源姓山田氏　先祖重泰山田新七郎ト稱ス、清和源氏源頼信十二代ノ孫重頼ノ男ナリ、天正十一年藩主諏訪頼忠ヨリ當職ヲ命セラル、其子重忠ヨリ九代、今ノ副祝重浪ニ至ル

若宮祝

今井氏　其先祖ヲ詳カニセス、貞享四年武居祝英政ノ次男信連當職ヲ襲キ、其子信候ヨリ六代、今ノ若宮祝信忠ニ至ル

宮津子祝

多姓上原氏　初メ神原氏ト書セリ、信濃國造建五百建命ノ後裔ト云フ、然レトモ其世系ヲ詳カニセス古來當職ヲ相傳ス、寶永、正德ノ間實彦ト云フ者アリ、上原外記ト稱ス、其子體彦ヨリ五代、今ノ宮津子祝清躬ニ至ル

補ニ云フ　大日本史氏族志第一、科野國造、神八井耳命ノ裔孫、建五百建命、崇神帝時爲二國造一(註神八井耳孫蓋數世孫也、其裔有二金刺舍人、他田舍人二氏一他田舍人據二万葉集一、按二氏蓋以二國造之族一、給二事欽明敏達二朝一爲二舍人一因氏焉者故二氏至二大化以後一猶稱二國造一也)光仁帝時信乃水內郡人、女孺外從五位下金刺舍人若島等八人、賜二連姓一(按拾芥抄有二金刺宿禰一蓋是族賜二宿禰一也)其族又有下居二駿河一者上、孝謙帝時、有二益頭郡人金刺舍人麻目一、同時有二信乃小縣郡人國造他田舍人大島一、供二防人役一(按續日本紀元明帝時、有二正五位上他田舍人直刀自賣一、直姓亦或云同族也)桓武帝時、駿河國駿河郡大領金刺舍人廣名爲二國造一、清和帝時、有二他田舍人藤雄一、任二少縣郡權少領一

（少小相通ズ）國造之胤在ニ本國一者、曰ニ造祝一稱ニ上原氏一（初曰ニ神原ニ）世爲ニ諏訪下社神官一（造祝系圖）金剌氏之後亦爲ニ下社大祝一（東鑑、大祝系圖）祝部金剌盛久有ニ歌名一（作者部類）其族有ニ諏訪、上泉、手塚諸氏一（作者部類、東鑑、源平盛衰記、金勝院本太平記、關東古戰錄）諏訪郡ノ人金剌光盛稱ニ手塚太郎一、隸ニ源義仲一、以ニ武勇一著（源平盛衰記）云云、當職宮津子祝ハ眞ニ造祝ト書スベキ家系ニシテ舊族タルコト炳乎タリ、因ニ記ス、今ニ下諏訪町ニ宮津子ト云フ地字存在ス、惜哉書記散逸シテ詳カナラズ

檢校太夫

增澤氏、初メ非持氏、又依田氏　其先祖ヲ詳カニセズ、諏訪宮仕、非持檢校豐平之苗裔ナリ、一條院天皇ノ御代豐平鷹術ヲ能クスルヲ以テ田園ヲ信濃國非持郡ニ賜フ、故ニ非持ヲ以テ氏トス、爾來世代詳カナラズ、天文年中依田豐後守ト云フ者アリ、春宮拜殿造立ノ事ニ預ル、其子吉豐以來當職ヲ相承シテ十一代、今ノ檢校太夫美孝ニ至ル

補ニ云フ　伊那ノ人柿木加藤治ノ著、伊那路ト云フモノニ非持檢校塚ハ非持村（今ハ美和村ニ屬ス）ニアリ、檀木ノ下ニ九石三個ヲ重ネアルノミ、正曆年間一條院御秘藏ノ鷹如何ナル故ニカ歌ヘヲ爲スモ狩獵ノ覺エ有ラサレバ、檢校依田豐平之レヲ訓錬シテ終ニ克ク狩獵ノ用ニ立チシ故ニ天皇賞シテ此地ヲ豐平ニ賜ハリシト、其事由ハ此ノ深山ニテ鷹術ニ便ナルヲ以テ豐平望ムテ領地ニ賜ハリシカ或ハ豐平此地ヨリ出身セシニヤ不詳云云ト記セリ、因ニ記ス、檢校豐平鷹術ヲ以テ世ニ顯ハレシコト古今著聞集其他諸錄ニ揚載シアルモ凡ソ一致セス、然レトモ檢校鷹術ニ堪能ナリシハ悉ク同趣ヲ稱ス、唯リ名字ニ異同アリテ一定セス、而シテ非持城址ノ記事ニ柿木氏云フ、享祿、天文ノ頃非持三郎城キテ居ルト（中略）天正十年織田氏ノ來襲ニ高遠城ヲ守リ終ニ討死ス、之レヲ越後守ト云フ三郎ノ子胤ナルヘシ、其子胤更ニ見ルモノナシ云云、當職檢校太夫ハ非持越後守ト同族ナリヤ否未考、又云フ、本文非持郡ト書ス、按郡ノ字鄕ノ字ニ更ムヘシ、凡ソ古時ハ鄕ヲ郡ト書セルコト往々アリ、其ハ不注意ノ書方トスヘシ、郡名ノ事ハ制度アリテ猥リニ犯スヘカラズ、尙云フ、當氏增澤ニ改メシコトヲ云ハス、蓋シ記憶ノ失ナルベシ、然レトモ天正六年二月二日武田氏制定ノ造營帳ニ春宮五間拜殿、千國、小谷彼兩鄕造榮（榮ハ營ノ書キ誤リカ）錢先規ニ都合十二貫文相勤候、右五間拜殿建立之、取手竹居飛彈、增澤豐後守云云トアリ、之レ神氏タルコト明カナリ、當職增澤氏其餘慶ニヤ、附テ以テ考ニ備フ

天王祝

武居氏　上古ノ國津神武居大友主ノ裔ト云フ、然レトモ其世系ヲ詳カニセス、貞享、元祿ノ間安吉ト云フ者アリ、父ヲ貞吉ト云フ、當職ヲ相傳ス、安吉ヨリ六代、今ノ天王祝信義ニ至ル

小萩祝

武居氏　當郡西山田村小萩神社、建御名方命ノ御子興萩命ノ神孫ナリト云フ、然レトモ其世系ヲ詳カニセズ、本社ニ奉仕シテ武居ノ庄ニ住ス、故ニ氏トナス、元龜、天正ノ間光鄕ト云フ者アリ、當職ヲ奉仕ス、其子光純ヨリ九代、今ノ小萩祝光久ニ至ル

補ニ云フ　鎌倉府ヨリノ下知狀ニ、諏訪郡出早雄宮、兒萩宮、兩社領横川、山田等ノ事左馬寮ノ使新儀非法事、寮頭（被）申所也、其間止ニ使狼籍一可レ令ニ安ニ堵百姓一之狀依レ仰下知如レ件、承久元年十一月十九日、右京太夫在判ノ文書アリ、兒萩、小萩相通用ス、其他寶德三年十二月廿日、大膳太夫在判、兒萩ノ祝部殿ト宛テタル判物ヲ有セリ、小萩祝ノ特ニ由緒正シキ事推シテ知ルヘシ、但シ出早神社ニモ當祝家ニ於テ奉仕シ來リシコト、右判物ノ文義ニ依テ察知スルニ足ル、尙鉢伏山神事モ芝宮八幡社神事モ當職ノ兼帶奉仕スル所ナリキ

林氏　中世故アリ後町氏ヲ稱ス、今舊ニ復ス、其先祖ヲ詳カニセス、延寶、天和ノ間、敏德ト云フ者當職ヲ奉仕ス、其子庸德ヨリ六代、今ノ宮島祝敬方ニ至ル

補ニ云フ　此宮嶋祝ノ子孫ハ姓藤原ヲ稱ス、大日本史氏族志ニ、伊豆押領使維職、其子維次稱ニ狩野氏一、生ニ家次一、四子祐次、祐家、家光、茂光、其家光子家俊、居ニ信濃一稱ニ林氏一云云、當宮島祝家ト同祖ニヤ、附テ博考ニ備フ、或人云フ、下諏訪神社神職官廳ヘ家筋世代上書ノ時、祖先ヲ詳記セルハ却テ後ノ憂ヒモ有ラムト評議シ、大略ヲ上書セシト云云

宮嶋祝

松下氏　其先祖ヲ詳カニセス、文化中祖父光則當職ヲ中興シテヨリ三代、今ノ八幡祝光實ニ至ル

補ニ云フ　下諏訪神社神職ノ稽見ルヘキ系譜ニ現ハレシモノヲ擧ケシコト前揭ノ如シ、武田家ヨリ寄進セシ下諏訪神社神領配當記ニハ大祝領二十四貫八百九十文、武居祝六十二貫七百二十文、禰宜太夫十二貫五百文、權祝十貫六百文、副祝八貫文、若宮祝十二貫文、檢校太夫二貫六百五十文、宮津子祝四貫二百五十文、天王祝四貫文、岡谷之内小萩祝知行一貫文、宮島祝知行一貫三百文、八幡祝知行三貫文、並神田抱ト武田家ヨリ寄進ノ貫文高配當記ニ見ユ、實ニ各職名ノ由緒アルコト察知スヘシ、唯リ各神職家ノ苗字ヲ貫文神領配當記ニ擧ゲザル故、本編揭記ノ職家果シテ武田氏時代ヨリ奉仕セシヤ否疑ハシキモノ往々アリ、最モ自ラ當職奉仕初代ノ年號ヲ記セルモノハ神職初任ノ年代歟然トシテ云フ所ナシ、以上ヲ下社舊神職ノ家筋世代ト題セルモノヽ記述トナス、此外千日祝ト云フアリ、知行六貫文ヲ領セリ、此千日祝家ハ何時ニ絶エシニヤ、明治維新當時ノ記錄ニ見ヘサルナリ

八幡祝

神家傍系知久氏略系譜

知久氏ハ信濃國伊那郡小河内村（今上伊那郡東箕輪村ノ内、南小河内、元ト諏訪郡ニ屬セリ）ノ神之平城ニ代々居住、伊那郡ニ於ケル豪族タリ、其系譜ヲ詳カニシテ以テ世ニ紹介シ、併セテ祖先尊崇ノ資料トナサント欲シ、同氏現主知久峯四郎君ニ對シ、系譜原稿ヲ送致シ其校訂ヲ懇請セシニ、頃日同君ヨリ同氏系圖譜牒ヲ抄寫シ、之レニ知久家史蹟保存會主意書ト題セル印刷物ヲ添附シ郵送セラレタリ、厚意萬謝ノ極ミトス、今之レヲ披閲スルニ其前半ハ本書正編諏訪神家系圖中ニ添記セル知久氏系圖ト略ホ符合セルモノヽ如シ、只往々世代ノ前後スルアリ、或ハ漏脫等アリテ隔靴搔痒ノ念慮ニ堪エサルヲ以テ、更ニ同君ヨリ送示セラレシ書類ヲ根據トナシ以テ知久氏略系譜ト爲シ、既揭ノ同氏系譜ノ漏脫誤謬ヲ訂定スルコトニセム看客之レヲ諒恕セヨ

⊙敦敏

知久ヲ稱號トシ、箕輪庄ニ居ル

補ニ云フ　正編敦俊ニ作ル、諏訪新太夫敦光、一ニ篤光、諏訪大祝ノ五男ニ列シ、知久十郎左衛門尉、伊奈郡（後伊那郡ト字ヲ改ム、此事前ニ記セリ）知久ニ居リ、鎌倉右大將家ニ伺候ス云云、是レ知久氏ノ祖也、母ハ甲斐源氏逸見義清ノ女トス、但シ義清ハ逸見、武田兩家ノ祖ニシテ、新羅三郎源義光ノ次男ナリ、甲州市川大門町ニ居館址アリ、墳寺ハ若神子村正覺寺トシ、靈祠ハ西條村ニ祀ラル、孰レモ甲斐國ノ舊蹟タリ、而シテ本城ハ逸見山城ト稱シテ東鑑治承四年九月十日ノ條ニ、北條時政逸見山城ニ甲斐源氏ノ主、太郎信義等ヲ訪ラヒ、平家討伐ノ援兵ヲ請フ云云トアル之レナリ、其城址ハ今若神子村ニ屬シ

ヲ大城ト云ヒ小城ト云フ、其他家人ノ居館地址今ノ甲村、熱見、安都那、大泉等ニ散在シアリ

信貞　又信實　左衛門五郎　信濃守

神峰ニ築城之レニ居城、法號文永寺殿、信貞武藝ニ長シ、征夷大將軍宗尊親王ノ招キニ應シテ屢々射禮ヲ鎌倉ニ行ヒ、綸旨ヲ奉シテ文永寺ヲ知久庄ニ創立シ、八幡大神ノ祠ヲ筭輪庄ニ建テ、又泉龍寺ノ再興ヲナセリ

補ニ云フ　此ノ信貞、一ニ信實ニ作ル、正編系表中ニ無シ、恐クハ漏脱ニヤ、吾妻鏡正嘉二年戊午正月六日、御的始メ射手ノ内ニ諏訪四郎兵衛尉、知久左衛門五郎定メラルトアリ、又同月十一日ノ條御的射手十三人ノ内、一番組ニ知久左衛門五郎信眞ト見ユ、之レナルヘシ

敦幸　左衛門尉　入道行性

征夷大將軍久明親王ノ命ヲ奉シテ普賢堂ヲ諏訪郡諏訪大神ノ祠地ニ建テ、又日輪寺ヲ筭輪庄ニ建ツ

補ニ云フ　正編知久氏ノ系ニハ敦幸、一ニ敦行トシ、敦俊ノ一男トス、四郎左衛門尉、行性、伺ニ候于鎌倉ニ云云、諏訪神社ノ内、普賢堂ノ結構ハ日本全國中有名ノ建築ニシテ鎌倉時代ノ形式ナリシト惜哉、神佛混淆禁止ノ令出ツルヤ取拂ヒテ其跡墟トナレリ、若シ殘存セハ美術ノ標本トシテ人ヲ益スル事大ナルベカリシモノヲ

敦信　信濃介　伊豆守　左衛門尉

入道行將　法號法全興阿

史蹟主意書ニ云フ、孫敦信行將ト稱ス、亦五層塔並ニ梵鐘ヲ諏訪大神ノ祠ニ奉建シ、法全寺ヲ南山莊ニ開基ス云云

補ニ云フ　正編敦信ノ名ナシ、敦幸ノ子ヲ敦長知久左衛門尉入道行安トシ、其男ヲ敦宗太郎左衛門尉、又其男ヲ敦盛太郎左衛門尉トシ、後胤代々爲ニ御的射手ト-トス、却說敦行ニ二男子アリ、一ヲ盛俊十郎左衛門尉トシ、其子族數氏アリ、嘉元中ノ射手ト爲リ、又元亨中ノ射手ト爲リシコト吾妻鏡其他諸錄ニ見ユ、而シテ敦宗ノ子胤ニモ、永仁、元亨等ノ年始ニ御的射手ヲ勤仕セル趣キ、東鑑及ヒ諸錄ニ散見セリ、知久家傳ノ系圖ニハ敦幸ノ子ヲ敦信トシ、史蹟主意書ニハ敦幸ノ孫ヲ敦信ト記セリ、矛盾セルモノヽ如シ

又云フ、諏訪神社五層塔ノ結構ハ實ニ東洋屈指ノ建築物ナリキト人口ニ膾炙セリ、俚謠ニ「よくも建てたよ竹田の番匠、諏訪の神宮寺の五重塔」ト云云、其樣式ヲ老匠ニ質スニ地形龜腹石、心柱ハ礎石ノ挿シ込ミヨリ通シ五丈五尺餘アリ、四圍ノ柱ハ二層通シニテ十四本立、出組造リ、柱貫一層毎狛頭、龍頭、獅子頭、虎頭、豹頭等ヲ配合ス、又欄間ハ雲龍昇降ノ圖、四季ノ景物、桐ニ鳳凰、波浪ニ鯉、又水鳥、松上ノ鶴、岩上ノ鷲及ヒ鷹、田家四季ノ圖等ヲ毎層ニ配合、皆悉ク龍メ彫リ、天井ハ折上ケ組格子ニシテ仙人飼羊ノ圖、羅漢遠幽修行ノ圖、或ハ牡丹花、南天花、竹葉月影、其他名筆ノ寫圖、二

重垂木、檜皮葺キ、多挾ハ獅子ニ牡丹及ヒ陶淵明ノ愛菊、蘭、松ニ鷹、竹ニ雀、梅ニ鶯或ハ仙人幽谷ノ遊技等ヲ配合セリト、頂上ニ九輪丸形ノ柱ヲ樹ツ、丈ケ九尺餘、輪柱ノ根底ニ銅盤ノ丸形ヲ敷覆セリ、其銅盤ニ甲州ノ冶工、志田ノ道西鑄之ト彫レリ、礎石ヨリ尖頭迄高サ二十七間、施主伊奈郡主知久四郎左衛門尉入道行性敦行、法名法全寺殿延慶元戊申年五重塔建立トアリ、從來法華塔ハ七重ノ規模ナリシガ五重ニ改造セルハ此ノ時代ニヤ按ニ　勅願ノ制漸ク弛廢セシニ依ルヘシ、又巨鐘ハ是ヨリ先キ永仁ノ度ニ鑄造シテ同氏ヨリ献セシモノニシテ、丈ケ龍頭迄八尺四寸餘、周リ一丈三尺餘、徑口四尺二寸、厚サ下縁ニテ五寸餘（重量不詳）

銘ニ曰フ　在官稱諏訪宮、有寺、名神宮寺、鳧氏器拋音、不應秋分、蒲牢体微響匪驚曉夢、爰行性宿因暗促九乳之小形、願力終酬成百里之宏韻者、一族悉泰平、四生皆利益矣

永仁五年丁酉九月二日　　檀那知久左衛門入道行性　　大工上野住人、江上入道心佛國云云

右ノ巨鐘モ神佛甚淆ノ禁止令ニ依テ破碎シ以テ他ニ賣却セシト、故ニ其眞形ヲ識ルコト能ハス、唯其銘型ノ一片トヲ同地ノ醫師故守矢玄醫翁ノ家ニ所藏ス、古雅愛スヘシ、今ヲ距ルコト實ニ六百二十有餘年以前ノ製作物ナルヲ以テ考古家ノ愛惜スル所、宜ナル哉知久氏ノ如キ眞ニ異彩ヲ世上ニ放チシモノトイフベシ

敦貞

又名信起　四郎左衛門　土佐守　從四位下

法號越山　祐超禪定門

史蹟主意書云フ、敦貞勤王ノ志厚ク、信濃宮征夷大將軍宗良親王ヲ奉シテ忠勤至ラサル無ク、實ニ信濃ニ於ケル南朝ノ重鎮タリ、親王其功ヲ賞シテ郷義弘ノ名刀一口ヲ賜フ、其女ハ親王ノ妃トナリテ尹良親王ヲ生ム、父親王大ニ喜ヒ直ニ其着スル所ノ錦ノ直衣ヲ脱シテ之レヲ祐超ニ賜フ、祐超亦外祖ヲ以テ尹良親王ヲ輔翼シ專心恢復ヲ圖レリ、其功ニ依リテ錦ノ母衣ト旗トヲ賜ハル現ニ知久家ノ重寶タリ云云

補ニ云フ　福山氏著、宗良親王ト云フ書ニ（上略）正平二十四年十月云云、時ニ大河原城中宗良親王ニ近侍スル者、藤原光資（官式部少輔、中納言、正三位ニ叙任セラル）香坂高宗、武家方ノ諸軍來リ迫マラムトスルヲ聞キ、信州ノ同志ヲ糾合シテ之レニ當ル（中畧）而シテ神之峯ニハ知久四郎左衛門信起アリテ、搦手ノ指揮ニ任ス（下略）云云ト記セリ、敘上ノ記事ニ依リテ知久氏勤王ノ事蹟ハ炳乎トシテ史籍ニ見ハル、眞ニ信州ノ名門タルコト永切ニ絶エサルナリ、尙知久家傳來ノ系圖ニ祐超四郎左衛門、土佐守、從四位下、又名信起トアリ、浪合記ニハ尹良親王信州千野六郎頼憲（大塔記外一二ノ史錄ニハ頼繼ノ弟安藝守信嗣ノ子直頼ハ千野頼憲ノ改名トス）ノ嶋崎城ニ入リ玉フ、小笠原七郎秀政、知久四郎祐矯、並ニ高坂、滋野ノ一族之レニ屬ス云云トアリ、祐矯ノ名本編知久氏ノ系表ニ無シ、又知久家傳來ノ系圖、史蹟主意書等ニモ見エサルナリ、蓋シ祐矯ハ祐超ノ誤寫ナルベシ、大塔記、浪合記トモ其魯魚ノ誤リヲ受ケテ祐矯ト記セシナルヘシ、今茲ニ之レヲ訂定シテ尙博考ヲ俟ツ、甲斐國甲府市一蓮寺古過去帳、應永二十八年ノ卷ニ專佛房心佛房知久五月ト記セリ、蓋シ祐超同寺ノ古刹名藍ナルニ歸依シ、資ヲ寄セテ冥福ヲ祈ルコトヲ託セシニヤ、當時諸侯伯ノ名刹ニ歸依シテ冥護ヲ託スルコト往々ニシテ、近代

ノ紀州高野山、信州善光寺、江州比叡山等ニ歸依スルニ異ナラスト云フ、右ノ一遍寺古過去帳ハ國寶ニ編入セラレシ古書ナリ、因ニ記ス、甲府一遍寺古過去帳ニ永享八年ノ卷四月廿七日衆一房、同年七月廿一日願阿彌陀佛知久、又年月日無クシテ利佛房ト記セリ知久氏ノ一遍寺ニ歸依セルコト前ニ述フルガ如シ、唯名字ヲ記サザレバ其誰ナルヲ知ルコト能ハス、遺憾ノ極ミトス

爲行 四郎 信濃介

法名奇山正珍禪定門

補ニ云フ　源氏出自ノ知久系圖ニハ（上略）祐超四郎左衛門尉ノ次ハ、禪久土佐守トシ禪久ノ子ヲ奇山土佐守ト序タリ、依レ是觀レ之祐超ト奇山ノ中間ニ禪久ノ一代ヲ脫セルモノヽ如シ、尙後考ヲ俟ツ

賴矯 四郎 信濃介 民部少輔

法名太量清毅庵主

史蹟主意書ニ孫賴矯、興禪寺ヲ知久郷ニ開ク云云

補ニ云フ　源氏出自知久系圖ニハ太量左衛門尉トアレトモ實名ヲ記セス、本氏傳來ノ系圖ニ從ヒ實名ヲ賴矯トスルニ從フナリ、此人興禪寺ヲ知久郷ニ開ク云云、興禪寺トハ今ノ上穗町光前寺ノ事ヲ云フニヤ、或ハ興禪寺ハ別ニ存在スルニヤ、尙能ク尋ヌヘシ

賴季 信濃介 彈正少弼

法名巨岳眞尙

補ニ云フ　一系ニハ彈正少輔トアリ、恐クハ誤寫ナルヘシ

賴尙 七郎 信濃介

法名元中建督

補ニ云フ　一系ニハ兄ヲ元仲民部少輔トシ、弟ヲ仙耀四郎左衛門尉トス、而シテ仙耀本家ノ主ニ立チ家名ヲ其子易先ニ傳フトアリ

賴爲 七郎 信濃介 民部少輔

法號易先全準

補ニ云フ　法號ノ易先一系ニハ易光ト記セリ、蓋シ是モ先光字形ノ似タルヲ以テ誤リシナルヘシ、知久氏傳來ノ系圖ニ從ツテ易先全準ヲ法號ノ字ト定ム

賴元 七郎 從四位下 大和守

史蹟主意書ニ賴元、野池神社ヲ再建ス云云、又云フ、弘治二年武田晴信等來リテ神峯ヲ攻ム、大和守賴元迎ヘ戰ツテ敗レ嫡子頼康以下戰死シ城陷ル、賴元傳來ノ重寶ヲ捧持シ遁レテ今川義元ニ依ルト云云

頼康　太郎　四郎左衛門

法號東岸院殿青山庸的

史蹟主意書ニ頼康毘沙門堂ヲ安樂寺ニ再建ス（頼康ノ事蹟他ニ多クアリト雖モ其ハ弟頼氏ノ譜中ニ併記ス、參照スヘシ）

頼氏　七郎　從四位下　大和守

法名玉川寺殿梅叟紹英庵主

史蹟主意書ニ云フ　天正年間次子頼氏德川家康ニ屬シ、祖先所領ノ内、伊那郡六十九ヶ村高六千貫（六万石）ノ地ヲ給ハリ再ヒ神峯ニ居城ス、頼氏ノ妻ハ遠州木寺宮ニシテ龍松院第二ノ姫君ナリ、頼氏文永、安養ノ二寺ヲ再興ス、其功ニ依リテ從四位下ニ叙セラル云云

補ニ云フ　伊那温知集ニ、弘治二年九月上旬、武田信玄打入ト聞キ父頼元及ヒ兄頼康舍弟安房守ト天龍川ヲ隔テ小澁川近邊、供野（伴野トモ書ス）迄出陣防戰スト雖モ敗軍シテ兄四郎左衛門尉頼康、並ニ知久譜代ノ人々等五十餘人、林前ノ川邊ニ於テ討死ス、於レ是頼元兄弟降伏ス、次男頼氏ニ三女ヲ相添エテ人質ニ出ス、依リテ知久領地安堵ス云云

又甲斐國志、士庶信濃ノ部ニ知久（又千久）氏アリ、天文廿三年十月信濃ノ千久殿、四郎殿以下八人郡内鵜ケ島ニ流サル、大原地下人之レヲ守ル、同二十四年五月二十八日千久殿其子四郎殿以下舟津ニテ生害ナサルト云云、此ノ地ニ河口湖ト云フアリ、富士山ノ北麓ニ當ル、鵜ケ島ハ其湖中ノ一島地ニテ今モ存在ス、而シテ舟津村ニ八王子神社ト云フ小祠アリ、古老ノ傳説ニ千久殿生害ノ後里人其靈ヲ併祀シテ冥福ヲ祈リシモノト云云、今ハ八王子神社ノ名ニ因ツテ素尊ノ御子神ヲ祀ル所ト主張セリ、是レ全ク事實ヲ謂リシモノト云フ、又一ノ傳ニハ知久氏兄弟武田家ニ降服シ、人質ヲ諏訪湖ノ鵜嶋ト云フ所ニ流サル、後チ叛ヲ企テ鵜嶋ヨリ出奔ス、此ノ事露顯セシカバ父頼元本城知久ニ居城成リ難ク、尹良親王ヨリ拜領ノ錦ノ母衣、旗等ヲ所持シ神峯ヲ落去リ、駿河國今川家ニ寄食ス頼元年老ヒテ後終ニ駿河ニ於テ卒ス云云、叙上ノ記事ニ依リテ判スルニ武田信玄知久征伐ハ天文廿二年十月トス、是レ眞ナルヘシ、弘治二年九月上旬武田晴信兵ヲ出シテ討伐ストアルハ疑ハシキ説トスヘシ、伊那郡在來ノ諸記汎々トシテ決ヲ採リ難シ、按ニ舟津ニテ生害セシ知久殿トハ頼元ニテ、四郎殿トハ四郎左衛門頼康ノ事ニテ、以下八人ハ部屬ノ者ナルヘシ、然レハ頼元逃レテ今川氏ニ寄ルト云ヒ、四郎頼康ハ討死トアルハ誤傳ニシテ採ルヘカラサル説トス、甲斐國志ノ所記ハ信據スヘキ論説トス、甲斐國志ハ武田家時代ノ古記ニ依テ編成ノモノナレハ信スベシ、頼元ノ三男安房守ハ伊那郡ニ歸リ舊臣ニ依リ、兄頼氏ハ諸國ヲ流浪シ居レリ、天正十年壬午春武田家滅亡後チ頼氏織田信長ニ屬ス、信長生害ニ依テ德川家康ニ歸附シ本領ヲ給ハル、知久老臣守護シテ濱松侯ニ昵近ス、同年家康公ノ命ニ依ツテ遠州入野ノ龍松院第二ノ姫、貴寺ノ姫宮ヲ頼氏ニ嫁セシム無官ニテハ成リ難ク欽命ヲ以テ大和守ニ任ス、同十一年遠州ヨリ知久ニ歸城ス、翌年十二月頼氏濱松城ヘ出仕ノ節不慮ニ生害ス、ソノ時子息萬龜幼少ナレハ貴寺ノ姫宮後見ス尚叔父下野守陣代タリ、然ルニ下野守死去セシカバ其弟右馬助陣代ヲ勤ム、而シテ同十四年飯田城主菅沼大膳亮（大膳亮一ニ小大膳ニ作リ誤定則トス）ニ對シ右馬助無禮セシカバ事ニ

寄セヲ右馬助ヲ飯田城ニ招キ寄セ不意ニ射殺ス、依テ神峰騒動ス、貴寺ノ姫宮万龜ヲ抱キ此ノ事ヲ家康公ニ目安ヲ以テ訴フ、家康公大久保相摸守忠世（一ニ忠世小田原城拜領ハ天正十八年ノコトヽ云フ、萬龜母子飯田城ヲ脱走セシハ天正十四年ノ事ナレバ年代及ハス、右母姫宮ヨリ飯田城主ノ横暴ヲ直ニ濱松城ヘ訴ヘシヲ是トスヘシ）ニ仰付ケ万龜ヲ十三歳ニ至ル迄養育セシム、同十九年家康御上洛ノ砌、小田原城御旅宿ナリシカバ大久保氏ヨリ知久万龜ノ事ヲ上聞ニ達ス、家康公聞コシ召サレテ三百俵ヲ萬龜ニ下サレ御小性組ニ召出ス、其後慶長五年關ヶ原御陣ニ萬龜御供シテ功アリ、翌六年伏見城ニ於テ大久保相摸守忠世欽命ヲ傳ヘテ伊那郡古領ノ内、三千石ヲ給ハルヘキ朱章ヲ頂戴（下略）ス云云

則直　萬龜　伊左衛門

法號通源院殿心縁宗清

史蹟主意書ニ頼氏ノ死スルヤ嗣子則直尚幼ナリ、飯田城主菅沼大膳亮ニ預ケラル、既ニシテ大膳禮ヲ失フ、依リテ則直母子去ツテ小田原城主大久保忠世ニ依リ再ヒ德川家康ニ属ス家康其名族ニシテ將ニ家名ノ斷絶セムコトヲ惜ミ、阿島、田村、河野、南原ノ四邑及ヒ虎岩ノ一部三千石ヲ給シ、伊那郡七士ノ旗頭ヲ命ス、則直長シテ居館ヲ阿嶋ニ設ケ移リテ此ニ居ル、實ニ慶長九年ナリ、翌十年尹良親王ノ祠ヲ浪合ニ建立シ奉ル、元和六年九月交代寄合席ニ列シ、小笠原（伊豆木館主）座光寺（山吹ノ館主）ノ二氏ト共ニ信濃衆ト稱シ、其筆頭トシテ柳之間詰大名ト同一ノ待遇ヲ受ケ浪合、小野川、帯川、心川ノ四關ヲ守備シ、信州取締被ニ仰付ヘ、御役世襲タリ云云

補ニ云フ　則直三千石ノ朱印狀ヲ拜戴シ舊領ニ入部、三ヶ年居住シテ今ノ阿嶋ニ居館ヲ建築落成シ仍テ移住ス、知久領四ヶ邑後チ七ヶ村ト成レリ云云、伊那温知集又之レト同説ナリ、寛永諸家系圖傳ニハ知久氏元祖、源滿快四代源爲公右馬頭、從五位下、伊豆守信濃守、母ハ河内守源頼信ノ女也、次ハ中津乗太郎、次ハ爲實、次ハ頼繼、次ハ信貞知久左衛門五郎、正嘉二年鎌倉ニ於テ武者的ノ人數ニ加ヘラル、是レヲ知久氏ノ元祖ナリトアリ、而シテ其十二代ヲ頼氏トス、式部少輔、從五位下、大和守、伊豆守、天正十年ヨリ家康ニ仕ヘ屢功アリ、甲斐國御山高御番モ勤ム、又信州佐久郡ノ内ノ前山、岩尾等ニテ軍功ヲ爲スコト最大ナリ云云、次ハ則直伊左衛門、家康ニ仕ヘ功ヲ爲ス、慶長六年信州伊奈郡ニテ三千石拜領ス

直政　伊介　内藏助　伊左衛門

補ニ云フ　一系直正ニ作ル、法名圭譽齋、又寛永諸家系圖傳ニハ直政内藏助、將軍秀忠公ニ仕フ云云、亦一書ニハ頼直監物、改直政、内藏助、將軍家光公ノ命ニ依リテ信州伊奈郡浪合、帯川、心川、小野川、四ヶ關所ノ守衛ヲ勤ム、且ツ幕府交代寄合信濃衆、柳之間詰ニ列スヘキニ定メラル云云、一ニ伊奈三騎トモ稱セラル

夫人大給氏　三河國大給城主六萬石、大給家乗ノ次女ナリ

補ニ云フ　大給家ハ後三州幡豆郡西尾城主ニ封セラレ、高六万石代々之レヲ領シテ明治維新慶應ニ至リ華族ニ列セラレ、現今ハ松平ヲ稱號トシテ子爵ノ榮班ニ居ル、現代當主

松平乗承ハ正四位勳三等、貴族院議員タリ

某

善左衛門　一ニ善右衛門

一系ニ兄頼直ヨリ三百石分知ヲ受ケ之レヲ領ス、但シ本家ノ老職ヲ勤メ以テ代々ニ襲クト云云

直明　内藏助

補ニ云フ　直明初名伊介、改伊左衛門尉、慶安中ヨリ將軍家ニ仕フ、叔父善左衛門ニ三百石分知シ、殘高二千七百石ヲ領ス、勤方先格ノ通リ云云、又寛永諸家系圖傳ニハ直明伊助、將軍家ニ仕フ、家紋車輪云云トアリ、因ニ記ス、今ハ知久家ノ紋章ハ御所車ヲ用フト聞ケリ、知久領四邑、即チ河野、阿嶋、田村、南原ニテ天保改高三千五十石七升ト高帳ニ見ユ、之レニ虎岩村高一千八十一石六斗七升五合ヲ加算スルトキハ正ニ四千百三十二石三斗七升五合トナルヘシ、此内知久氏別家分領ノ高有リ、差引知久氏領ハ實ニ三千數百石ニ至ルヘシ、是レ代々ノ領主新田開發ノ餘裕ナルヘシ、故ニ一隊ノ兵ヲ養フニ足リテ德川幕府ノ藩屏トナルノ實アリシナラム、伊那三騎ノ芳名幕府中ニ鑠々タルコト宜ナル哉

昌直　伊介　伊左衛門

史蹟主意書ニ云フ　伊左衛門昌直、觀音堂ヲ增築シ、水道ヲ開キテ藩中ノ飲用ニ供シ、塘ヲ穿チテ旱魃ニ備ヘ、瀧川井ヲ開キテ田園ヲ養ヘリ云云

一書ニ寛文中御預リノ下條領ヲ命ニ依リテ返還ス

頼久　五郎　數馬　監物

史蹟主意書ニ云フ　頼久天龍川ノ水ヲ引キテ新田ヲ拓キ、元文ノ凶作ニハ倉廩ヲ發キテ窮民ヲ恤ミ、寛保二年八月ニハ宗良親王ノ供養塔ヲ遠州井伊谷、龍潭寺（一ニ龍潭寺ヲ了短寺又龍湍寺等ニ作ル）ニ建立ス云云

補ニ云フ　官幣中社井伊谷宮正殿ノ背後、密林中ニ土堤ヲ築キテ方凡六十間許リ人ノ出入ヲ嚴禁ス、其中央ニ一冢アリ、冢上ニ石浮圖寶筐塔ノ如キヲ建ツ、之レヲ同宮神職ニ質セシニ、故親王宮ノ靈塚ニテ石碑ハ即チ御宮ノ尊塔碑ト云ヘリ、蓋シ頼久ノ建立セシ供養塔ナルカ、一拜自ラ敬虔ノ念起リテ其昔時ヲ偲ハレタリ、頼久元祿中家督タリ、元文四己未年七月下條領再ヒ御預リヲ命セラレ支配ス、延享元甲子年十一月卒ス、法名法源院殿達三英岩居士、柏原村玉川寺ニ葬ル、玉川寺一ニ玉泉寺ニ作ル非ナリ、此寺郡内屈指ノ名刹ニシテ且ツ古歌アリ、云ハク

しなのなる小笹か原に降るあられ、れちて流るゝ玉川の水（名寄集ニ出ツ讀人不知トアリ）

信濃國歌材ノ一所トシテ世ニ見ハル、江戸幕府ヨリ高五石ノ寺領朱章ヲ賜ハリシ靈塲ナリ

某

勢負

同郡伊豆木館主小笠原長泰ノ養子、道號三樂、此人小笠原氏ヘ入婿ノ後ハ長朝ト改名セリ

賴直 帶刀 號ニ靜水ー

延享二年正月家督

賴中 辰之助 主殿 伊左衛門

寶曆年間ヨリ館主

賴庸 鎌吉 雄之助 監物

天明中ヨリノ館主

賴福 伊介 隼人 圖書之助

史蹟主意書ニ云フ　賴福淵靜寺ヲ創建ス

夫人小笠原氏　越前國大野郡勝山城主二万二千石餘、小笠原飛彈守源信房ノ嫡女ナリ、此ノ小笠原家ハ其先信州伊那郡松尾城主ニシテ武田信玄ノ弟、逍遙軒信綱ノ女婿小笠原信嶺ヨリ出ツ、飛彈守信房ハ信嶺七代ノ主ナリ、代々勝山ヲ領シ、明治廢藩ニ至リ華族ニ列セリ、現主ヲ正五位小笠原勁一ト云ヒ子爵ヲ授ケラル、尙舊領勝山ニ居住スト聞ケリ

〔以上華族名鑑ニ據ル〕

賴衍 千馬佐

賴匡 錚藏 主殿 靜衛介

夫人黑田氏　上総國望陀郡久留里城主三萬石、黑田豐前守丹治直候ノ次妹ニテ實ハ先代直方ノ女ナリ、直候養ッテ女トセリト

補ニ云フ　此ノ黑田氏ハ丹治姓ニシテ源平武人時代、鎌倉右府ノ寵臣熊谷次郎丹治直實ノ遠裔ト云フ、代々久留里城ヲ領シテ明治廢藩ニ至リ華族ニ列ス、現主ヲ黑田和志ト云フ、正四位子爵貴族院議員ニ任セラル（華族名鑑）

賴謙 万松丸 繩一郎 左衛門五郎

史蹟主意書ニ云フ　賴謙明治維新ニ際シテ王事ニ勤メ、慶應四年正月總督府（總督府ハ從三位岩倉右兵衛督源具視卿兼海陸軍務會計事務長）ノ命ニ依リ浪合、小野川、帶川、心川ノ四ケ關門及ヒ碓氷嶺ノ新關ヲ守備セリ、同年三月京師ニ朝シ四月軍資金八十兩、米四十石ヲ總督府ニ獻ス、五月太政官ヨリ高三千石本領安堵、從前ノ通リ王事ニ勤ムヘキ旨被ニ仰付ー、六月中太夫ニ任セラル、明治元年士族ニ列シ、家祿ヲ奉還シテ歸農ス云云

補ニ云フ　士族編入ノ布告ハ明治二年十二月二日發令セラレタリ、參照スヘシ

史蹟主意書ニ、廢藩以來子孫屋カニ其祀ヲ存スルノミ、然レトモ知久氏ノ功タルヤ永ク湮

滅スヘカラス、神代以後信濃國ノ豪族ニシテ或ハ南朝ニ仕ヘテハ忠節ヲ盡シ、幕府ニ仕ヘテハ其職ヲ完ウシ、明治維新ニ際シテハ王事ニ勤メ、或ハ神祠ヲ建テ、寺院ヲ開キ、堤防ヲ築キ、田畝ヲ拓キ、窮民ヲ恤ム等枚擧ニ遑アラザルナリ、而シテ古時ニ於テハ再ヒ宮家ト婚ヲ結ハレ、現時ハ尚近親ニシテ華族ニ列セラルヽ者數多アリト云云

頼温 萬松

明治維新ニ際シ頼謙ノ陣代ヲ勤ム

夫人美津子

峰四郎

現時教育ニ從事シテ兵庫縣明石女子師範學校教諭ヲ奉職セリ、是レ知久家ノ現代主タリ

知久家分流小林、虎岩二氏ノ略系

◉行阿入道

知久左衛門尉與阿（敦信）ノ次男ナリ、分創シテ小林ト云フ所ニ居住、在名ヲ以テ家號トナス、而シテ知久家ノ老職ヲ勤メ之レヲ代々ニ傳フト云

某 小林山城守

某 同河内守

盛當 貫仲

頼春 玄蕃

此ノ時代ニ虎岩村ニ移リ居住ス、又在名ヲ以テ虎岩氏ニ改メ稱ス

補ニ云フ　一本系圖ニ天正中ニ虎岩宮内正憲（一ニ正實ニ作ル）ノ次男虎岩平太夫虎岩館ニ住ス、故アッテ自害セリ云云

政春 大藏大輔

虎岩氏ヲ稱ス以下同シ

正憲 宮内

頼次 虎岩玄蕃

田村ト云フ所ニ居住

補ニ云フ　伊那系圖其他一二ノ略系ニ天正中虎岩宮内正憲（一ニ正實ニ作ル）ノ次男故アッテ自害ス、是ヲ虎岩平太夫ト云フ云云

賴員　虎岩玄蕃允

此賴員本家知久氏落去ノ時關東ニ隨行スト云

知久氏分家

◉某　知久善左衛門

知久直政ノ次男分知三百石ヲ受ケ、田村ト云フ所ニ居住ス

某　權九郎　享保中ノ館主

實ハ江戸幕臣多羅尾久八郎ノ男ナリ、虎岩七郎兵衛ノ嗣養子トナリ家名ヲ相續ス

補ニ云フ　多羅尾氏ハ江戸幕府御代官職ヲ奉務シ、近江國信樂陣屋ニ居住、高千七百石、近江、伊勢、美濃諸州ニ於ケル幕府領ヲ支配セリ、江戸屋敷ハ青山土手四番町也

叙上ノ如ク知久家ノ分流ニ小林氏ヲ稱スルアリ、後ニ虎岩ヲ家號トナス、皆在名ヲ以テ稱スル所ト云フ、甲斐國誌士庶信濃ノ部ニ小林氏、虎岩氏等ハ知久氏ノ分流トアリ、註ニ虎岩宮内正實ノ男平太夫ハ林ト云フ所ニ住セリト記セリ、武田家時代ノ人ト見ユ、又官社諏訪神社古祭式神使日記ニ文安ノ頃虎岩氏ノ人アリ、神使奉仕ノ事モ古記ニ見ユ、虎岩邑ハ元ト諏訪神社神領ナリ、最モ由緒アル家名ト云フ

某　七郎兵衛　元祿中ノ館主

座光寺家略系譜

座光寺ノ地名ハモト寂光寺ト云フ古刹アリ、一ノ傳說ニ善光寺本尊如來難波ノ堀江ヨリ出現セシヲ迎ヘテ信濃國ニ移スノ時、此ノ地ノ大磐石上ニ安置シ暫時里人ヲシテ拜禮セシメシ舊跡タレバ、後人一宇ノ佛寺ヲ剏立シ以テ寂光寺ト稱セリ、依テ寂光寺ノ名久シク傳ハリシト云フ、何時トナク地名モ寂光寺ト呼ブニ至レリト云云

或ハ云フ、信濃國定額寺ノ一タル廣極寺ノ名稱久シク年所ヲ經ル間ニ廣極寺廢タレ、寂光寺之レニ代立セシトモ云フ（廣極寺ハ大同三年僧傳教、神ノ御坂路エノ峻嶺ヲ登降スル人困憊勞苦スルヲ救ハムカ爲メ奏上シテ建テシ寺ナリト云フ、當時國毎ニ廣濟、廣極ノ二寺ヲ建テ行人ノ苦痛ヲ救護スト元亨釋書ニ載錄セリ、之レ傳教弘道ノ一策タラムカ）貞觀八年二月二日ノ條（日本書紀）ニ云フ、信濃國ニ於ケル古刹伊那郡、寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙樂寺ノ五ケ寺ヲ以テ定額寺トスト見エタリ、然レハ寂光寺ガ廣極寺ノ遺跡カ否カハ未ダ詳カナラサレトモ古刹タルコトハ知察スルニ足ル、其後又久シク年所ヲ經ル間ニ寂光寺廢レ、座光寺又之レニ代立ス、寂光、座光、音訓相近キヨリ終ニ轉訛シテ座光寺ト呼フニ至レリトモ云フ、但シ座光寺村ニ如來寺ト云フ寺アリ、御朱印地ヲ有シテ善光寺如來、信州奉移最初ノ寺ト稱シテ他ニ誇ル古歌（俗謠）アリ、依テ按スルニ古刹寂光寺ガ座光寺ニ轉訛シテ地名トナリ、善光寺如來ノ舊跡ハ如來寺ニ餘波ヲ止メシナラム、而シテ座光寺ト唱ヘ來リシ地名モ亦頗ル舊キモノヽ如シ、興國元年十一月二十二日、宗良親王信濃國ノ官軍ヲ率キ美濃國家族土岐頼遠ト座光寺原ニ於テ相戰フ、翌二十三日兩軍血戰卯之刻ヨリ申ノ刻迄戰ヒヲ續ケ賊土岐氏ノ軍敗潰シ頼遠身ヲ挺シテ逃ル、是ヨリ信州ノ官軍威勢大ニ振フト云、又正平十四

年官軍ノ勇將高坂高宗、民部卿光賓（光賓ハ吉野朝廷ヨリ親王ニ附隨セシメシ官人ナリ式部少輔權中納言、正三位）井伊直朝（今ノ伯爵井伊家ノ中祖ト云フ）等三百騎餘リヲ以テ畠山國清ノ部將、江戸堯寛ヲ座光寺原ニ討テ之レヲ走ラス云云、依レ是觀レ之座光寺ノ地名モ中世專ト稱セシコト知ルヘシ、而シテ座光寺家ノ氏號ハ此地ヲ領セシヨリ稱セシナリ、其初祖ノ氏名發端ハ諏訪神家ノ分流、藤澤次郎清親ノ孫光清（一ニ親實）座光寺四郎ト稱セシ趣キ其古系圖ニ見ユ之レナリ、子孫聯々相承シテ今ニ至ル、然ルヲ一書ニ座光寺氏ハ鎮西八郎源爲朝ヨリ出ツトス恐クハ誤傳ナラム、源爲朝ハ保元ノ乱ニ敗レ伊豆八丈嶋ニ放タルト云フ、其子孫ト稱スル人琉球嶋ヲ攻メ、彼ノ國王ト爲リシコト諸記ニ見ユ、其他ニ子孫アリテ諸國ニ散居、一領主ト爲リシコト明據ナシ尙此信濃國ニ來リテ一領主トナルコト覺束ナシ

却說、座光寺氏ハ純粹ノ神家ノ類族ニシテ代々伊奈郡、座光寺郷（後ニ二百五十貫文ノ地ト云フ）ヲ領セシガ數百年ヲ經ル間ニ家運衰微セシカバ伊奈眞人爲公ノ子胤其遺跡ヲ繼キ復舊ス、是ヨリ源氏ヲ稱スルニ至レリ、此等ノ變遷ニ際シ源爲朝ノ胤ト云ヒシモノカ、伊奈眞人爲公ハ和訓（多米登毛）ト稱セシトアレバ此等ヲ混訛セシニハ非サルカ、或人云フ、鎌倉幕府以來織豊二家ヲ除クノ外、德川氏ニ至ル迄源家將軍ヲ以テ海內ヲ統理セシカバ隨從ノ諸侯伯以下家人ニ至ルマテ、阿諛諂佞ヲ以テ家名ヲ保持スルノ主義流行セリ、是レガ爲メ主家ニ對シ異姓ヲ稱スレバ自ラ親好ノ疎ムズルヲ恐レ、貴重ノ家系ヲモ故ラニ譌リテ主家ト同姓ヲ稱スルニ至リ、舊記古系ハ燔棄或ハ蠹食ニ任セテ失亡ニ歸セシメシ類枚舉ニ遑アラズト云云、或ハ其レ然ラムカ、彼ノ常州水戸藩主宰相贈正一位德川光圀公ノ如キ、加州宰相菅原綱紀公ノ如キ、前後シテ國史編纂ノ業ヲ起シ、鴻儒碩學ノ士ヲ聘用シ其事業ニ當ラシメ、其學者ヲ部署シ諸國ニ派遣シ、古文書、古系圖、珍書等ヲ蒐集シ以テ編纂材料ニ充テタリシガ前田家ニ於テハ綱紀侯夭折ノ不幸ニ逢着シ爲ニ編纂事業ハ中止シ、而シテ蒐集セシ材料ハ之レヲ庫中ニ納藏シ暫ク時機ノ來ルヲ俟ツコトヽセリ、而カモ水藩ニ於テハ黃門光圀侯奮起編纂事業ヲ繼續シテ大日本史ヲ世ニ公ニセリ、其氏族志叙ニ云フ、自ニ建武一後世、歷ニ喪乱一、搢紳流ニ落四方一、武人盛衰不レ常、譜牒由レ是多亡、武人窮甚者、或沽ニ家譜一、而姦民買得即冒ニ其氏號一、稱ニ武人一、於レ是姓族益乱矣云云、實ニ其叙ニ云フ如キモノ過半ニ居ルモノヽ如シ、此諏訪神家ニ於テハ神代以來ノ系譜傳存シテ本支共判明シテ毫モ疑ハシキ点更ニ無シ、其眞正ノ系圖彼ノ前田家ニ貸與シテ編纂材料ニ充テシメタルニ同家ハ前記ノ如ク不幸ニ逢着シ貸與セシ神家系圖ハ遂ニ庫中ニ封藏セラレテ格禁ノ厄ニ遇フノ止ムヲ得サルニ至リテ幾ンド貳百數十年ヲ經過セリ、故ニ貸與當時ノ眞情ハ自然煙滅シテ貴重ノ神家系圖ノ本質及其有無ヲモ誰一人語ルモノモ無ク源氏出自トセル諏訪系圖及大系圖ノミ世ニ知ラレタリ、又上社大祝家系圖ニ二種アリテ其古キニハ諏訪氏元祖ハ用明天皇ノ皇子ヨリ出ツトシ、伊奈兵衛尉ハ其舅ナリ知久、座光寺、禰津、矢澤、保科、藤澤ハ其一族乘ナリ云云ト見ユ、又右系圖ヨリモ少シ新シキ系圖ノ方ニテハ元祖有員ハ桓武天皇第六ノ皇子ニシテ、其レヨリ二百餘年之間系圖絕エテ知レズトセリ、斯ノ如ク無緣ノ系圖ヲ所持シテ大祝元祖有員ハ桓武天皇ノ第六ノ皇子ト誇稱セシモ畏キ皇室ノ御系圖ニ有員親王ト稱ヘ奉ル御方更ニナシ、前ノ古キ系圖ニ云フ、用明天皇ノ皇子ノ諏訪大祝ニ降下セシ御方モナシ、是ハ案フニ眞正ノ諏訪神家系圖並ニ之レニ附帶セル譜牒ハ大祝家ヨリ既ニ前田公爵家及ヒ水藩ニ貸與シテ彼レ此レ數百年間還附セザリシカバ遂ニ貸與セシ時ノ事情煙滅セシヨリ好事ノ人アリテ用明天皇出自、或ハ桓武天皇出自等ヲ譌作シ以テ持傳セシモノカ、道カ知久、座光寺、禰津、保科、矢澤、藤澤等一族乘ナリト云フコトハ記憶ニ存シテアリシニヤ、譌作ノ系圖ニ揭記セリ、明治ニ至リ政府ニ於テハ修史館ヲ設ケ、在來ノ著編改刪等ニ資スル材料ヲ蒐集スヘキヲ布告シ、學者ヲ四方ニ派シテ其探訪ニ當ラシメタリ、適々加賀舊藩前田公爵家ニ隱秘シアル古書ヲ探査セ

ルニ方リ、茲ニ諏訪神家系圖ト云フモノ出テタリ、諏訪郡ノ志士飯田武郷氏其探査ノ中ニ在リ、神家系圖ノ發見セラルヽヤ、之レニ依テ平素ノ疑團始メテ氷解シ、愈々信濃國、開闢ノ徑路ヲ辿ルヲ得タリトテ諏訪神家並ニ科野國造考ト題シテ一著述ノ稿ヲ起セシナリ、翁多端成著ニ及ハスシテ歿セルモ其稿本ハ余借覽謄寫シ以テ編著ノ參考トナス、座光寺氏モ神家系圖ニ分起詳カニ錄載シテ見ユ、故ニ予ハ鎭西八郎源爲朝ノ流ト云フニ贊スルコト能ハス、今倩々按フニ爲朝ノ胤トナスハ彼ノ勅錠ニテ赴任セシ伊那馬太夫源爲公ノ訓讀（ためとも）ト書セルモノアリ、然レバ爲朝、爲公、同訓ナルヨリ不文時代ノ人鎭西八郎爲朝ノ勇名ヲ借リテ謟ハリシニヤトモ想到ス、爲公ハ伊那大領ニ任セラレテ公然來リ、信州ノ施政ヲ掌握セシコト史籍ニ瞭カナリ、此人赴任セルハ神家ノ一族或ハ滅亡シ、或ハ其器ニ中ラサリシ等ノ情實ヨリノ事ナレバ來任スルヤ、漸次子女ヲ神家ノ遺裔トシテ繼カシメ自家ノ門葉ヲ繁殖セシメ、信濃源氏ト云ヒ、伊奈源氏ト云フニ至リテ根本ノ神家ヲ稱スルモノ絶ユルニ至リシコソ事實ナレ、遂ニ因襲ノ久シキ種々ノ誤傳モ加ハリ以テ彼此彌縫シ、源氏若クハ藤原姓ヲ稱セザレバ家聲モ揚ラザルガ如キ世態ニ化成シ來リシハ慨嘆ノ至リナラスヤ、座光寺家ノ信州ニアリテ名族タルコトハ甲斐國誌士庶、信州ノ都ニ云フ、座光寺被官、寺柳柳助、同緣助兄弟、甲州ノ士長江長右衛門（板垣信方ノ譜代）ヲ殺ス、其子長八信州ニ至リ父ノ仇ヲ報シ、寺柳ヲ討チシ事アリト云云、長助ハ武田義信衆ナリ、後ニ內藤修理ニ屬シ上州三日尻ニテ討死、武功數度ナルヲ以テ感狀七通ヲ藏セリト、箕輪軍記ニ長八ノ名ハ道方ニ作ル云云トアリ、本文ノ如タ座光寺氏ハ信州ニ於テ被官ヲ有セシ名門ノコト推シテ知ラル、座光寺氏ニ關スル天正以前ノ系圖ハ既ニ渴載セシカバ再ヒ贅スルノ要ナシ、天正以後ノ略系譜ヲ左ニ記シテ公ニセムトス

則チ左ノ如シ

◉某　治郎左衛門　一ニ諱喜慶トス

法名喜慶秋岳道仲、實ハ本家賴近ノ二男ナリ、松岡氏ニ屬ス、後故アッテ勘氣ヲ蒙ルニ依テ兄越後守ノ家ニ蟄居ス、松岡氏後難ヲ恐レ兄弟ヲ滅セムトス、治郎左衛門演松城ニ至リ寃ヲ德川公ニ訴フ、公審判シ忽チ不審解ケ松岡氏ヲ滅シ、治郎左衛門ヲ召出シテ三百俵ヲ與ヘ家人ニ列ス、天正十八年相州小田原軍ニ參加シ功アリ、依テ上野國大竹村ニ於テ一千石ヲ賜フ本家兄越後守嗣子ナキヲ以テ治郎左衛門ニ命シテ伊奈郡（正德四年四月二十八日、江戸幕府諸國郡名呼稱ノ誤リヲ改メ令シタル中ニ、信州ニアリテハ更科ヲ更級、伊奈ヲ伊那、諏訪ヲ諏方ト稱セシム、諏方ハ後チ天保十四年五月二十一日又諏訪ニ復舊セシコト前編ニ記セルガ如シ、爾後伊那郡ト書スルハ此ノ令ニ由ッテナリ）ノ本領ニ替ユ、五百石加增シテ都合一千五百石トシテ座光寺氏ヲ繼カシム云云、一本系圖ニハ座光寺治郎左衛門、法名喜慶秋岳道仲本姓片桐丹後守爲眞ノ末流ナリトアリ、片桐氏末流云云ト云フハ前序ニ記セルガ如ク、伊奈馬太夫源爲公ノ胤、片桐氏ヲ繼ク者アリテ其等ヨリ結緣ノアリシニヤ、故ニ此ノ如ク誤傳ヲ生セシカ考ヲ俟ツ、科野佐々禮石ニハ（上畧）信濃守源爲公ノ四男、片桐藏人太夫爲基ノ後治郎左衛門貞房、郷名ニ依ッテ座光寺ト稱シ此ノ所ニ住ス（中略）天文十二年武田家ニ降ル其子左近賴近天正十年上州大竹村ニテ千石ヲ賜ハリ、慶長六年德川家ニ屬シ千四百石餘ヲ賜ハリ、舊里伊那郡山吹ノ館ニ住ス、延寶六年座光寺四代目采女舍弟作左衛門ニ三百石ヲ配分シ、本家千百十三石餘ヲ領シ、交代寄合旗本ニ列ス云云ト記セリ、大同小異不一也

爲重 治郎左衛門

法名日乘

爲實 勘左衛門 一ニ爲眞

法名日傳

補ニ云フ 一本系圖ニ先祖ハ鎭西八郎爲朝之子爲家ニ出ツ、爲家下條村ニ住ス、後數代ニシテ座光寺村ニ移リ氏トス、德川氏ノ始メ座光寺丹後守爲眞山吹村ニ館シ千石ヲ領ス云云トアリ、此等神家座光寺衰微ニ乘シ源姓ノモノ代禪ノ起因ナラムカ、附テ考ニ供フ

又甲斐國誌ニ座光寺三郎左衛門貞房片桐氏ノ支流、一ニ左近頼近トモ見エタリ、氏族ノ出ツル所異說アリ未詳云云ト記セリ、源姓ヲ稱スル未ダ此時ニ至リテ止マス

爲治 初メ喜兵衛 勘左衛門

入道江入 延寶九辛酉年家督

某 作左衛門

兄爲治ヨリ三百石分知

爲勝 勘左衛門 主税 喜兵衛

正行 勘左衛門

正朝 喜兵衛

正周 主税

法名延水

女子

諏訪藩老諏訪大學頼意妻、寶永三年十月朔日歿、法名成容院殿悟列印徹大姉、此夫人男子二人アリ、長男頼記父ノ職ヲ繼ク、次男頼弟ハ兄夭折ニ依テ家ヲ繼キ老職タリ、女子ハ幕府御小性組高六百石、久野伊兵衛敬忠ノ妻、二女日向國延岡七万石城主内藤能登守政陽ノ家來松井金四郎妻（知行高五百石）三女諏訪同藩士志賀七右衛門（甚三郎事）滿主後妻、實ハ三女ハ頼意養女、江戸幕府御書院番高五百三十石小栗又兵衛娘ナリ、四女ハ同藩士鵜飼傳左衛門滿喬妻、五女信州飯田城主堀美作守親常家老職、安富内藏助妻等ハ近親ナリト云フ、而シテ座光寺夫人ノ所生、諏訪頼弟ノ孫男タル大助頼保ノ弟銀彌、頼長享和二壬戌年四月十一日卒、法號寂照院殿亮山瑞光居士、墓福壽院ト記セルヲ上卷ニ大助頼保ノ子息ノ列ニ記揭セシハ誤リトス、今茲ニ頼保ノ弟トナスコトニ訂正ス、看ル人之レヲ諒シ賜ヘ

康那 頼母 初内匠

實ハ信州小諸城主、牧野内膳正康周ノ四男ナリ、長兄ハ牧野家ヲ嗣キ小諸城主トナル、牧野遠江守康滿之レナリ、次兄大和守道堅ハ濃州高富館主一萬石本庄和泉守道倫養子後家督ヲ嗣ク、三兄能登守明親ハ幕府御寄合衆高七千石、富田八十郎養嗣子トナル、姉ハ駿州沼

津城主五萬石餘、水野出羽守從四位侍從忠友ノ室、妹ハ阿部靱負妻、以上連枝ナリ

爲和

初メ忠之助　爲忠　喜兵衛

實ハ幕府旗本佐久間宇右衛門ノ男、享保十四年家督、寶暦武鑑ニ座光寺喜兵衛爲和、父賴母、知行高千百十三石、信州伊那郡山吹、江戸屋敷新道一番丁、交代寄合旗本、信濃衆、柳之間詰、大纏鹿毛

補ニ云フ　佐久間氏ハ其先、天正中ノ猛將佐久間信盛ノ嫡孫宇右衛門盛長ノ孫ナリ、同姓ニ佐久間玄蕃頭盛政アリ、紫田勝家ニ屬シ、加州金澤城主十八万石ヲ領ス、天正十一年五月十二日豊臣秀吉ト戰ヒ、遂ニ捕ヘラレテ誅セラル三十歳、其嵐、佐久間備中守安次、元和二年三月十五日信州飯山城主ニ封セラレ三萬五千石ヲ領ス、子孫三代相承寛永十六年現城主勝長ニ嗣子ナキヲ以テ収公セラレテ退城ス、然レトモ伯父井上河内守正利當時幕府ノ御老中タリシカバ嘆願シテ知行高八百石ヲ賜ハリ家名ヲ存セリ、子孫幕府ニ仕事ス、宇右衛門即チ同姓タルヲ以テ常ニ親好ヲ絶タスト云フ、俗間伊那三騎ト稱シ毎年五月江戸城ニ出仕、端午節會ノ菖蒲ヲ献スルヲ以テ役儀トナシ他ニハ更ニ役儀ナシト云フ、一説此菖蒲ヲ献スルノ事ナシト、恐クハ其頃參勤スルヲ以テ俗間臆説ヲ唱フルニヤト云云、或ハ實説ナラム

夫人　同郡飯田城主堀河内守親忠ノ二女也、此夫人兄弟三人アリ、兄堀大和守親民ハ飯田城主ヲ相承シテ領主トナル、姉ハ幕府表高家衆高五百石永田馬場住、從五位下侍從有馬兵部大輔廣壽ノ室タリ

某

初メ龜彌　主水

實ハ同郡飯田城主堀大和守親藏ノ三男也、此人兄弟姉妹數人アリ、長兄ハ飯田城主ヲ相承次兄早世、弟氏恒ハ下野國吹上領主有馬備後守氏久ノ養嗣子タリ、其弟万之助ハ堀數馬親茂ノ養嗣子トナリ、大和守親實ト改メ兄ノ家跡ヲ繼ク、從四位侍從ニ叙任ス

夫人　先代爲和ノ女

爲

礒　采女

實ハ播州加東郡小野領主一萬石、一柳宇右衛門直次ノ次男ニテ爲礒ト云ヘリ、兄弟姉妹數人アリ、兄ノ一柳末禮ハ小野領主ヲ相續ス、姉ハ常州牛久領主山口修理亮弘通ノ室、次兄土佐守末英ハ兄末禮ノ家跡ヲ嗣イテ領主トナル、妹ハ長州毛利中將家ノ國家老、周防國岩國城主吉川監物經倫ノ室（吉川家高六万石）末妹ハ幕府ノ臣秋田中務ノ室トナル

某

伊奈之助

文政武鑑ニ座光寺伊奈之助、父采女、知行高千百十三石餘、信州山吹住、江戸屋敷牛込山伏丁、交代御寄合、信濃衆、柳之間、大纏白たゝき

爲

邑　右京

此爲邕ハ勤王ノ志厚ク、嘉永初年家臣片岡春一郎ト共ニ國學ヲ尙ヒ、故平田息吹舍翁篤胤ノ門ニ入リ大ニ翁ノ學風ヲ信シ、大義名分ヲ明ラメ尊王愛國ヲ皷吹シ、領內寺院ノ梵鐘ヲ集メテ大砲ヲ鑄造シ、百姓ノ勇壯ナルモノヲ召集シ、各村名主、組頭等ヲシテ之レカ部頭トシ、日々兵術砲技ノ調錬ヲ行ヒ大ニ得ル所アリキ、當時信州諸藩侯ニ於テ未タ此ノ如キ錬兵ノ事ナシ、座光寺氏一小旗本トシテ率先此ノ事ヲ爲ス、奇拔トシテ大ニ賞讚セラレタリト云フ、又爲邕平田大人ノ薫陶ニ依リ敬神ノ志篤ク、慶應初年荷田春滿ノ遺物神鏡一面本居宣長大人ノ文鎭一對、加茂眞淵翁短刀一握、平田尊師ノ遺物水晶一顆ヲ需得シ、是ヲ御靈代ニ奉シ神体トナシ、神社ヲ剏建シ以テ盛大ニ祭儀ヲ行ヘリ、現今山吹村越田ニ鎭座セル所ノ本學神社之レナリ、爾後每歲祭儀ヲ供奉スト、此ノ間屢京師ニ上リ澤三位家ニ昵近シ復古ノ大旨ヲ拜承シ東奔西走殆ト寧日ナキモノヽ如シ、而シテ又其復古機密ノ費途トシテ金八百兩餘ヲ獻シタリ、慶應四年春東山道總督、岩倉卿入信ノ際當館ヲ御旅宿ニ定メラレ滯在シ、諸軍ノ向フ所ヲ部署ス、陣容整フヤ右京爲邕之レカ先鋒トナリ、諏訪郡ニ進軍下諏訪町ニ本營ヲ置キ、岩倉総督ノ指揮ヲ俟ツ、板垣退助之レカ參謀タリ、因州、土州尾州等ヲ首トシ、關西諸藩並ニ信國南部諸侯陸續參加ス、知久、小笠原、座光寺等皆加ハリ、一ハ甲州路ニ一ハ中山道ヲ進軍ス、各其勢三千餘人ト註セラル、適々相樂総藏（慶應四年二月十四日下諏訪町ニテ誅セラレ墓アリ、後正四位ヲ贈ラル子孫アリ）一件起ル、仍テ是レカ處分ヲ高嶋藩ニ托シ、他ハ甲州路ヲ進軍シ、高嶋藩ヲ嚮導トシテ出發セリ、此時座光寺氏等ハ中山道ヲ上田城ニ駐屯スヘキ計畫ニテ晝夜兼行上田城ニ着ス、北信諸藩茲ニ會同其勢七千餘ト云フ、是ヨリ先キ右京爲邕先鋒タルヲ以テ菊花御紋章付ノ指揮旗ヲ岩倉具定卿ノ傳達ニテ賜ハリ、尙進軍シ江戸城下ニ至リ、東海、北陸兩道ノ官軍悉ク會同、江戸城受ケ渡シノ手順ニ數日ヲ閱シ、完結スルヤ一先ツ御暇ヲ賜ハリ、歸郷ヲ許サレ仍テ本土ニ歸還セリ、同年九月奥羽ノ浪士ト稱スルモノ越後ヲ經テ信州ニ侵入スルヤ、尾州藩主德川茂德侯鎭撫總督官ニ任セラレ藩兵ヲ率キテ入信ス、飯田、高遠、阿嶋、伊豆木及座光寺氏前後シテ諏訪郡ヲ經北信ニ進軍ス、信州十一藩及ヒ伊那三騎ノ兵飯山城下ニ會同、部署シテ浪士ト戰フコト數次、忽チ賊ヲ捕獲シテ鎭定ノ功ヲ奏セリ、時ニ十月二十八日ナリ（今年九月八日改元明治元年ト稱ス）同十一月中旬ヲ期シ上京ヲ命セラル、自身適々宿痾再發セシカハ嫡男盈太郎ヲ代理トシ、家老片岡三郎太夫ヲ副ヘ數人ノ家人ヲ率キテ上京セシム

盈太郎

明治元年十一月父右京代理トシテ上京ス、家臣片岡三郎太夫補佐シ諸事ヲ處理ス、之レ盈太郎尙若年ナレハナリ、召ニ依ツテ禁廷ニ參內ス、朝命盈太郎ニ中太夫席ヲ賜ハリ、且維新復古ノ大旨ヲ奉シ勤王ノ兵ヲ率キ從軍セシ功勞ヲ賞セラレテ祿二百石加增ノ御沙汰ヲ蒙リ即日御暇給ハル、實ニ未曾有ノ名譽ナリ、伊豆木、阿嶋亦同斷ノ御沙汰ヲ蒙リ前後シテ歸郷セリ明治三年二月家祿、版籍ヲ奉還シ、故ヲ請フテ平民籍ニ降ル、其旨意タルヤ曩ニ盈太郎上京セシ時岩倉卿ノ邸ニ伺候ス、卿懇ロニ維新制度ノ綱領ヲ語ル、其指示中ニ吾帝國ハ一天万乘ノ君ヲ主宰トシテ戴クコト勿論ナリ、以下ハ元トノ公卿諸侯ト雖モ皆悉ク臣民タレバ其家格ニ階級ヲ置カス、凡テ平民ト稱シテ種族ノ區別ヲナサス、人才登用ノ道ヲ開キ、元ト公卿諸侯ノ家ニ生ルヽトモ其器及ハサレバ產業ヲ營ミ以テ生活ヲ計ルヘシ、士分以下農商工ノ四民

ニ於テモ名才學識高ケレバ大臣、參議其他百僚ノ機務ニ登用シ、中央政府以下百千ノ官制ヲ組織スルニ方リ各顯職ニ任ジテ維新政治ノ機關トナスニ至ルナラムト云云、盈太郎若年ト雖モ岩倉卿ノ訓示ヲ体シ平民籍ニ降レリト云フ、其後廟議一變華士族、平民ト階級ヲ附シテ戸籍ヲ編製スルコトヽナレリ、然レトモ盈太郎氏ハ前説ヲ贊シ士族編入ハ希望セサリシト聞ケリ、又一異彩ノ見識ト云フヘシ、而シテ盈太郎氏ハ神職ヲ奉シ以テ終身ノ役トスヘキヲ心底ニ決シ、熱心其職ニ從ヒ以テ今日ニ至レリ、叙上ヲ座光寺家ノ略系譜トス

前掲知久、座光寺等ヲ源姓ノ出自ト誤稱スルニ至レル所以ヲ左ニ編述シ以テ聊カ看客ノ諒解ヲ得ムトス、其ハ信濃國ノ最古ノ郡領金刺家、並ニ諏訪神家ノ子胤タル人、郡ノ大小領、或ハ主張、評督、史生等ヲ勤務シ來リシガ王朝ノ末、家運衰微祖業ヲ繼承スヘキノ器ニ堪エス施政紊乱人民適歸スル所ニ若メリ、於レ是　朝廷源爲公ト云フヲ郡領司ニ任シテ差遣セラル爲公來リテ先ツ神之平城（知久氏累代ノ居城）ニ居リテ郡政ヲ施行ス、郡民異姓ノ下ニ立ツヲ屑シトセスシテ動搖ス、依リテ爲公和協ノ手段トシテ自ラ知久家ノ遺裔ト稱シ、鎭撫ノ策ヲ施シ、諏訪大祝神爲仲ニ女ヲ嫁ハセ之ヲ婿トシ、親好ヲ結ヒテ以テ懷柔策ヲ施シ、其他舊郡吏ニ對シテモ已レノ下司等ト頻リニ婚約ヲ結フ等ノ手段ヲ以テ漸ク郡民ヲ綏撫スルノ功ヲ顯ハセリ、此ノ機熟セシヲ以テ全ク郡衙ノ幹部ハ源姓ノ出自ニ化成セルモノヽ如シ、是ニ於テ爲公ハ伊奈眞人ト稱セラレテ威力大ニ振フ、爾後其子胤甚タ繁衍シテ諏訪神家、並ニ金刺姓ノ姓ヲ冒シテ源氏出自ヲ稱スルニ至レリ、即チ伊奈、諏訪、諏訪部、安部、片桐、屋代、宝賀井上、飯田、松本、中津乗、依田、手塚、今井、有賀、闕屋、深澤（三澤、水海、味澤トモ書ス）皆野、三塚、四宮、家遠、若尾、不覺、保科、笠原、林、泉、芳美、瀬橋、植田（上田）平塚

小田、佐那田（眞田トモ書ス但シ松代藩眞田氏トハ出自別種ト云フ）二柳、村上（村上源氏トハ自ラ出自別種也）夏目、飯沼、那須、大島、波々（羽場）堤、駒澤、前澤（以上大系圖ニ擧クル所ノ大概）等ハ悉ク神家、金刺ノ二姓ヲ冒セシモノト云フ、是ヲ信濃源氏或ハ伊奈源氏ト稱シテ史籍ニ散見スル所ナリ、其子胤諸侯伯ト爲ルモノアリ、即チ安部、加納（狩野）小出（小井底、小井手）林、保科、諏訪、片桐、井上等之レナリ、而シテ安部氏ハ南北朝時代駿州安部（安倍）谷ニ、狩野氏モ同時代駿州狩野（狩野ノ地元ト豆州ニアリ）ニ據リ王事ニ勤ム、小出、林ノ二氏ハ本土信州ニ在リテ神職ヲ奉セシガ豊太閤時代武人ト爲リテ仕事スルモノ出ヲヽ終ニ諸侯ニ列ス、保科氏、諏訪氏ハ神職ヲ以テ武人ヲ兼ネ武田家ニ属セリ、德川家、海内統一スルニ及ヒ武功ヲ以テ各諸侯ニ列ス、即チ諏訪氏ハ本土諏訪郡ニ、保科氏ハ伊那郡高遠ニ、小出氏ハ但馬國出石ニ、加納氏ハ上総國一之宮、安部氏ハ武州岡部後三州牢原ニ轉シ、井上氏ハ遠州濱松、後ニ上総國舞鶴ニ轉ス、分家井上氏一ハ常州下妻、一ハ下総國高岡ニ、片桐氏ハ和州小泉ニ各受封シ以後代々襲封シ來リシナリ、保科家ノ如キハ寛永二十年奥州會津城ニ榮轉、高二十三萬石ニ增封セラレ、江戸將軍家ノ親藩ト爲リ源氏ヲ稱ス、同姓保科彈正忠正貞ハ上総國飯野二萬石ニ封セラレテ居城、家紋ハ一本梶ヲ用フ之レ神氏タル象ナリ、小出氏ハ元和五年丹波國船井郡園部城、二萬六千石餘ノ領知ヲ轉受シテ居城、藤原姓ヲ稱スレトモ其紋章ニ額面ヲ用フルハ神氏ノ餘波ト云フヘシ、安部氏ノ紋章ハ丸ニ一本梶ニテ神姓ノ俤ヲ偲ハシム、以上皆子爵ノ榮班ニ列セリ、林氏ハ上総國望陀郡請西一萬石ヲ拜領シテ在住、家紋ハ大鼓ニ撥ヲ用フ、是レ又金刺姓ノ神職ヨリ出テシ象徵タリ、大日本史氏族誌信濃源氏ノ内ニ、出自左衛門尉源滿快長子滿國、爲ニ甲斐守ト其孫爲公信濃守、生ニ爲衡、ト稱ニ中津乗ト爲衡弟爲快稱ニ伊那氏、爲扶

生ニ公快ト稱ニ林氏ト（下畧）云云、是レ林氏出自ノ據ル所ナリ、林氏亦維新ノ際版籍ヲ還納シ華族ニ列シ尋テ男爵ヲ授ケラル、片桐氏ハ東鑑元暦元年ノ條ニ、片桐小八郎太夫者、平治逆乱之時、爲ニ古右典厩御供ト之間、國ニ被レ召ニ出之ト殊令ニ憐愍ト給、此父小八郎爲安ヲ自ニ信濃片桐郷者、被ニ改公ト、已ニ二十餘年空畢、仍今日如レ元可ニ領掌ト之由、欽ニ仰出ニ云云ト記セルカ如キ舊家ナリ、其子孫遠州奥山ニ居住、片桐小八郎（片桐一ニ片切トス）太夫二十一代玄蕃亮爲元ノ一男、片桐助作改メ市正且元ハ豊太閤ニ召サレテ仕事シ、秀頼公ニ及ヒ誠忠ヲ盡スト雖モ用キラレズシテ却ケラル、德川公覇業成ルニ及ヒ且元ノ一族ヲ召シテ三千石ヲ與ヘテ仕ヘシム、又同族某ハ分創シテ大和國小泉藩主ニ封セラレ一万石ヲ食ム、此レ亦現今子爵ノ桑班ニ居ルナリ、一説ニ知久、座光寺共ニ、片桐氏ヨリ出ツト云フ、蓋シ誤リナリ、此他幕府ノ麾下ニ属シテ一千石以上ヲ食セルモノニテ伊奈半左衛門ハ代々關東郡代職ヲ役シ成績最モ著ハル、就中近代ノ半左衛門忠治ハ江戸川疏鑿及ヒ武州其他ニ於テ數千石ノ田地ヲ開闢セシ功績アリ、其孫半左衛門忠順ハ寶永四年富士山噴火シテ麓下五十八ケ村埋沒セシニ方リ其砂礫ヲ河水ニ放棄セシメ人畜ヲ救助セシ功績及ヒ村里復舊ノ工事ヲ奏セシ功勞不尠ルヲ以テ今上天皇御即位ノ大禮ニ際シ相共ニ從五位ヲ贈リテ追賞セラレタリ、而シテ伊奈氏ハ知行三千九百六十九石餘ト云フ、同流ニ伊奈熊藏ト云フアリ、家紋ハ共ニ丸ニ左頭二ツ巴ナリ此ノ熊藏ノ家祖家次、天正十七年甲信貫高田額ヲ改正石高ニ打量セシ奉行職ニシテ今適々其調出ノ檢地帳ノ存留スルアリ、之レヲ一ニ熊藏縄ト云フ、若シ是ノ古檢地帳ノ存在スルアラバ國寶ニモ編入スヘキモノナリト云フ、但シ家祿ハ一千百六十八石ナリ

諏訪部氏ハ代々幕府御乘馬ノ馭術ヲ以テ仕事ス、役料厩カ二百俵、本知三百俵合セテ五百俵ノミナレトモ代々典厩ノ頭取ニ襲任ス、家紋一本梶ヲ用フ、片桐氏ハ三千三百石ニシテ同姓數戸幕府ニ仕事ス、家紋ハ矢羽根割短冊ニ副紋ハ六角輪廓ノ内ニ花菱ヲ用フ、屋代、室賀ノ二氏ハ祖先兄弟ニテ各所在名ニ依テ氏號ヲ分テリ、故ニ紋章ハ同ク丸ニ上ノ字ヲ用フ、而シテ室賀氏ハ五千五百石、屋代氏ハ三千俵ヲ筆頭ニ各數戸ノ分家アリ共ニ江戸府ニ仕フ、井上氏ハ四千石ヲ高祿ニ分創數戸、紋章ハ井桁トス、又一重輪ニ矢羽八本ヲ車形ニ爲セシモノヲ用フル家アリ、蓋シ本支ノ區別ニヤ、依田氏ハ三千五百石ヲ筆頭トシ數戸ノ同姓アリ、紋章ハ二重輪ノ内ニ桔梗花トス、又舞蝶三羽輪ノ中心ニ頭ヲ集メ鱗形ヲシテ中央ニ印スルアリ或ハ一羽ノ揚羽蝶ヲ輪ノ内ニ酉ク等アリ、有賀氏ハ丸ニ一本梶ヲ用ユ、上田氏ハ五千石ヲ最高祿ニ家紋ハ角鍔ヲ菱形ニ印シ輪ナシ、一ニ之レヲ鏡形紋トモ云フ、又神氏ノ紋章ノ一ナリ小田切氏ハ五千俵ヲ筆頭ニ紋章ハ二重輪ニ蔦ノ倒葉一ツ有ルヲ用フ、又二重輪ニ桔梗ニヲ依田氏ニモ是レト同形ノ紋章ヲ用フルアリ、夏目氏ハ二千石ヲ高祿トシテ紋章ハ井桁ノ中ニ野菊ノ花ヲ用フ、大嶋氏ハ四千七百石ヲ筆頭ニ紋章ハ輪ナシノ揚羽蝶トス、八木氏ハ四千石ニシテ家紋ハ二重輪ノ内ニ楓葉一ヲ用フ、小出氏ニハ五千石ヲ食ムアリ、紋章櫻花ヲ用フルアリ、又一千石ノ小出氏ノ紋章ハ梅鉢ニ蕚ヲ附スルモノヲ用フ共ニ輪ナシ、其他既揭ノ諸氏皆江戸府ニ仕事シテ信濃出自ヲ標榜ス、今繁ヲ厭ヒテ家祿、紋章等ノ記載ヲ略セリ、以上ヲ信濃源氏出自ノ大概トナス

（本編六十丁裏七行前揭知久座光寺等云云ノ冒頭ニ補ニ云フト冠スヘキヲ脱落セリ、今發見茲ニ其理由ヲ叙ス、看客諒セヨ）

又云フ　吾信濃國ハ神世建御名方神ノ開拓經營セシ事蹟ハ諸史籍ニ載セテ明カナリ、而シテ

國內ニ於テ古ヨリ鄉里ニ割據シテ名門、豪族ト稱シ代々子孫ニ傳ヘ、祖神ノ稜威ニ依ッテ朝家ニ仕事シテ勤功アリ、恩賞トシテ氏號ヲ賜ハリ、某氏々々ト在名ヲ稱スルニ至レルハ是皆祖神ノ餘慶ニシテ神氏一統ト唱ヘ祖神ノ祭祀ニ供奉ス、即チ之レヲ氏人ト云フ、其ハ本編中ニ往々氏號ノ出自ヲ擧ケテ揭記セリ、其數約八九十氏ニ及ブ、然ルニ武門武士ト稱シテ勢力ヲ爭ヒ强キハ他ノ領土ヲ侵畧シ多大ノ部下ヲ率キテ己レノ營利ヲ計ルノミ、弱キハ終ニ領土ヲ奪ハレ零落シテ他姓ト婚ヲ結ヒ、或ハ家名ヲ讓リ自ラハ退隱シテ終ニ歸農シ、或ハ其家士トナリテ糊口ヲ策スルニ出ツルモノ等アリテ終ニ神裔タル眞髓ノ傳統ヲ失フニ至レリ、大日本史氏族誌叙ニ自二建武一、後世歷二喪亂一、搢紳流落、四方武人盛衰不レ常、譜牒由レ是多亡、加之武人窮甚者、或沽二家譜一、而姦民買得即冒二其氏號一、稱二武人一、於レ是姓族益亂矣云云ト、然リ長祿前後數十年吾祖神諏訪神社祭祀供奉ノ御符禮書ニ神氏一黨ノ氏號數十散見シテ明カナリ、況ヤ知久彈正少弼俊範、座光寺入道（本文ニ云フ知久彈正、座光寺入道ノ氏名共ニ同氏ノ系表ニ見エサルナリ、之レ按ニ系圖紛失等ノ故カ後考ヲ俟ツ）ヲ始メ藤澤、箕輪、伊那等最モ優勢ノ如ク同書ニ見ユ、此時代迄神裔ノ家系連綿タリシモ何時カ他姓ヲ冒稱シ、出自不詳ノ系圖ヲ作成シ却テ是ヲ名族ノ出自ト誇稱スルニ至リシニヤ、今ヤ百般研鑽ニ研鑽ヲ積ムニ從ヒ、系譜學ノ如キ汎々乎トシテ五里霧中ノ內ニ埋レルモ多クハ判然其ノ出自ノ秩序整フニ至レリ、吾神氏系圖ノ如キ亦然リ、一時他姓ヲ冒稱シタリシモ其實ハ連綿神氏ノ血統タリ毫モ疑點ヲ挿ムヘキモノニ非ス、序ニ座光寺爲重治郎左衛門（法名日乘）ガ岩村ニ於テ平信長ニ誅セラレシ人ニ相當スルカト推考ス、其男ヲ勘左衛門（法名日傳）トナストアレハナリ云云（正編五十八丁表一二行）ト記セシハ甲斐國誌士庶之部、伊那衆ニ座光寺治郎左衛門初メ市田ノ松岡氏ニ仕ヘ、後甲州武田氏ニ屬シ、天正參年於二濃州岩村一、爲二織田信忠一誅セラル、其男勘左衛門幕府ニ奉仕、子孫今山吹ニ在リト記スヘキヲ誤リシモノナリ、故ニ今茲ニ訂正ス、按ニ座光寺爲重治郎左衛門（法名日乘）ト云ヘル人トシテハ年代及ハサルモノヽ如シ、依テ同名異人カ一言又茲ニ附記ス、看客夫レ之レヲ諒恕シ賜ヘ

補

諏訪神氏分流元白石藩主男爵片倉家系圖

（本系表ハ故飯田武郷翁遺稿諏訪神氏並信濃國造考ニ據ヲ抄出セリ故ニ世代人名既揭ノモノト多少ノ前後相違アリ）

遠祖

◎片倉邊命

父神ハ健御名方富命、母神ハ八阪刀賣命ニシテ信濃國諏訪郡上下神社ニ鎮座、一ニ諏方之神ト云フ是ナリ、御子神ノ内ニ神德貴タ賢ク座セルヲ各地方ニ分座セシメテ其地々々ヲ經營セシメ賜フ而シテ諏方ノ國ハ祖神ニ繼キテ伊豆早雄命ヲシテ經理セシム、伊豆ハ嚴ノ意又秀ノ義ニシテ御子神ノ内ニテ最モ嚴秀ノ神德ニ座ス神ナレハ嚴（和訓伊加都久）クシテノ意、早ハ速ノ義ニ通ヒテ、物事他ヨリ速カニ事執リ給ヘル御德ヲ備ヘ座スノ意旨ニ採リ、父神其出早雄（雄男ニ通ス）ノ命ニ本領ヲ相承セシメ諏方總領ノ祖神ト爲シ給ヘルナリ、依テ父母神御鎮座上下諏訪神社内ニ出早雄命ノ神ヲ祀リ末社トス、上諏訪神社ニテハ南大門華表ヲ入リテ左方ニ出早雄命ノ祠アリ、社傳ニ毎歲正月元旦神職社人、諏訪大神ニ年始參拜ヲナスニ出早雄神祠ヲ第一先キニ拜禮スルヲ例トスト、下諏訪神社ニテハ元ト社内横川村ニ出早雄命ノ神社アリ式外ノ神社ニ座ス、授位ノ事ハ正編出早雄命ノ譜ニ既揭セリ、依リテ茲ニ又贅セズ

片倉邊命ハ兄神出早雄命ニ次キテ諏訪國ヲ經理シ給ヘリ、故ニ上下諏訪神社共ニ鎮祭セリ、上諏訪神社ニ於テハ片倉邑（片倉邑今ハ上伊那郡藤澤村ニ合併セラル）ニ片倉神社アリ此命ヲ祀リ、下諏訪神社ニ於テハ今ハ御子神合祀ノ末社内ニ此命ヲ合セ祭ル、神名帳頭註（下社祭神ヲ誤記ニ主配ヲ混セルアリ取捨スヘシ）ニハ諏訪下社祭神片倉邊命ト記セリ、是レ父兄ノ神々ノ傳統ヲ襲ヒシ由緣ヲ以テ斯ク記セルニヤ

又信濃國佐久郡（今ハ北佐久郡ニ屬ス）ニ分座、其地方ヲ經營シ給ヒシ神蹟在リ、舊蹟片倉村、入片倉村ノ二村ニ隷ス、入片倉村ニ諏訪春日神社ト云フアリ鄕社ナリ、即チ片倉邊命、父神健御名方命、春日大神ノ三柱ヲ祀ルト云フ、故ニ諏訪、春日神社ト社號ヲ稱スト云フ、末社ニ兒玉彦命、上津御玉命、下津御玉神ヲ祀ル神祠アリ、且ツ地名ニ兒玉湯ト云フアリ、藥泉湧出浴槽ヲ設ケテ人ヲ浴セシム、甚タ驗アリトテ浴客常ニ絶エスト、又上津、下津ト云フ地字アリト、是ノ三神ハ片倉邊命ノ御兒神ナリ、後人上津、下津ノ津ノ草体ヲ誤認シテ上沖、下沖ニ誤リ書セシヨリ終ニ上沖、下沖ト村籍等ニ錄スルニ至レリト惜哉、按スルニ前記ニ諏訪春日神社祭神ニ諏訪神トアルハ建御名方命、片倉邊命及ヒ其御子神、兒玉彦命、上津御玉命下津御玉命等ヲ配祀セシナラム、春日神ヲ主神ト祀リシ社ヲ併合セシヲ以テ社號ヲ諏訪、春日神社ト稱スト云ヘレト其ハ恐ク後人ノ所爲ナルヘシ、何トナレハ神家諏訪氏ノ分流ニ春日氏アリ、其春日氏ノ事由東鑑承久三年六月十四日ノ條ニ春日刑部三郎貞幸等、將レ渡二宇治川伏見瀨津一（中略）官軍見レ之同時發レ矢、兼義、貞幸、乘馬於二河中一各中レ矢漂レ水、貞幸沈二水底一訖、欲レ終レ命、心中祈二念諏訪大明神一（中略）爲二水鍊郎等一被レ救訖云云、又諏訪本宮享德三年御符禮中ニモ春日伊豫守盛貞ト云フアリテ供奉セリ、文明二年庚寅御射山御祭下增供奉ノ中ニモ春日代官長城新兵衛道光云云ト見ユ、此春日氏ハ諏訪神氏ノ分流ニシテ禰津神平貞直（上卷大祝敎光ノ系譜見合スヘシ）ノ次男春日刑部少輔貞親ヲ祖トス、蓋シ佐久郡春日ノ鄕ヲ分領セシヨリ在名ヲ以テ氏號ニ稱セシナリ、カク春日氏ハ神家ノ一族ナルガ故ニ祖神諏

訪大神及ビ其御子神等ヲ祀リシハ疑ヒナカルヘシ、春日神社ト社號ヲ稱セシハ按ニ春日氏ノ宅祠、或ハ守護神ト祀リシ緣由ナラム、然ルヲ藤原姓ノ門葉ナルカ故ニ春日四柱ノ神ヲ祀リテ春日神社ト稱ストイフ、恐クハ即チ後人ノ所爲ナラム、要スルニ現今北佐久郡鄕社ノ一タル春日井村鎭座、諏訪春日神社祭神ヲ諏訪大神、春日大神ノ兩神ト奉稱セルハ蓋シ誤リニテ思フニ單ニ諏訪大神ヲ祭レルモノナラムカ、一言茲ニ附テ博考ニ備フ

以下乙頴ニ至ル二十六世正編ニ載スルヲ以テ省畧ス、乙頴以下十數世正編既載ノモノト異ナル点アリ、蓋シ飯田武鄕、中田憲信所說ニヨリ改訂セル所アルニヨルナラムカ

片倉邊命二十六世、麻背君嫡男

乙頴　又名神子　亦熊子

母兄弟部　諏方大神大祝之祖

實ハ科野國造金刺麻背君ノ嫡男也、外祖父神人部倉見君ノ一家敵人ノ爲メニ害セラレテ焦土トナル、依テ入リテ倉見君ノ遺跡ヲ襲ク、神子八歲ノ時、尊神化現、脫ニ神衣一、著ニ神子一、勅言吾無レ体、以レ汝爲レ体、依レ之稱ニ是御衣著祝一、又謂ニ大祝一、字號ニ神子一（和訓神子ヲ久麻子神ノ訓トス以下之レニ倣フ、久麻子ト呼ブベシ）用明天皇御宇丁未年、社壇ヲ湖南山麓ニ構ヘ尊神及百八十神ヲ祭ル、一ニ是ヲ武居明神ト稱ス、武居ノ地名今ニ上社ノ近傍ニ存シ、武居丘或ハ片山等ト唱フ、是レ蓋シ古時ノ神座地ナラムカ

天智天皇御宇辛未年八月歿、墳墓ノ地上社ノ傍ニアリ（墳墓地ノ事由ハ古墳ノ部ニ出ス見合スベシ）

倉足
母同上　諏訪評督

目子
母同上　諏訪下社權祝

神代
諏訪大神大祝
補ニ云フ　神代ノ訓久麻支呂ト呼ブベシ、本居鈴屋大人ノ古事記傳其他諸書ニ神代ヲ久麻支呂ト譯セリ

弟兄子　一ニ乙名子
補ニ云フ　乙名子トハ人ノ長上ニ立ツ人ノ謂ヒナリト今モ家主ヲ乙名ト云フ所往々アリ古言ノ遺レルナラム

國積
諏訪大神大祝

猪麿
諏訪大神大祝

狹田野
諏訪大神大祝

豐麿　一ニ鹿取
諏訪大神大祝

繁名　一ニ繁魚　又生足
諏訪大神大祝
補ニ云フ　魚ノ和訓ニ名トスルアリ即チ名、魚同訓也

- 豐足 又名清主 諏訪大神大祝
  - 有員 初メ武麿 諏訪大神大祝大同元年拜任
    補ニ云フ 有員ヲ一ニ大祝ノ祖トスレモ諸記ヲ對照スルニ大祝ノ元祖ニ非ス、上卷有員ノ譜ニ照合シテ知ルヘシ、以下單ニ諏訪大祝トス
    - 武員 諏訪大祝
    - 武方
      - 乙武 諏訪大祝
      - 有武
      - 武主
      - 員光
      - 武光 一本武方以下武光以前世々爲ニ大祝相承一
    - 員篤 諏訪大祝、仁和三年四月五日任
    - 有勝 諏訪大祝、延喜三年任
    - 有盛 諏訪大祝、延喜十年十月十一日任
    - 盛長 諏訪大祝、天暦四年二月十五日任
    - 爲員 諏訪大祝
    - 員賴 諏訪大祝、天元四年任
    - 賴平 諏訪大祝、長德二年六月四日任
    - 賴信 美濃權守 諏訪大祝
    - 賴高 次郎 權守
      - 爲正 諏訪權別當
    - 賴次 神五郎 押領使、住ニ片倉郷一
    - 信員 諏訪大祝
    - 賴元 三郎
    - 有信 又名員信 諏訪大祝、長和二年任
    - 爲信 諏訪大祝
    - 爲重 三郎 又神太 諏訪社副祝、住ニ片倉郷一
    - 爲光 神太夫

胤重　神二郎
諏訪社副祝

景廣　神太郎
諏訪社副祝

景俊　神五郎
諏訪社副祝

景久　神彌太
諏訪社副祝

宗綱　神次郎
諏訪社副祝　在ニ別系ニ

景繼　四郎　改八郎左衛門尉　從五位上
片倉氏ヲ稱シテ分創、仕ニ事于鎌倉府ニ家紋藤之丸ハ將軍家ヨリ賜フ所、逢ヒ井筒ハ本支共ニ汲用ノ各井戸筒ニ象ル所ト云フ、弘安六年二月十六日卒

景佐
加藤總領判官景清ノ養子トナル、延慶三年七月二十三日卒

景房　小八郎　正六位下
片倉ノ家督ヲ襲ク、豆州狩野庄、信濃國新野庄ヲ賜ハリテ領ス

弘安八年十一月十七日秋田城介安盛ニ從ヒ軍功ヲ顯ハス、德治二年五月十九日卒
補ニ云フ　豆州狩野庄ハ曩ニ藤原爲憲ノ嫡子工藤太夫時輔拜領其子時理在名ヲ以テ狩野介ニ任スト其系圖ニ見ユ、子孫仍テ代々狩野氏ヲ以テ家號トナス云云、此時ニ至リ景房代ツテ之レヲ拜領セシニヤ、信州新野庄ハ伊奈郡ニ在リ、古時歌材ニ採レリ、夫木集從三位經家菅荒野ヲ詠メル歌ニ「戀をのみ、すかのあらのに、はむ熊の落くれにける身こそつらけれ」トアル之レナリ、あらの即チ新野ニ書ス、今ハ下伊那郡ニ屬ス、元ト伊賀良庄ノ内ナリト云フ

景信　小二郎　左衛門尉　從五位下
北條相摸守平貞時ノ近侍、元德二年正月二十日卒

景時　又二郎　民部少輔　從六位上
元弘三年五月二十日鎌倉殘落ノ時討死

景胤　五郎　民部尉
兄景時討死ノ時、上杉民部大輔重顯ノ幕下ニ在リ依テ其難ニ赴カス、後チ文和元年武州ニ於テ苦戰ヲ遂ケ討死ス
補ニ云フ　子孫其地ヲ拜領シ在住ス、之レヲ武州片倉ト稱ス、又片倉城址ト云フ今ニアリ、子胤甚タ繁榮相州津久井郡、又能州、越中等諸國ニ分布ス

景春　小八郎　大學助

景信ノ三男ニシテ片倉ノ家督ヲ續ク、當時北條高時（入道宗監）放縱度ナシ天下皆視ヲ屬ス、上野國新田小太郎源義貞陰カニ護良親王ノ令旨ヲ奉シ諸國ニ官軍ヲ徵ス、應スルモノ雲霞ノ如シ、於レ是鎌倉ニ肉薄シ北條氏ヲ討伐ス、景春手兵ヲ率キ信濃ノ官軍ト相前後シテ新田義貞ノ旗下ニ參ス、義貞諸軍ヲ部署シ片倉氏ハ本支共一ノ井兵部大輔政友（一ニ政友ヲ貞政ニ作ル）ノ部下ニ屬シ鎌倉ヲ攻ム（太平記）高時及ヒ子邦時、守時、基時等皆誅ニ伏シ天下漸ク復古ノ端ヲ啓ケリ、尋テ建武ノ大乱ニ度々軍忠ヲ顯ハセリ、延元元年又新田中將北國ノ賊ヲ征伐スルニ從フ、翌二年三月部頭一ノ井貞政、越前國金ケ崎城ニ於テ生害ス、此時景春稀老ノ齡ニ及ヒ身体甚タ疲勞ス、依ツテ二子ヲ從ヘ斯波左京太夫家兼ニ降リ屬ス、適々家兼奥州探題職ヲ以テ下向ノ時隨從移轉老職トナル、應安三年六月十四日卒

某　童形早世

景平　孫太郎

貞和三年二月卒、二十一歲

景經　孫次郎　因幡守

兄景平夭折ニ依テ片倉ノ家督ヲ襲キ、大崎詮持ノ老臣トナリ幕頭ニ擧ケラル

應永五年十一月卒、六十四歲

景時　八郎左衞門尉　初景晴　伊豆守

景經ノ二男、弓馬ノ達人、應永七年九月宇都宮越中守氏廣追討ノ時先登ニ進ミ軍忠ヲ抽ツ

應永二十七年八月十七日卒

補ニ云フ　宇都宮氏廣ハ足利氏ノ黨類ナリ

景重　小八郎　刑部少輔

應永七年九月宇都宮追討ノ時、父子相並ビ大勢ヲ討破リ宇都宮ノ近族ヲ討取ル、紀井肥前守仲國ト共ニ武功ヲ顯ハセリ、寶德二年四月十日卒

景輔　小四郎　刑部左衞門尉

文明十一年七月卒、七十二

景隆　小五郎　中務少輔

文安二年八月大崎家ニ恨ミアリ、上方ニ赴キ越前國武衛長臣朝倉敎景ノ旗下トナル

文明五年二月卒、六十

景綱　六郎左衞門尉　早世

景行　彦四郎　中務少輔　因幡守

實ハ景隆ノ次男、景輔無レ子仍テ養テ猶子トシ以テ家名ヲ讓ル、文明十六年四月二十日卒

景廣 彦四郎　内匠頭

大崎左衛門佐泰政ノ老臣トナル（泰政ハ家兼ヨリ九代ナリ其子高持其子兼高ト相承スト）

永正十三年八月十四日卒、六十三

家景 彦五郎　和泉守

大永元年十一月卒、六十二

康景 彦五郎　豊前守

家景ノ一男、天文四年二月大崎左衛門佐高持ノ命ニ背キ切腹

某 彦五郎　片倉河内

康景ノ一男、氏家彈正吉繼ノ從臣ト爲ル（吉繼一説直次ト云ヒシト）

某 彦四郎

康景ノ二男　早世

政景 初名小平太　小平次　八郎左衛門尉

家景ノ次男、兄康景切腹以前武術修業トシテ家ヲ去リ終ニ歸還セス、數十年ノ後伊達家ノ士茂庭周防正良直ニ依テ信州本土片倉氏ヲ相續シ在ルヿ明カトナレリ、子胤綿々傳承スト

補ニ云フ　小平次政景武術修業トシテ諸國ヲ偏歴シ、信州本土片倉氏ヲ訪問ス、此際甲信唇齒ノ親ミ破レ交戰屢々止マス、本土片倉氏ハ諏訪頼重ニ從屬シ手兵ヲ率キテ常ニ參加セリ、小平次政景同祖ノ因緣ヲ以テ客兵トナリ片倉城ヲ守ル、適々諏訪氏兵ヲ甲州諸崎ニ出シ大ニ武田氏ト戰フ、信州方終ニ敗軍兵ヲ引テ歸陣ス、此ノ合戰ニ本土片倉城主鬼平次宗高敵ノ流矢ニ中リ戰死セリ、時ニ天文七年戊戌六月ノ事トス、一女ハ既ニ十有五歳ニ及ブ、是ヨリ先キ小平次政景ハ宗高ト婚約ヲ結ヒオケルヲ以テ茲ニ至リテ其聟トナリ、本土後見ノ資格ヲ以テ内外ノ事ヲ處理セリ

爾後甲信ノ間弓矢倍々多事トナリ、同十一年壬寅七月武田信玄、諏訪氏ト和ヲ媾シ、諏訪刑部大輔頼重ヲ甲府ニ請致シ、計略ヲ以テ之レヲシテ自裁セシム、此時ニ方リ高遠信濃守高員、父紀伊守頼次ト諏訪惣領家ヲ奪ハムトシ、近郷ノ豪族ヲ語ラヒ兵ヲ舉ケテ諏訪郡ヲ侵畧ス、信玄之レヲ聞キ大ニ憤リ兵七千餘ヲ率キ來リテ高遠氏ヲ攻ム、其勢ヒ破竹ノ如シ、片倉城モ支フルコト能ハス、終ニ武田氏ノ爲メニ焦土トナルニ及ヒ、世子八郎次宗尚、母及ヒ姉妹ノ女子二人ヲ携ヘ諏訪湖西ノ山間ニ潛ミ一時軍難ヲ避ケタリ、小平次政景ハ本土ノ緣族箕輪城主藤澤頼近ヲ援ケ共ニ武田氏ノ侵畧ヲ防カントシテ之レニ投ス、以後連年甲州ノ兵ト戰フコト數回ニ及ヘリ、以上ヲ片倉城最尾ノ始末トス

又云フ　小平次政景ハ藤澤頼近ノ箕輪城ニ投シ、武田方ト交戰數度ニ及フモ天文十四年八月終ニ城陷リ、城兵或ハ敵ニ降リ、或ハ逃遁シテ甲兵ノ領スル所トナレリ、政景ハ小笠原氏ニ隨從シテ一家ヲ立ツルヲ念トシ、屢々軍功ヲ抽ンテタレトモ小笠原長時亦武田信玄ノ敗ル所ト爲リ、部下ヲ捨テ、他州ニ奔リ終ニ浪人ス、茲ニ先代鬼平次宗高ノ嫡子

八郎次宗尙天性軟弱後夭折ス、仍テ政景其後チヲ襲フテ本土ノ祀ヲ奉スルノ本主トナル即チ弓箭刀鎗ヲ棄テ歸農シ、潛居ノ地ヲ開拓シ伯夷叔齊ノ亞流トナリ以テ子孫ヲ養ヒタリ、頃シモ永祿元年、中秋月皎々トシテ風無ク天地靜謐ノ夜柴門ヲ叩クモノアリ、之レヲ詰レバ曰ク、鬼庭良直ト答フ、是レ桑梓ノ舊友ナリ、政景弊廬ニ誘ヒ來意ヲ問フ、鬼庭氏云フ、我レハ最近甲斐武田信玄ノ聘ニ應シ頗ル寵遇ヲ得、信玄左ヲ空フシテ近侍セリ、去ル比信玄其愛子勝頼ニ試的ヲ命シ「十度ノッツ」ヲ行ハシム、果シテ勝頼十三歲ノ若年ヲ以テ試的ヲ遂行セリ、我レ陪觀ヲ許サレ、重臣及ヒ多クノ近侍ニ交ハリテ之レガ技術ノ妙手ナルヲ嘆シ、御若年ニシテ此ノ如キ「ッツ」ノ妙ナル實ニ「おめごひ事よ」ト高聲ニ賞美セリ、然ルニ同座近侍ノ内ニ「松の枝」ト云フ勾當ナルモノ在リ、窃カニ我カ言ノ「れめごひ」トハ田舍漢ノ言流カナト痛ク我ヲ罵リ且ツ嘲笑セリ、後亦我レ信玄ニ謁セムトシテ出仕ス、彼ノ勾當近侍ノ座ニアリ、復「れめごひ殿」御見エカト我ヲ嘲笑セリ、我レ甚タ不興心中怒氣滿々タレトモ徐ロニ勾當ヲ顧ミ諭シテ云フ、汝勾當屢々予ヲ嘲弄シ「おめごひ殿」復御見エカトナス愚カモ甚シ、古歌ヲ知ラスヤ

小倉山おさゝの野邊のをみなめし、名めらといふて花のめごさよ

ト云云、「名めら」トハ言語同斷ノ訓譯、「めごひ」トハ愛ノ訓譯ニシテ古來堂上方ニ於テ既ニ此ノ「めごひ」ノ訓ヲ用フ、何ゾ田舍漢ノ言ト爲スヤ、抑モ汝カ如キハ勾當ノ位置ニ在ルモ雅言ヲ知ラサル凡人ナリト罵倒セリ、其夜旅館ニ於テ一封ニ仕官ヲ固辭スル旨ヲ認メ人ヲ介シテ信玄ニ呈セシム、其文義ハ信玄貴下ハ古今ノ名將トシテ予モ敬服セリ、然ルニ勾當松乃枝如キ愚者ヲ近習ト爲スハ當家ノ名折レ、古今ニ耻ツル所ナルヘシ

云云ト叙シオキタリ、而シテ今我漂然ト甲府ヲ辭シ將ニ奥州ニ歸還セムトス、此ノ諏訪ニ足下ノ潛居シ在ルハ曾テ聞知セリ、甲府ニ推薦シテ武田家ニ仕事ヲ勸誘スヘキ念アリシモ、今身自ラ去ルニ及ヒ素懷ヲ告ケ相携ヘテ東歸セムトシテ訪問スト云云、政景鬼庭氏ノ甲府ニ在リシハ其談說ニ依テ初メテ之レヲ知リタリ、一別以來ノ懷舊談ニ夜ヲ徹セリ、政景家眷ヲ思フノ情ニ懸戀シ斷シテ東歸ヲ欲セズ、唯桑梓ニ無恙健在他日仕官ノ時機ヲ待ツノ情ヲ叙セラレムコト切望ストノ一言ヲ以テ鬼庭氏ニ訣別ス、鬼庭氏亦悲憤慷慨相俱ニ涕潸々袂ヲ絞リテ別ル、因ニ記ス、鬼庭氏後入道シテ左月ト號シ、伊達政宗侯ニ仕ヘ、東北ニ頭角ヲ顯ハシ終ニ其要職ニ在リ、一日豊太閤ニ謁ス、鬼庭ノ字甚タ驚異ニ屬ス、依ツテ茂庭ニ改メシム、即チ伊達家ノ茂庭ト呼ハレ、奥州志田郡松山館主トシテ一萬三千餘石ヲ領シテ明治廢藩迄ニ至リシ家格之レナリ、今士籍ニ列シ仙臺市ニ假居スト聞ケリ、政景ハ天性浮華ヲ好マス、終身窮谷ニ僻居名聲ヲ欲セス、國亂ニ依ツテ踪跡ヲ韜晦セシト云フ、却說武田信玄、鬼庭氏ノ手書ヲ一見シ、予カ不德ヨリ鬼庭ノ如キ勇士ヲ逸セリ一代ノ失策トス、松乃枝如キ者無用ノ言ヲ吐ク不忠ナリトシ、火殺セリト云フ

景時

小四郎　小八郎　因幡守　伊豆守

景行ノ三男、二兄俱ニ子女無シ依テ猶子ト爲リ家督ヲ繼ク、武畧ノ達人、天文四年二月大崎左衛門佐高持ニ背キ浪士トナル、後伊達左京太夫晴宗侯ニ仕ヘ、羽州置賜郡長井庄小松郷ヲ賜ハリテ領ス

補ニ云フ　景時頗ル敬神家タリ、信州諏訪大神及ヒ御子神ヲ分座シ居地ノ氏神トシテ併祭セリ、之レ小松郷諏訪神社ニシテ現今ハ小松町ノ產土神トシテ崇敬者少カラズ

又云フ　景時諏訪ノ神遷祀ノ時、深谷通過ノ途荒漠ニシテ前進スルニ日沒闇夜ニテ咫尺ヲ辨セス、適々狐火アリ之レヲ導クモノヽ狀ナリ、行クコト數里克ク人里ニ著ス、里人云フ、曾テ途ナキニ茲ニ到ル神威トス依テ是ヨリ人馬通行スルヲ得タリ、此神ノ開ク所ナレバ諏訪嶺ト号ス、今小松町ヨリ越後ニ達スル官道是ナリ

女子　清水伊賀ノ妻

景親　初メ頼高　壹岐守

景時ノ一男、法名意体齋

天正中、羽州米澤城ニ於ケル軍奉行六人ノ一トナル、且ツ數多武功ヲ顯ハシ又馭者ノ達人賜祿ヲ以テ一家分創、旗標色、紋章井桁、片倉六兵衛ノ曾祖父是レナリ、白石藩ニ仕事シテ重臣トナル

女子　湯村土佐ノ室、子孫繁殖鈴木孝常、湯村、伊福等諸氏ノ祖トナル

景重　式部少輔

景時ノ二男、出羽國置賜郡屋代永井庄（永、長共ニ通用ス）八幡宮神職ノ領田百貫文ヲ賜ハル

但シ天文十五年晴宗侯ノ印章アリ其朱章今ニ同地金藏院所持スト、平生武勇ヲ好ミ從卒百餘人ヲ率キ屢戰功ヲ著ハセリ、一說景重八幡宮ノ祠官ヲ奉シ百貫文ノ神領ヲ賜ハリ、事アルトキハ戰場ニ立チ軍功ヲ著ハセシコト少カラスト云云

補ニ云フ　安達郡ヨリ會津郡ノ北部ニ踰ユル峻嶺ヲ中山嶺ト云フ、之レニ對シテ東方ニ聳ユルヲ片倉山ト云フ、樹木茂密樵蘇ノ恩澤アリト、片倉氏ノ遺領地ト云フ

景廣

景時ノ三男、天文十三年十月軍功ニ依テ羽州永井庄、下小松郷ノ内父伊豆守遺領其他ニ於テ采地ヲ晴宗侯ヨリ賜ハレリ、判物アリ今ニ之レヲ所持ス

女子

菅野信濃守菅原位家ノ妻、此ノ信濃守ハ伊達家宿老四人ノ一ナリ、天正十八年三春城代ヲ役ス、後老テ卒ス、菅野有次、同信次等ノ祖ナリ

爲近　修理之助

景時ノ四男、一家ヲ分創シテ家士トナル、即チ片倉盛次ノ祖ナリ

重繼　藤左衛門尉

景重ノ一男、母ハ成嶋八幡宮神職ノ娘ナリ、而シテ重繼ハ櫻田源八郎實信ノ外祖父ナリ

補ニ云フ　一本系圖ニハ重繼ノ母ハ長井庄、八幡宮神職某ノ女ニシテ後離別ス、重繼及ヒ妹一人ヲ携ヘ復婚シテ之レヲ養ヘリ、重繼成人ノ後チ異母弟小十郎景綱ニ依テ輝宗侯

ニ仕事シ片倉氏ヲ稱ス

女子

同僚小嶋治部少輔頼次ノ妻、即チ小嶋數房、小島近任等ノ祖ナリ

女子　於喜多

父ハ茂庭周防良直入道左月〈原本父ハ茂庭石見綱元號左月トアリ誤リナラム、伊達世臣家譜畧記茂庭氏ノ系譜ニ（上畧）周防良直勇而有二才量一、天正ノ初列二一族一致仕入道左月、天正十三年十一月安達郡人取橋之役大顯二戰功一終戰死（一本享年七十三）其子石見延元（初綱元）奉二豊臣大閤之命一、改二鬼庭一稱二茂庭一（下略）云云ト記セリ、仙臺志料ヲ以テ校スルニ又文義同シ、唯リ左月戰死ヲ十二月十七日ト詳記ス、然レハ原本ニ於喜多ノ父ヲ茂庭石見綱元トナスハ年齢ヨリ推シテ及ハサルモノヽ如シ、仙臺志料綱元ノ卒寛永十七年五月二十四日享年九十二歳トアリ、之レヲ逆算スルニ天文十八年生レナルヘシ、於喜多女ニ後レテ生ルヽコト十年ナリ、故ニ石見綱元ヲ喜多女ノ父トスルハ誤リノ甚シキモノトス〉母ハ本澤氏、初メ茂庭周防ニ嫁シ、後離別シテ景重ノ妻トナリ景綱ヲ生ム、後チ母ニ隨ヒ養ハレテ景重ノ子トナル、仙臺藩士桑島兵助ノ外祖母ナリ、仙臺志料ニ云フ、於喜多ハ納言公ノ乳母ニテ片倉景綱異父ノ姉ナリ（中略）景綱弱冠以下喜多乳二納言公一之故上侍二公側一（下略）云云、又曰フ景綱薄俸他邦ニ赴キ青雲ノ志ヲ達センコトヲ喜多姉ニ計ル、喜多女戒メテ云フ、天下豊大祿高官ヲ以テ一功勞無キノ士ヲ待ツモノアラムヤ、自今他君ニ事フルノ志ヲ以テ幼君ニ忠ヲ效サバ士タルノ道ヲ守リ以テ二心不義ノ汚名ヲ免ルヘシ、此レ武士タルモノヽ本意ナルヘシト、景綱此諭言ニ服シ自今一意以テ納言公ニ奉セシトイフ、又喜多女片倉氏ノ軍旗白地ニ巨鐘ヲ画キ以テ章トナサムコトヲ奬ム、其意巨鐘ノ洪音タルヤ之レヲ撞クハ響キヲ發ス、其聲數里ニ渉リテ人耳ヲ傾ケテ聞キ以テ事故ノ何タルヲ知ルヘシ撞クハ敵ヲ突クニ象リ、響音ハ其勢威ヲ世ニ示スニ在リ云云、是ヨリ片倉家ノ軍旗ニ巨鐘ヲ用キシトナム、又喜多女景綱白石城ヲ修築ノ時ニ中リ喜多女曰フ、此城大手南向キニテ地象ニハ克ク適スレモ今主公仙臺城ニ座セリ、然レハ主公ノ座ニ相背キテ一ツハ闕禮ニ亘ルノ恐レアリ、一ツハ臣下トシテ主座ニ反スルノ地位ニ居ルハ武道ヨリ見テ最モ不祥ナリ依テ大手門ヲ北方ニ轉シテ開クヘシ、此クスルトキハ萬般主公ニ對シ臣タル者ノ道ニ合スト云フヘシ、而シテ外廓ヲ修增シ濠ヲ穿チ繞ラシ、小木戸ヲ二三開キ置キ以テ出入ヲ自在ナラシムヘシ、若シ敵之レヲ圍ムアラバ孰レニカ血路ヲ得テ逃レ出テ、敵ノ背後ニ轉シ内外ヨリ挾擊セバ敵ヲシテ敗潰セシムルコト容易ナルヘシト敎ユ、景綱首肯シテ其ノ如ク修築セシト云フ、喜多女ノ考案果シテ圖ニ當リ東奥名城ノ一ト稱セラルヽニ至レリ

又喜多女侍二納言公一于聚樂第一、豊公候二納言公一不レ在、遣二女監一、見二喜多一、私請二納言公侍婢一曰殿下繾戀不レ置、喜多謂若以二一婦人之故一、忤二豊公之意一、大非二公家之利一、乃諾レ之、直付二侍婢於女監一、遣レ之（侍婢香之前、高田氏、實名お種、豊公十六美人ノ一トスト）公歸閨二此事一、大怒、命二蟄居一、喜多構二庵於白石城邊藏本村觀音堂側一、專修二禪行一、慶長十五年七月五日病卒、墓在二庵側一云云

因ニ記ス、白石舊跡社寺ノ部ニ少納言喜多子之墓、福岡村字藏本瀧ノ觀音堂後丘ニアリ墳墓現存ス、其ノ天壽七十二、景綱大ニ哀悼シ遺體ヲ庵室ノ傍ラニ葬ルトアルモノ是レナリ

法名圓同院月隣妙華大姉、法號ノ字ヲ採リ圓同寺ト云フ一佛寺ヲ建立シ菩提寺トシ、歳時

修法冥福ヲ祈リシト云云

仙臺藩二世中將忠宗侯、喜多刀自ノ舊功ヲ追賞シ、其近親牛塲金兵衞ヲ召シ家祿參拾貫文ヲ給ヒ片倉氏ニ改メテ仕ヘシム、今尙子胤連聯タリト

附ケテ云フ、喜多刀自ノ異母弟ニ茂庭石見綱元ナルモノアリ、豊公ノ知遇ヲ受ケ常ニ謁見ス、一日豊公强ヒテ圍碁ヲ戰ハセムトス、茂庭氏云フ普通ノ鬪碁既ニ己ニ厭ク、希クハ賭碁ヲ鬪ハム、豊公之レヲ諾ス、適々香之前茶ヲ點シテ來リ侍座シテ茶菓ノ給仕ヲナス、豊公茂庭ニ戲レテ云フ、汝若シ贏タバ此ノ香之前ヲ賜フテ偕老ノ偶トナスヘシト、於レ是鬪碁三番悉ク茂庭氏ノ全捷タリ、約ノ如ク香之前ヲ拉シテ家ニ歸リ直ニ納言公ニ謁シ香之前ヲ納ル、納言公大ニ悅ヒ茂庭氏ニ厚ク物ヲ賜フテ賞シ若干ノ加俸アリシト、公ト香之前ノ膠漆舊ノ如シ、而シテ後納言公茂庭氏ノ忠實ヲ感シ、香之前ヲ賜フテ配偶トス、幾干ナラスシテ一子宗根ヲ擧ク、亘理ノ家跡ヲ襲カシム、子孫聯々多ク伯耆守ヲ以テ家名トシ今ニ胤裔存スト、此ノ如キ逸事茂庭氏鬪碁ノ輸贏ニ因リテ先ニ終身幽閉ニ罪セラレテ瞑セシ喜多刀自ノ失策ヲ償フヲ得タルハ傳ヘテ偶然ニ非ラストナス

景綱　小十郎　備中守　從五位下

景重二男、母本澤刑部少輔平眞直女、弘治三乙巳年（月日不詳）誕生、妻矢内和泉重定ノ女（一系矢内定信ノ女トス）誕生出羽國置賜郡長井莊小松鄕、稚名小十郎、此小十郎ノ名ハ叔父飯田播摩守ノ稚名ヲ贈リテ命名スル所ト云フ

幕紋九曜、小旗紋白地ニ黑撞鐘、家紋井桁、時代正親町院天皇御宇、公方從二平信長一、至二豊臣秀吉、德川家康初年一、住所初メ羽州置賜郡、長井莊宮村、片倉及ヒ奥州信夫郡大森城（天正十四年七月軍功ニ依テ主君伊達政宗ヨリ賜フ所）領土貳萬石一ニ壹萬八千石トモ云フ、是レ景綱一城ノ主ト成ルノ最初トス、伊達日記ニハ仇敵畠山義繼ヲ殄滅セシハ小十郎景綱ノ動績拔群ナルヲ以テ畠山氏累代ノ居城二本松（安達郡）ヲ賜フトアリ（奥州諸記錄ニハ畠山氏滅亡ノ時二本松城ハ伊達安房守成實ニ軍功ヲ賞シテ賜ハルトアリ、又或記ニハ成實拜領ハ二本松ノ内八丁目城ヲ賜ヒシトアリ、其差點ヲ究査セシニ八丁目城ハ二本松城領ノ内ニ包容シアリテ元ヨリ別地ナリ、二本松ト云フハ其等ヲ包容セル總稱ナレバ、概シテ二本松トノミ云ヘリトアリ、之レニ依ツテ考フルニ景綱ニ賜ハリシハ畠山氏ノ本居二本松城ニシテ、成實ニ賜ハリシハ二本松領内ノ八丁目城ト云ヘルニヤト想到ス、然レトモ此ノ如ク判定スルヲ是正トストスレバ景綱大森城ヲ拜領スト云フニ衝突ス、是ハ孰レニカ一誤アルヘシ、附テ以テ博考ニ備フ）

次ハ田村郡三春城（領高五万石二十二鄕）是ハ天正十八年七月豊太閤ヨリ小田原參陣ヲ主張シ能ク主政宗ヲ勸誘シ參加セシメシ誠意ヲ賞シテ賜ハル所ナリ、但シ三春ヲ永ク領有セバ伊達家ニ對シ自然疎隔ニ流レ、累代ノ君恩ヲ忘ル、ニ至リ、道義ニ欠クル所アルヲ知覺シ期年ナラスシテ情ヲ具シ豊公ニ還附セリ、次ハ亘理郡亘理城ニ居住ス、此城拜領ハ同年七月トス（日時未詳）三春還附ヨリ夥多ノ月日ハ經サルモノトス

次ハ刈田郡白石城ニ居住、此レハ慶長五年七月二十五日當城攻擊ノ時、伊達成實ト功績ヲ爭ヒ、景綱先登陷落セシヲ以テ政宗君ヨリ特ニ賜フ所ナリ、翌年十月景綱亘理ヨリ白石ニ轉住セリ、以後茲ニ住シ刈田郡一圓ヲ領ス夫ヨリ子孫世襲十二世景範ニ至ル迄白石藩主ト

シテ異動ヲ見ザリキ

補ニ云フ　因ニ記ス、時ニ明治維新王政復古ノ勅命出ヅ、適々會津藩松平容保逆勅ノ罪アリトシ、官軍ノ総督九條公並ニ澤、醍醐ノ二卿相從ヒ鎮撫使トシテ東下、仙臺藩主伊達中將慶邦ニ詔シ、錦旗日月二旒ヲ賜ヒテ出兵ヲ促ス、藩宰三好清房（監物ト稱ス）勅使三卿ヲ護シ、會賊及ヒ同黨諸藩ヲ鎮征セムト謀ル、官軍ノ參謀世良修藏、大山格之助日夜會藩ヲ討伐セム事ヲ謀ル、是ニ於テ奥羽二十餘藩白石城ニ會盟シ、議スルニ倩々方今海内ノ情況ヲ察スルニ全國三百有餘藩一致同盟シ、而シテ後チ連衡ノ鉾ヲ以テ異議ヲ主唱スルモノヲ征討シ、海内ヲ舉ケテ　皇家ヲ奉護スルノ道ヲ講スルヲ先決問題ト爲スヘシ、然ルヲ一二藩王政復古ノ大義ヲ脩トシ天下ヲ乱サムトスルヲ惡ミ、且ツ云フ吾主中將ヲ擁立シ會庄二藩ヲ賊トシ以テ討伐セシメムトスル其意ヲ得ス云云ト議ス、適々人アリ參謀世良修藏ヲ殺シ、會庄二藩ト戮謀シ白石城（世良氏ノ墓白石川邊ニアリ）ニ據ヲテ官軍ヲ拒ム、是ヨリ白石城ハ奥羽列藩ノ公議府トナル、愈々官賊ト相分レ奥羽ノ野ハ事滋キニ至レリ、既ニシテ澤卿ヲ奉シテ官軍參謀大山綱良秋田ニ遁レ、同參謀前山清一ト佐竹侍從義堯ヲ力説シテ義兵ヲ擧ケシム、伊達中將ハ此時白石城ニ在リ、賜錦ノ朝旗ヲ城上ニ樹テ命シテ西軍ヲ拒ミ、官軍ヲ目シテ官賊ト云ハシメ勤王ヲ論スルモノヲ擯斥ス、是ニ於テ藩論始テ決ス、其後幾多ノ曲折ヲ經テ事態倍々暗憺、奥羽ノ地ハ奸黨ト正義ノ徒ト肩摩雜闐危機一髪ノ間ヲ距ルノミ、其狀古ヘノ慶元乱ニ比シテ尚慘タルモノヽ如シ、適々仙臺藩分家宇和島藩（伊豫國宇和郡）伊達侍從宗城ノ使者富田、玉田、市村三氏詔書ヲ齎ス、其朝命ニ曰フ、伊達慶邦東北大藩ヲ以テ祖先ノ功勞アリ　朕之レニ命シ會津ヲ討タシム、命ヲ奉シ兵ヲ發シ輒チ其圖ヲ改メ賊徒ニ黨シ、軍機ヲ遷延総督ヲ蔑視シ參謀ヲ殺害シ罪敕スヘカラス（中略）大逆言フ可カラス、其官位ヲ止メ討伐敕ス勿レト慶邦捧讀驚愕措ク所ヲ知ラス、涕ヲ揮ツテ群下ヲ書諭スルニ歸順反正ノ意ヲ以テス、伊達將監、遠藤文七ヲシテ嗣君宗敦ヲ奉シ軍門ニ至リ降ヲ請ハシム、實ニ慶應四戊辰九月十五日ナリ（因ニ記ス、嗣君宗敦ハ宇和島侍從宗城ノ男ナリ）是ニ於テ慶邦白石城ノ奥羽列藩公議府ヲ徹去ス、幾干モナク白石城ニハ政府ニ於テ按察使府ヲ置クコトトナレリ其後奥羽平定城地ハ墟トナリ以テ今ニ至ル、現下ハ公園地ヲ設ケ人民遊覽ヲ擅ニスル所トナレリ、以上ヲ白石城ノ沿革トナス

景綱白石城ニ封ヲ受ケ、仙臺城南方關門ノ要害トシテ守衛ノ任ニ當ル、領邑田額ハ此時未タ刈田郡一圓ヲ充テ行フノ文墨ニシテ目録詳カナラス、故ニ茲ニハ云ハス

景綱稟賦聰明也、其幼時遠藤山城（諸記遠藤山城基信トス）其人ト爲リヲ見、向來國家ノ器ト爲ルヘシト稱美ス、果シテ小十郎ノ武名鬼神ノ如シ、伊達家十六世性山公輝宗（左京太夫從四位下）小十郎ノ人ト爲リヲ鑑識シ、遂ニ抽ンテ、歩小性ノ列ニ加ヘ俸二口、金貳兩ヲ給セラル時ニ年十九歳、（一系年十七トス非ナリ）輝宗命シテ幼君藤次郎（初名ほん天丸）ノ傅タラシム時ニ幼君年九ト云フ、景綱ノ補弼教養其宜シキヲ得タルヲ以テ幼君ノ知識明晰、又武勇絶倫ノ名ヲ天下ニ揚ケシカノ推評アリ、若シクハ夫レ然ラン歟

景綱舉止閑治、好ニ舞曲一有ニ舞句之象之志一、或時御能有之役連而出、輝宗公御覽、問ニ其姓名一給、是仕レ君之始也、政宗君幼稚之時、有ニ御側一、奉レ親焉、或時竹ノ水入作進スヘキノ手書ヲ給フ、左ニ

みつみつ、ふみをも、さしこす候、無音之樣に候、然者昨夜之水入共、みなくわるく候の間其方罷越いかにも、よく候を二本計り、御きり候て被下候べく候、あとも重而こしらへ下され、いかにもよき竹二本計り、水入になり申べく、きり取いろぎ、まゐり被下候

小十郎殿　　さ　　さ

一本ニハ手書ノ外書ニ尙々明日之御れいに、何にても、よう候はば、うけたまはり候べく候ト添書シアリ、因ニ記ス、手書ノ始ノみつみつトハ密々ノコトト云フ字ナリト

仙臺志料（卷八）云フ、納言公（政宗寛永三年五月權中納言ニ任ス故ニ云フ以下倣之）兒時面貌不レ揚含二羞色一、觀者皆謂レ非二主將之器一、以レ故、矢二愛母氏一、人心不レ附、（中畧）片倉景綱、知二其爲一偉器一、具盡二忠勤一、云云（下略）然カモ公一世ノ大成ヲ見ルニ當時群雄ニ抽ン出テ、丕績竹帛ニ溢レ東奥ノ藩鎭トシテ天下ヲ制控セリ、景綱ノ眼光眞ニ日月ノ如シ

納言公少時天痘ヲ病ミ、餘毒眼底ニ入リ一目ヲ眇シ、長スルニ及ヒ眼球突出シテ醜貌甚シ故ニ愛ヲ母公ニ失フ等ノ因トナレリ、一日侍臣ニ命シテ眼球ヲ銜潰セシム、皆君体ニ異アラムヲ慮リ應スルモノナシ、小十郎進ムテ小刀ヲ以ッテ其醜部ノ周圍ヲ刳リ取リ去リタリ幼君痛ミニ堪エス卒倒氣絕ス、血ハ流レテ雨ノ如シ、小十郎大喝一聲叱シテ云ハク、苟クモ武將タラムモノ此ノ如キ皮膚上ノ截解手術ニ人事不省ニ陷リ卒倒スルガ如キ、笑止千萬意外ノ態ナリト罵倒ス、幼君忽チ蘇生元氣平日ノ如シ、小十郎叩頭謝シテ云ハク、幼君萬一蘇生セズバ此小刀ヲ以テ小十郎自害シ地下ニ謝セムト決意シテ手術セリ、請フ寛恕シ給ヘト、幼君諾爾後刎頸ノ交リヲ以テ倍々親睦ス、小十郎愈誠忠ヲ盡シテ仕事セリ、故ニ小十郎ノ直諫ハ悉ク納言公之レヲ容認セリ、百ニ一ヲ失ハス眞ニ君臣ノ大道矢ノ如シト云フ

ヘシ、時ニ幼君十一歲、小十郎二十一歲ノ時ナリト、是ヨリ眼疾平癒再思ヲ見ズシテ獨眼將軍ノ名四方ヲ壓ス、因ニ記ス、眼毒排去ニ用キシ小刀ハ幼君護身用トシテ父君ヨリ授ケラレシ利刀ト云フ、即日小十郎ニ與ヘテ紀念タラシム、今尙片倉男爵家什寶中ノ一トシテ存ス

天正五年正月十一日父性山公、幼君藤次郎君ノ爲メ自ラ加冠シ政宗ト諱ヲ命ス、片倉小十郎景綱小刀ヲ献シテ賀ス、而シテ政宗ノ諱ハ伊達家八世ノ祖ガ冠スル所、其政宗ハ武勇絕倫且歌人ニテ新續古今集ノ作者ナリ（應永四年入朝正五位上、大膳太夫ニ叙任、威名朝野ニ振ヒ羽州置賜、屋代、北條、奥州宇田、亘理、宮城、黑川、深谷、松山等皆領邑ス、依テ其人格ニ倣ヘトシテ命スル所ト云フ）納言公果シテ父君鑑識ノ如ク、奥州半國ニ主タルノ權勢ヲ得ルニ至リ、仙臺藩三百年ノ祖ト崇敬セラル實ニ一名將トスヘシ

景綱終身軍旅ニ鞅掌セリ、今其事績ヲ概括シテ擧クレハ左ノ如シ

天正十年五月伊具郡金山城ヲ攻ム、此ハ是レ相馬氏ノ要害ナリ、蓋シ此ノ戰ヒヤ景綱初陣カ、同年同月六日同郡丸森城ニ轉戰ス、景綱敵鋒ヲ避クルカ爲メ退却シテ士馬ヲ憩フ、敵突擊シテ來リ逼ル、急遽起テ之レヲ粉碎シ城ニ逼テ陷ル、夫ヨリ諸部攻城ニ對戰ニ悉ク拔群ノ功ヲ奏セリ、就中景綱一世三若闘ト稱スルハ天正十三年十一月十七日ノ人取橋（安達郡）ニ於ケル先君輝宗ノ吊ヒ合戰也、茂庭左月敵將窪田十郎ノ鎗ニ刺サレテ討死ス、景綱追擊窪田ヲ及シテ首ヲ捕リ壓カニ左月ヲシテ瞑セシムルヲ得タリ、之レ第一ノ苦闘タリ、次ハ天正十六年六月、佐竹義重、蘆名義廣、岩城常隆、白河ノ結城義親、須賀川盛行、二階堂（盛隆時代カ）ノ諸將兵三萬ヲ進メテ安積郡ヲ侵略セムトス、伊達成實、片倉景綱命ヲ以テ福

原（安積郡ニ有リ）ヲ守ル、蘆名氏部將新國上総ヲシテ戰ヒヲ挑ム、景綱弟藤左景繼（本系圖及諸記底兄トス之レニ據ルヘシ）ニ歩卒二百ヲ率キ出テ、追擊セシム、藤左人ト爲リ悍ニシテ慮少シ、景綱成實共ニ戒メテ云フ、勝フトモ遠ク追フヘカラスト、然ルニ藤左追窮敵首二十餘ヲ獲タリ、勝チニ乘シテ輕進ス、敵砦ヲ出テ蟻集包擊シ殆ト危シ、成實、景綱望見シテ云フ、藤左淺慮部下ヲ敵ニ餌スベシ、救ハスムハアルヘカラストシ、成實、景綱出テ、追擊ス、敵二將ノ兵ノ動クヲ見テ砦ニ入リ更ニ吾兵ノ歸路ヲ要ス、二將苦鬪時ヲ移ス、伊東重信非番タリシモ出テ、救フ、其戰ヒニ伊東氏獲ル首百數級、主公政宗又來リ助ク凡テ獲首二百數級ニ及フ、吾兵ノ死者四十人、而シテ重信終ニ戰死ス、皆云フ此大捷重信ノ功ナリト、景綱大ニ憤リ藤左ト絶ツ、諸將間ニ居テ和解セリ、實ニ七月四日ノ事トス、之レヲ窪田ノ合戰ト云フ、景綱苦鬪ノ第二トス、次ハ天正十七年六月五日、主公羽州麻耶郡摺上原ニ兵ヲ出シ蘆名義廣ト戰フ、敵首ヲ獲ルコト二千五百級、又湖水ニ溺死スル敵五百餘之レヲ揚ケ合セテ一所ニ埋ム、号ケテ三千塚ト云フ、此戰ヒニ敵ノ一卒來リ間ヲ窺ヒ、景綱ノ重寶トセル軍旗ヲ奪ヒ去リ寸々ニ扯斷シテ棄ツ、從士佐藤慾六突進敵中ニ混レ入リ、安孫子彦之丞ノ吹ケル陣具ヲ奪ヒ來リテ景綱ニ献シ貝ノ由緒ヲ問フ、景綱云ハク蘆名ノ陣具ハ天下ノ珍寶、慾六復讐ノ功吾家ノ名譽ト云ヒテ賞セリ、其具今ニ片倉家ニ存在ス、此ノ戰ヒヲ景綱苦鬪ノ第三トス、其他景綱ノ戰場ニ立ツ數十ヶ所ニ及フ、野史武臣列傳ニ景綱戰場ヶ所大森、七森、金川邊、大寺、若松、蘆野、仙道大里城等云云トアリ、同書欄外ニ政宗、迎ニ秀吉于二宇都宮一、命令レ献ニ片倉景綱於二土牒一、系譜一、又片倉景綱献下因ニ大谷吉隆一伊達家系譜並領内土牒、又蘆名舊領圖牒、米澤圖牒、政宗祖先家傳上（下略）云云、又秀吉

賜ニ片倉景綱於田村二十二郷一、云云ト記セリ、是レ即チ小田原陣營ニ於テ參加遲延ノ罪ヲ宥免セラル、モ、私鬪ヲ以テ侵畧セシ土地貳百萬石ハ還上スヘシトアル嚴命ノ土牒前記ノ如シ、之レニテ政宗ト豊公トノ疑心霽レタリ、豊公、景綱ニ田村二十二郷ヲ賜ハリシハ小田原參陣ヲ政宗ニ直諫セシ誠意ヲ賞シテノ故ナリト、尚諸書ニ宇都宮奉迎ノ時、政宗ト景綱二人ヲ拉シテ茶室ニ入リ、奥羽處置ノ方針ヲ議スルニ、豊公親ラ茶ヲ点シ共ニ之レヲ喫シツヽ時ヲ移シテ出ツト（此時政宗ニ卯之花威ノ甲冑ト小田原陣ニ於テ使用セシ團扇ヲ賜フ）景綱ニハ虎豹皮ノ鞍覆四掛、將几壹脚、活火繩使用、長柄傘袋入、同鎗、先挾箱、又家士ニ供立木綿合羽、手傘等ヲ使用スルコトノ免許證ヲ與ヘラレタリ、時ニ同年七月二十六日也、是レヨリ先同年六月七日小田原陣營ニテ政宗、豊太閤ニ謁ス、片倉景綱、高野親兼、白石駿河、片倉壹岐等贄ヲ捧ケテ陪謁ス、景綱純子ニ砂金ヲ包ミ、盤上ニ盛リテ進献ス砂金溢レテ盤外ニ散落ス、政宗懐紙ヲ出シテ之レヲ掃去ス、豊公又懐紙ヲ以テ拾ヒ取リシト、觀ルモノ政宗ノ大器ニ驚キシト云フ、同年九月豊公奥羽要地ヲ一巡、北ハ九戸ニ至リ乱ヲ平ケ且ツ風物民情ヲ察シ西歸ス、景綱隨行其道祖ノ式後田村三春ヲ返上ス、其ハ伊達家ニ對シ自ラ疎隔ニ至ルヲ以テ固辭スル所ト云フ、豊公其誠意ヲ感シテ去レリト、爾後景綱專ラ伊達家ニ忠ヲ盡シテ名ヲ顯ハス、同十九年正月晦日政宗、豊公ノ嚴命ニ依テ入洛ス片倉景綱、茂庭綱元等隨行ス、往行ノ次、今度政宗自盡ヲ賜ハルヘシト云云、其理由ハ蒲生氏郷讒シテ曰ハク、政宗去年葛西、大崎ノ領民ヲ煽動シテ大乱ヲ釀セリ、今鎮定ストモ多大ノ損失アリキト云云、政宗入洛シ豊公ノ詰責ヲ受ク、策士アリ政宗ノ寃ヲ條項ニ分チテ書シ、或ハ之レヲ巷間ニ遺棄シ、或ハ德川公ノ邸門ニ建ツ等シテ宣傳ス、豊公之レヲ見

聞シ「方々」ヨリ政宗ヲ惡ムモノ多シ、故ニ此ノ如シトテ究論セズ、却テ優遇シ　皇家ニ奏シテ侍從ニ任シ、親ラ羽柴ノ姓ヲ許シ、珍器ヲ賜フテ讒者ノ反正ヲ促セリ、景綱、綱元等モ物ヲ賜フ、而シテ五月命セラレテ歸還ス、右件ニ付キ初メ德川公ヨリ景綱ニ手書ヲ賜フ、左ノ如シ

政宗御上洛之儀ニ付而者被成御朱印候條則桑嶋萬機差下候淺野彈正之兩人ニ相任早々御上洛肝要候此由能々相心得諫言最候也　　正月十三日

家　康　判

片倉小十郎殿

更ニ又一通左ノ如シ

急度申候今度政宗上洛之儀淺野彈正我等兩人被相任一刻モ被相急尤ニ候此旨能々相心得可申候桑島口上相含候間委可申候恐々謹言　　正月二十三日

家　康　判

片倉小十郎殿

ト宛テタリ、德川淺野兩公ノ景綱ヲ信賴スルコト紙面ニ溢レテ見ユ（本文書ノ外前田家又他ニ二三通景綱ニ宛テタル文書アルモ繁ヲ厭フテ省畧セリ）

文祿元年壬辰正月五日、政宗岩手山城出發朝鮮征伐ニ供奉ス、景綱隨行ヲ命セラル、政宗手書ヲ賜フテ途中ニ會セシム

ことはりの、ことく、いわて五日に相立、六日には、黑川に而、彼山れひ候所、志々一かう無之候て、三ついでて候を、二つうちとめ候、一ひきは、てまへゝて、うちにかゝる、ひるいなき、ところを、うちあて候、をの〳〵、はうび無是非候、今日七日當地小いつみに、とゞまり候、明日者、四のぶへうちこすへく候、內々其方不申候共わたりへ、よろしく、ともろしまかりいへくいい間、無其儀候、ふかくうみ山、心もとなく候、此はうまて、ひと〳〵、ねんの入さるとにい　　正月七日

政宗判

片倉小十郎殿

云云、文儀難解ノ点二三アルモ私見以テ之レヲ釋スルニ、一ひきは、てまへにて、うちあていトアルハ、てまいがうちあていトノ義カ、一本ニ小いつみの、小ノ字ナシ同地カ別地カ未考、わたりへ、ともろしまかりいへく候間トアルハ、景綱此比亘理在城ナレバ、わたりへ、よろしく、ともろし云云ハ亘理ヘ訪フヘク候所ト解スヘキカト想到ス

同二年三月十七日、豊公征韓ノ途ニ上ル、政宗第三軍ニ從フ、軍兵凡テ三千、行裝奇異ヲ飾レリ、世人觀テ伊達樣委ノ美ナルヲ賞讚ス、爾後異彩ヲ放テル裝衣ヲ伊達ト云フニ至レリ、景綱之レガ殿陣タリ

支倉六右衛門常長ハ海外精通ノ人タレバ、又從軍ヲ命セラレテ景綱ノ隊中ニ在リ

同年四月十三日、伊達家ノ軍朝鮮釜山浦ニ上陸ス、適々淺野幸長韓兵ト金海ニ戰フテ大敗ス、吾軍馳セテ援ケ敵首ヲ斬ルコト二百餘級、朝鮮兵敗潰ス、景綱命ヲ受ケテ豊公ニ情報ス、豊公大ニ悅ヒ三國無双前代未聞ノ感狀ヲ賜フ（全文繁ヲ厭フテ省ク）

同年九月十一日釜山ヲ發シ、兵ヲ名護屋ニ班ス、之レ豊公ノ命トシテ本營帷幕ノ謀臣ニ任セラルヽヲ以テナリ（伊達家世系ニハ政宗韓地諸部ニ轉戰、文祿三年八月凱旋ストアリ）

同四年關白秀次ノ疑獄起ル、政宗又坐シテ西上ヲ嚴命セラル、大阪ニ到リ施藥院法印ノ家ニ宿舍ス、景綱以下隨伴三十餘人ナリ、數日經過ノ內政宗ノ寃罪タルコト判明セザリシカバ豊公寛宥ニ處ストシテ政宗ニ退隱ヲ命シ、嫡男兵五郎ヲ家主トシ、而シテ景綱等重臣二

三ヲ召シ、以後政宗ト交通遮斷シ、兵五郎ヲ擁立シ、之レヲ秀頼ノ被官初メニ召シ仕フヘキヲ以テ、汝等連署ノ誓紙ヲ認メ奉呈セハ其レニテ伊達家ハ存立セシムヘシトテ誓紙ノ文案ヲ附シ考慮ヲ要セトノ嚴命ヲ以テス、景綱等退下シテ熟議ヲ遂ク、此間議論沸騰容易ニ落着ヲ見ス、德川公、前田公大ニ憂慮シ種々警告スル所アッテ漸ク嚴命ノ如ク承服ス、秀宗ニハ伏見ニ邸宅ヲ賜ヒ居住セシメ、本國ヨリ一千口ノ家士ヲ轉住、秀宗ノ警護ヲ役スルコトヽス、是レヲ伊達町ト呼フ、景綱以下十六名ノ重臣等我等兵五郎秀宗ヲ輔佐シ、秀頼公ニ誠忠ヲ盡クシ、豊臣家ニ對シ子々孫々ニ至ル迄二無キヲ以テ仕事スヘキ旨ヲ誓紙ニ認メ豊公ニ呈シ以テ事態解決ス、時ニ兵五郎君甫テ九歳ナリ、政宗ハ京都ニ邸宅ヲ賜ハリ退隱ス、之レヲ文祿ノ大變事ト云フ（以上ノ變事モ會津ノ蒲生氏政宗ノ爲メニ驥足ヲ伸フルコト能ハス、故ニ頻リニ石田三成、上杉景勝等ト政宗ヲ讒言シ之レヲ除カムト謀リ、關白秀次ト政宗隱密天下ヲ覆ヘサムト無根ノ說ヲ宣傳セシニ因スト云フ）

慶長三年八月十八日、豊太閤薨ス、天下ノ大勢一變ス（是ヨリ先蒲生家豊公ノ爲メニ横死其男野州宇都宮ニ量移、上杉氏會津百萬石ニ封セラレ、伊達氏ト對立ス）

同四年片倉景綱家眷及ヒ從士ヲ率キテ伏見ヲ撤去シ、本封亘理ニ歸住ス、實ニ其間八ヶ年ヲ閱セリ

同年德川公六男少將忠輝ト伊達政宗ノ嫡女五郎八姫ト婚約ノ事ヨリ大阪諸奉行異議ヲ唱ヘ石田三成、德川公ヲ除カムト謀リ、茲ニ東西對立ノ端ヲ啓ケリ、政宗國ニ就キ景綱等ト協議シ四隣ヲ警戒ス、上杉景勝會津城ニ據ッテ遙カニ大阪方ト內應シ、德川公ヲ除キ且ツ其黨與ヲ芟リ盡サムトス

同五年七月上杉氏吾伊達氏ニ逼リ戰ヒヲ挑ム、依ッテ先ツ伊達成實、片倉景綱兵ヲ率キテ上杉氏ノ要害白石城ヲ攻ム、二將東西ニ分レ環攻ス、景綱西方ヨリシ、成實東ヨリシテ功ヲ爭フ、景綱突喊城壁ヲ攀チ牙營ニ躍リ入リ、先登一番ト呼ハリ軍旗ヲ樹テヽ凱歌ヲ唱フ其功ニ依ッテ後此城ヲ拜領ス、領邑ハ刈田郡一圓タリ

片倉男爵家ニ傳フル所ノ古文書ニ

一備中景綱白石ノ城地拜領之、病氣或ハ御供等差合候儀依有之、亘理城地ハ成實ニ明ケ渡シ進遣ハシ候得共、景綱ハ亘理ノ內神宮寺村ニ滯留、又刈田郡宮村ヘ移居、慶長八年之春二月八日白石城ヘ移住候云云ト記セリ（因ニ記ス、關ケ原御陣前上杉氏ト諸部戰爭幾多ニ及フモ繁雜ヲ厭ヒ茲ニ全省ス）同十一年正月三日（一ニ十一日トス）政宗陸奥守兼鎭守府將軍ニ任シ、松平氏号ヲ稱スルコトヲ許サル、其朱章左ニ

親陸奥守令ニ所領一候通其子陸奥守エ六拾貳萬五千百參拾壹石壹斗八升餘之所於ニ奥州一無ニ相違一被ニ相宛行一者也、依而從ニ今日一鎭守府並ニ陸奥守相兼　天子御百姓町人始其方譜代町人家中ニ至まて情を懸靜謐國家可ニ相守一右ニ付松平氏、名字之一字被ニ進遣一候間其旨相心得是迄之通年々參勤可レ仕旨主人陸奥守エ可ニ相屆一之、知行領所無ニ相違一狀如件

正月三日

德川家康（朱印）

油利代　片倉小十郎エ

右印璽片倉家ニ於テ將軍禪代毎ニ登營書替章ヲ拜戴シ、之レヲ伊達家ニ披露シ、本紙ハ片倉家ニ保管スルヲ例トス

私云フ　油利代ト肩書セルハ往古藤原秀衡ノ家名、陸奥鎮守府將軍ニ勅任ノ事諸記ニ云フ所、伊達氏ニ其古式ヲ允許シ、油利氏ハ藤原家ノ目代タリ、故ニ此ノ如キ特例アリシヲ以テ片倉氏又同シク其古式ヲ命セラレシコト稀代ノ事由トスヘシ

同十九年壬寅十二月大阪ノ役起ル、政宗參陣ノ途次例ニ依ツテ白石城ニ宿泊ス、時ニ備中景綱病ニ臥ス、翌日公出發ニ先タチ景綱嫡男小十郎重綱ニ先陣允許ヲ謝シ、且ツ重綱ニ云フ汝ニ家傳ノ指揮旗ヲ與フ、必ス徒空ノ物トナスナカレ、我レ此ノ旗ヲ持ツテ百戰功ヲ顯ハシ今日ノ榮ヲ賜ハレリ、汝克ク心ニ銘セヨト、涙ヲ流シ嘘唏シテ泣ク、景綱又云フ、此ノ役ハ多ク和解シ來年再ヒ起ルヘシ、萬般其ノ心シテ處セヨト、果セル哉冬陣和成レリ（和成ルハ慶長十九年十二月二十一日ト云フ、同二十年五月七日大阪城亡フ、之レヲ夏陣ト云フ）

元和元年乙卯十月十四日景綱病卒ス五十九歲、葬禮ノ時、從二政宗君一自愛之片濱栗毛ノ馬ヲ賻トシテ贈ル、中島監物之レガ使者タリ、仙台志料景綱病卒ノ條ニ云フ、景綱死、公令三愛子宗清輓二葬車一、（下畧）云云、法名傑山寺殿俊翁常英大居士、導師者圓同寺住僧泰岩座元ナリ（後圓同寺ヲ白石町寺前ニ移シ傑山寺ト改ム、臨濟宗ナリ、爾後片倉家ノ墳寺トス）

殉死スルモノ六人左ニ

還忠道節士　石田八郎兵衛　魏雲道阿士　制野下總
常悅喜公士　山村六右衛門　道漢宗節士　氏家藤左衛門
玄峯道孤士　作間與惣左衛門　梅溪芳林士　岡和田太郎左衛門

右ノ内山村氏ハ大阪陣ニ參加ス、山村氏曾テ殉死ヲ約セリ、主景綱ノ起タサルヲ豫知シ、導明寺口苦戰ノ時望ミテ殿後ヲ勤メ、敵ト激鬪シツヽ、味方ニ散兵ヲ出サス引揚グ、而シテ山村重傷ヲ負ヒテ討死ス、其功ヤ大ナリ、小十郎重綱殉死ノ約アルヲ以テ議シテ其首位ニ葬リシト云云、山村氏ノ武士道ヲ墨守セルコト後鑑トシテ則ルヘシ

景綱ノ逸事

一天正十八年、政宗一日米澤城西館ニテ太夫人最上氏、其兄義光ノ指嗾ニ依ツテ政宗ヲ饗ス公食傷シテ殆ト危シ、景綱、原田左馬介ト馳セ至リ介抱シ、錦繖即休ニ命シ藥ヲ投セシム忽チ解ケリ、景綱、公ト議シテ太夫人ヲ最上ニ退ケ、即休ヲ賞シテ撥毒圓ト外ニ療虫丸ト命名セル銅印ヲ賜ヒテ藥ヲ弘布セシム、今尚此ノ妙藥仙台ニ聞キテ名アリ（此ノ食傷太夫人ノ毒謀ト云フ說アリ）

一征韓中、景綱部下ノ大津彌右衛門ヲ召シ軍功ヲ賞シ、尚明日ハ十人前働ケト云ヘリ、加藤孫助誓起某ノ分ヲ少シ殘サレヨト抗言ス、景綱孫助ヲ諭シテ汝ノ分迄彌右衛門ニ働ケト云ヒシニ非ス、請フ意ニ介セサルヘシト、終ニ主從三人哄笑シテ止ムト、景綱ノ從士ニ此ノ如キ貌狀數十アリ、武家ノ面目トス

一同役中一夜馬放レテ逸動ス、諸營敵來ルトシテ騷ク、景綱ノ從士村上和泉其馬ヲ押捕ス諸營靜カナリ、景綱村上ヲ賞スルニ放レ駒ノ紋ノ小旗ヲ給フ、靑氈トシテ今ニ藏スト云フ

一政宗槍原ヲ攻メムトス、其夜夢ミニ燼火ニテ腹ヲ燒爛スト、明旦此ノ解ヲ諸臣ニ問フ、景綱云フ、火腹、槍原邦訓通ス、其燒爛スルハ槍原ヲ火攻メニシテ破ルニアルヘシト、果セル哉、戰鬪中城内ニ内應スルモノアリ火ヲ放ツテ出ツ、城終ニ陷リ我有ニ歸ス、其内應スルモノハ曾テ景綱ト約スルニ火ヲ放ツテ寄手ヲ導クベシトナリ、其ノ如ク實現セリ、景綱

ノ奇才的中ス

一景綱陣中窃カニ論語、孫子ノ二書ヲ携ヘ夜半人静カニ至レハ出シテ之レヲ讀ム、且ツ註ヲ私編シテ參考ニ資セリト、今片倉家ニ藏ス、眞ニ景綱ノ遺墨ナリ、猛威紙面ニ溢レテ優美ニ見ユト云云

一景綱汐風ト云フ名笛ヲ愛シ陣中ニ携フ、閑アレバ出シテ吹ク、三軍ノ士爽然トシテ聞キ勇武ヲ皷ス

一政宗、秀宗伏見ノ第ニ豐公ヲ饗ス、後段ニ粹粥ヲ供シ「あさしらけ」ノ汁ト香ノ物ヲ添フノミ、太閤機嫌克ク陪膳ノ景綱ニ云フ、偖モ結構ナル後段哉トテ汁ヲ替エテスヽル、且ツ云フ、吾レ天下ノ珍味ニ厭キタリ、粹ノ粥コソ能キ手段哉ト賞シ、館侍ノ政宗ニ謂フテ云ハク、貴家ハ世ニ聞エシ舊家ナリ、從テ舊臣ニ古術家アリ、目出度キ事カナト欣然タリキ去ルニ及ヒ左右ヲ顧ミ今日ノ料理モ小十郎ノ仕業カト云云（小十郎奥州邊土ノ地、一朝凶歉ニ逢着スレハ此ノ如シト、軍役輕減ヲ謎ニセシモノト云云、其奇才神ノ如シ）

一景綱所持ノ鎗ノ鞘ハ臘虎ノ皮ニテ包ミ宛モ刷毛ニ象レリ、見ル人其故ヲ問フ、景綱答ヘテ云フ、天下一撫ノ鎗ト云フ之レナリ、天下ノ混乱ヲ此鎗鞘ニテ一掃キニスヘシ、正味ハ容易ニ使用セズト、氣焔萬丈開クモノ呆然トシテ去リシト云云（景綱ノ事績ハ能ク短編ノ盡スヘキニ非ス、故ニ仙台志料、仙台士鑑、景綱其他ノ諸錄ニ讓リテ茲ニハ百千ノ一ヲ擧ケシノミ）

一夫人矢内氏、寛永四年四月廿六日卒、法名藏六院殿賢室長養大姉、享年六十三歳

重綱

左門　彌左衛門　伊豆　小十郎　備中守

景綱嫡男、母矢内和泉重定女

妻、針生小太郎盛次女、夭折（子女無シ）

後妻、眞田左右衛門佐源幸村女

天正十二年甲申十二月二十五日誕生

幕紋小旗紋、父景綱ト同樣、馬印三階星鳥毛、時代自正親町天皇御宇、至後陽成天皇、女帝後光明院天皇、新院御宇萬治二年己亥迄、（女帝ハ明正天皇、新院ハ後西院天皇）至三千公方豐臣秀吉公、德川源家康公、同秀忠公、同家光公、同家綱公迄、

奉仕伊達政宗侯、同忠宗侯、同綱宗侯三代、而シテ小十郎重綱ノ綱ノ一字ヲ長ニ改ム、之レ將軍家綱公ノ綱ノ字ヲ憚リ避クテ重長ニ改メ稱ス、是レ古時ハ尊上ノ諱ヲ避ケ憚ルハ本邦ノ慣習タリ、故ニ此ノ如クセリト、小十郎重綱モ父ニ劣ラヌ才量、又武雄ノ人タレハ貴族紳縉ノ信賴ヲ得ルコト父ニ異ナラザリキ、故ニ將軍家康公及ヒ諸侯伯、又主君政宗ヨリ御書數通寄セラル、然レトモ繁冗ヲ厭ヒテ茲ニ文書ハ省ケリ、又重長風流ヲ好メリ、澤庵和上ト竹馬ノ交リヲナス、贈答ノ歌詩數多アリ、今其一二ヲ左ニ掲グ

をのつから心のおくの山すみてかゝるくもなくすめる月哉

右什ハ重長舊里信夫ヨリ澤庵和上ニ贈リシモノト云フ

澤庵返し二首

見ぬ人に心はかりの契りにてうき世忍ふの里の名もうし

又

末地惜む心の雲のたへまよりまゝての月のかけそさやけき　（以上歌別山代々記）

重綱八歳即チ天正十九年正月主君政宗上洛ノ時父景綱ニ從ヒ供奉、伏見ニ抵リ官邸ヲ賜ハリテ居住ス（景綱ノ諸見合ハスヘシ）在邸中文學、武術等ヲ研鑽シ大ニ得ル所アリキ、慶長四年天下ノ形勢一變スルヤ、諸武士東西ニ分裂ノ兆萌芽ス、諸侯伯賀ヲ大阪及ヒ京師ニ止メ各國ニ就ク、主君政宗モ亦國ニ就ク、家士從テ奥州ニ歸ル、慶長五年七月二十四日上杉家ノ南關ト稱シテ彼レ天下ノ兵ヲ控制スベキ要害刈田郡白石城ヲ攻撃ノ時、父景綱ニ從軍セムコトヲ請フ、未タ弱輩タルヲ以テ允サレズ、重綱ノ從士澁谷助六、大河内大炊、石田八兵衛等ト密カニ議リ、父陣營一本木ノ背後ニ潛ミ開戰ヲ待ツ、宛モ日沒ノ比父景綱手兵ヲ率キ城西ヨリ二廓ニ逼ル、左門時來レリトシ澁谷以下ヲ將キ、突喊城樓下ノ塀墻ヲ攀チ登リ牙營ニ侵入シ、敵ヲ包擊シ數十ヲ殪ス、父ノ將ユル一隊モ既ニ牙營ニ乱入突擊ス、敵兵披靡血路ヲ突テ遁走ス、此ノ戰ヒニ敵首ヲ獲ル七百餘級ト云フ、左門ノ部下石田八兵衛、大河内大炊弩ニ中リテ死ス、其他負傷スト雖モ城遂ニ陷ル、之レ左門初陣ノ戰功タリ

翌二十五日城將、登坂兄弟以下ノ殘兵抗セムモ力盡キ石川昭光ニ依ツテ降ルヲ請フ、主公當城占領ハ片倉父子拔群ノ勳功タルヲ以テ命シテ白石城代トナス、此時主公景綱ヲ備中守ニ、左門ヲ小十郎ト稱スヘシトノ書ヲ賜ハリ、爾後白石城主トナルヤ小十郎ヲ以テ通稱トナスコトヲ特ニ命セラル、同年十月白石城ヲ拜領ス、領邑ハ刈田郡一圓トノ書ヲ賜ハレリ

是ニ於テ小十郎重綱當城ヲ守備ス、是ヨリ上杉氏南下ノ途絶ツ

同八年二月八日父景綱當城ニ入ル（以上白石藩家記、仙台志料大意）

慶長十九年十二月攝州大阪ノ役興ル、主君政宗東奥ノ驍騰二萬ヲ將キテ參陣ス、例ニ依ツテ白石城ニ一泊セリ、適々景綱病ニ臥ス、故ニ嫡子小十郎重綱ニ先駈ヲ命セラレム事ヲ請フテ許サル、深更ニ至ル迄主公病床ニ在ル備中ト密議ス、小十郎館伴タリ、享膳ノ中父備中云フ、小十郎ニ家旗ヲ與フ、此ノ旗ハ吾レ携ヘテ百戰奮鬪一度ノ不覺ヲ採ラス、シテ君家ノ今日在ルヲ致セリ（家旗一ニ馬印黑擂鐘紋付ト云云）況ヤ大阪役ハ天下爭森ノ難戰タリ汝主家ノ爲メ此ノ旗ヲ空タ棄ツルコトナク、功ヲ樹テヽ累代ノ恩ニ報ユヘシトテ嘘喝シテ拉キ、且ツ云フ、此ノ役ハ必ス和スヘシ、而シテ來年再ヒ兵起リ決戰ニ至ルヘシ、萬般其心シテ處理スヘシト云云、此ノ役果シテ和成レリ

一說ニ大阪役起リ、慶長十九年十月七日陣鐲白石城ニ到來ス、小十郎重綱即日馬ニ跨リ仙台城ニ至リ主公政宗ニ謁セムトス、公適々正寢ヲ立テ奥ニ入ラムトス、重綱尾シテ廊下ニ及ヒ拜伏シ、大阪ニ事起レリ、仰キ願ハクハ先鋒ヲ賜ハラムト請フ、公引戻シ正寢ニ座シ重綱ノ請フ所ニ感動止ミ難キ体ニテ重綱ヲ引寄セ其頰ニ喰ヒ付キ、其方ニ先陣ヲ爲サシメズシテ誰ニカ爲サシメムト謂ツテ落涙シ給ヒシト、此約束ヲ吉例トシテ伊達家正月三日ノ御能始メノ御先打ハ片倉家ヲシテ之レガ任ニ當ラシム、又二月初卯ノ日御鎧飾餅振舞ニハ片倉家主ヲシテ獨リ相伴タラシムルノ例ナリキ（以上片倉家古記、仙台志料、仙台士藝參取）

小十郎重綱大阪出陣ニハ黑絲縅ノ鎧ニ黑毛ノ鍪ヲ冠リ、朱ノ半月ヲ立物トナシ、大圓圍ハ擂鐘ノ旗、小圓圍ハ三階黑鳥毛、但シ圓圍奉行ハ藤田藤右衛門、大龜玄蕃之レナリ、馬上六十騎皆愛宕大權現ノ金札ヲ前立物トシ、各々家紋ノ指小旗ヲ挿シタリ、歩小性百人朱ノ尖リ笠ヲ冠リ、白布ノ單羽折ヲ着、黑鳥毛、朱柄ノ鎗ヲ携フ、背布ニハ愛宕大權現守護ノ所ト墨書シ、惣地ニ心經觀音經ヲ細書セリ、鐵砲三百挺、不斷足輕（常備兵ノ如キ隊士ヲ云フト）

之レヲ携帯ス、足輕ハ紺地ニ白九曜紋ノ羽折ヲ着シ黒品革（もみ革ニなめし革ト云フ）ノ指物ヲ負フ、紺野藏人、小片丹波、大和田伊豫、佐藤治郎右左衛門ノ四人武頭タリ、弓百張裝飾鐵砲ニ同シ、山村六右、佐藤大學武頭タリ、鎗二百本裝飾同シ、蒲倉仁兵外一氏武頭ニテ総勢一千人餘（出陣名簿別ニアリ）主公政宗ノ先鉾ヲ打テ白石城ヲ出陣ス、父備中景綱病ヲ努メ三ノ廓ニ出デ首途ヲ祝ス、一軍井然猛威傍ラヲ拂フテ西上ス、主公政宗ノ本陣之レニ次ク、其勢壹萬五千餘ト註セラル、行裝異彩ヲ放ツテ肅々西上ス（行裝ノ樣姿ハ繪ヲ眼フテ者ク）

片倉家馬士ノ供奉ハ松岡權四　澁谷助六（二代目）川田惣兵　澁谷半七　紺野杢　本澤彌太
平塚文治　澁谷將監　丹野源四　黒澤佐藤右　大龜九郎　武田九郎右　石川源兵　制野彦
右　橋元九衛　片平喜内　永谷大炊　大和田半六　梅津勘十　山田才衛　須田彌平　大河
内源六　御不斷鐵砲衆佐野甚内　關谷新左　御足輕鐵砲衆紺野藏人　小片丹　弓ノ衆　鎗
ノ衆ノ武頭小頭等氏名省畧ス　諸道具組頭小田原彌次左　大河内七郎左　石川太郎右　片
平與左　高橋彌平　末永右馬　御歩行衆黒澤藤内　内馬場孫右　片平彌三　村上彦八　猪
狩與市　前野作右　友部三平　佐藤谷七　今泉治郎　佐藤彌作　松木半左　鈴木覺助　遠
藤彦右　猪狩源七　湯村彦太　今村喜兵　制野加右　白地才治　山村源藏　澁谷清藏　金
谷久左　佐藤長吉　菅野九右　小關助四　武田治左　菅野半助　山田清九　御不斷衆鐵砲
鎗組佐藤九右　綱島喜右　同三七　小室彦七　中村正三　渡部作内　今泉作内　村上滿九
西山小平　鈴木與七　羽賀甚右　小室彌市　木生助九　安曇久藏　川井七右　氏家惣九
鈴木新次　石田左平　水戸清三　阿部又兵　關甚助　小林源藏　關谷藤五　小室善次　達
崎五左　都木喜一　齋藤傳八　佐久間惣助　佐藤久助　西山半内　高橋藤七　半澤彌右

村上市兵　森次右　菅野源兵　高橋與藏　齋藤三右　高橋又六　近藤彌四　佐藤彌一　半
澤右馬　大原彦藏　吉田善六　小室久作　大内甚六　齋藤彦七　大沼助之　吉見清八　横
山助右　横山與六　吉田加兵　半澤彌一　横山五右　大平善助　齋藤與一　菅野清左　今
崎喜作　樋澤清七　加藤助四　御持筒役湯村彦太　佐藤彌作　金谷久左　御鞍役鈴木覺助
小見平次　御持鎗役支部三平　佐藤長吉　御挾箱御懸硯役黒澤藤内　小見平助　黒澤半藏
御夜具籠役片平彌三　鈴木惣八　白地才治　御簑箱菅野半助　御笠澁谷清藏　御舞物制野
加左　御武具横山左七　前野作右　今村喜兵　御夫人役内高場孫左　小關助五　近藤彦右
御荷物奉行齋藤吉右　大柳助左　山家八郎左　小室惣左　高橋彌二右　目黒大學　御供衆
鈴木惣八　黒澤半藏　小平茂助　大塚三吉　小平金七　阿部甚十　中村覺右　渡部市右
松崎九兵　村上藤八　金子甚四　氏家五郎　御小人久助以下二十五人　御六尺與一以下六
名　御大所（御台所ナルヘシ、炊事場ノ事）人足彦六以下十八名及ビ手前人足（武頭衆ノ小者カ）又
次郎以下四十六名　是等ハ氏号ナシ、右御供人足共百五十七人、以上ハ大阪役德川將軍家
ニ於テ武功ノ有無尋問ノ時、書載シテ上覽ニ供セシ氏名トス、就中武功ノ狀況ヲ巨細ニ人
別毎ニ書載シ以テ特ニ上覽ニ供セシ氏名左ノ如シ

小室惣左　佐野甚内　大内清右　遊佐五兵　目黒與五　新田新九　金谷六左　岩淵介右
石川源兵　制野安兵　渡部又左　高橋藤左　齋藤平七　長野檢斷金左　須田作太　達崎吉
右　山田平藏　佐藤六右　八島清右　平塚久治　黒澤吉右　佐藤九左　鈴木仁右　同惣左
高橋傳八　同道二　武田九郎左　小原田善吉　本町阿子ヶ島彦忠　丹野源八　黒澤善兵
澁谷武左　村上傳平　内高場甚五兵　大内勘兵　制野加左　本郷七右　小關又右　石川太

郎兵　大河内仲左　佐藤治郎左　橋本九左　前野作右　片倉三右　山岸新右　片平八太
氏家六之　湯村七郎右　渡部甚太　丹野味兵　佐藤孫八　石田八兵　加藤孫市　澁谷小右
本澤平右　川原子幸太　菅野彌六　山村清兵　菅野久内　渡部市左　佐藤正之助　前澤次
兵　佐藤十治　紺野彦十　玉井覺左　高橋柳太　今村半之　大和田一郎左　横山次郎兵
關谷新左　鈴木十三　澁谷兵左　今泉傳左　猪狩權七　以上ハ拔群武功ノ者トシテ將軍家
ノ軍記ニ登錄セル所ト云フ（右新田善行所藏本ニ據ル）
是ヨリ先キ小十郎重綱西上ノ途ニ上ルヤ、白石城留主ノ家士ハ各立付ケヲ穿チ武器ヲ佩キ
下士ハ股引ヲ穿チ、領内新館（新舘ト云フ小阪路ヲナス道アリ）ト入ヲ森ノ間迄見送レリ、參軍ノ
武人ハ當時流行節「しのたけ」ト云フニ倣ヒ、意氣揚々肉躍リ血湧クノ勢ヲ以テ左ノ俗謠
ヲ高聲ニ謠ヒツヽ進行ス（左ノ俚謠中ニ有ル勝田ト云フ地名ハ河内國ニテ片倉陣營ヲ布キ
シ附近ノ小丘ニテ一ニ片山ト云フ所ナリトモ云フト如何ニヤ）

敵は大阪、味方は勝田、名を新舘に、押あげろ

其聲谿谷山野ニ響キ岩石モ碎クルノ狀勢ナリキ、領民ノ軍裝ヲ見ル初メテノ者ハ呆然トシ
テ且ツ悅ヒ勇ムアリ、且ツ感涙ヲ流スアリテ今尙談柄トシテ殘レリ（以上片倉家記仙台士鑑參錄）
片倉小十郎重綱先陣打テ東海道ヲ西上ス、伊達政宗侯ノ本陣凡テ壹萬八千餘人、凛然トシ
テ行列數里ニ聯續絡繹タリ、其ノ勇氣ヤ山岳ヲ崩シ、其ノ猛武ヤ雷霆ヲモ搏チ散スルガ如
カリキ、奥羽武士ノ骨法宛モ鯨波ノ衆魚ヲ併呑スルニ似タリ、十一月五日江州大津ニ着陣
ス、是ニ於テ軍隊ヲ部署シ更ニ進行ス、重綱令シテ長柄ノ鞘ヲ拂ヒ白身ヲ露ハシテ携ヘシム
此ノ体ヲ見テ越後少將忠輝ノ臣、村上周防ナルモノ笑ツテ云フ、未タ敵ニモ會ハスニ長柄

ノ鞘ヲ拂ヒシトハ云云、周防ノ同僚花井主水曰フ、否ラス遙カ奥州ヨリ參軍シ功ヲ必至ニ
懸ケテ顯ハサムトス誓ツテ其覺悟ナカルヘカラス、果シテ此ノ役小十郎重綱ノ勳功群拔ニ
シテ名譽ヲ世ニ揚ケタリ、同月十一日大阪ニ入リ布陣ス、同十二月二十一日和成リ、退陣
ヲ命セラレテ江戸邸ニ引揚ク、是レヲ大阪冬御陣ト云フ（因ニ記ス、和成ルヤ小十郎重綱
急使ヲ馳セテ白石城ニ病ヲ養ヘル父備中守景綱ニ事態ノ詳細ヲ報シ、且ツ此ノ役ノ和スヘ
キ慶吉ヲ感謝セシメタリ）（仙台志料、同士鑑、別山代々記、大阪陣供奉輯等大意參取）
慶長二十年三月二十四日再ヒ大阪役興リ參軍ノ陣觸レアリ、小十郎重綱先例ノ如ク先陣ヲ
命セラレタリ、翌四月九日江戸邸ヲ發程、同月二十日京都ニ入ル、重綱京都滯陣中愛宕神
社ニ一夜參籠、祈ツテ云フ、神明願意ヲ享受シ賜ヒテ利運ヲ與ヘヨ、若シ否ラサレハ忽チ
死ヲ賜ヘト、而シテ愈々同年五月五日命ヲ奉シテ河州道明寺口ニ布陣ス、陣場割付アリ其
地形前方ニ丘阜聳ヘテ進退自在ナラス、重綱從士ニ命シテ凡ソ二町許リ退キテ布陣シ、丘
阜ト陣營ノ中間ニ空閑ノ地ヲ取リ、而シテ丘阜ノ背後叢樹ノ間ニ伏兵ヲ置キ、敵ヲシテ丘
阜ニ登ラシメ彼活氣ヲ傾斜地ニ占メ開戰ヲ挑ムヤ、吾伏兵丘頂ニ攀チ登リ銃卒ヲシテ瞰射
セシメ、吾陣營ノ兵ハ伏兵ニ應シ挾擊セハ一舉ニ敵ヲ塞殺スヘシト、令シテ敵ヲ待ツ、此
ノ丘阜ヲ片山ト稱スト、此ノ如ク陣營ノ變更ヲ主公ノ本陣ニ通シ允許ヲ得、又隣陣越後少
將忠輝ノ營所ニモ其變更ヲ通シ其ノ諒解ヲ得タリ、翌六日平明大阪ノ猛將後藤又兵衛基次
手兵ヲ率キ來リテ、圖ノ如ク丘阜ニ登リ銃卒ヲシテ重綱ノ陣ヲ銃擊ス、吾伏兵起リ頂上ヨ
リ瞰射セリ、重綱手兵ヲ將キ後藤ノ兵ヲ圍ミ乱擊ス、敵猛狠シテ進退茲ニ谷マル、適々吾
足輕ノ乱發スル所ノ銃丸ニ中リテ後藤基次馬ヨリ落ツ、吾兵蝟集首級ヲ授カラムトス、後

藤重傷終ニ斃ル、薄田隼人佐兼相來リ援ケテ後藤ノ遺骸ヲ収メテ去リ、明石掃部守重（守重一ニ全登ニ作ル、大阪ノ客將元ト浮田氏ノ臣ダリ）又來リ援ク、茲ヲ以テ敵ノ勇氣大ニ振フ、重綱切齒扼腕奮鬪シテ自ラ敵三人ヲ殪シ、其首ヲ献シテ從士ニ携ヘシメ主公ノ實驗ニ供フ、敵復一人來リテ重綱ト搏鬪ス、彼ノ力ヤ増レリ、重綱組敷カレテ殆ト危シ、從士來リ敵ノ兩手ヲ捩リ云フ、此ノ功ヤ五貫文ニ價ヒス、諾ニヤ、否ラサレハ吾敢テ手ヲ放ツノミト、重綱諾ス、從士是ニ於テ敵ノ首ヲ献シ五貫文ノ證左ヲ受ク、此當時奥州ノ五貫文ハ五十石ニ相當ス、後チ人其功賞ノ五十石ハ薄キニ失スルヲ評ス、重綱云フ、其ノ時彼レ主公肯ゼサレハ余敢テ手ヲ放ツノミト云ヘリシヲ憎ム、故ニ薄賜ナリト哄笑セリ云云、其ノ子孫白石藩ニ今ニ存スト、此ノ若戰ニ重綱家寶大原眞守ノ刀及損シテ鋸齒ノ如シ、亦猩々緋ノ陣羽折壞裂シテ用ヲ失ヘリト、凱旋ノ時父景綱兵ニ將タルモノ自身敵ト若鬪シテ命ヲ危フスルガ如キハ將器ニ非ストテ痛ク警告セラレシト云フ、此レヨリ先キ後藤ノ首級ハ從士金馬平左衛門ナルモノ主命ニ依ッテ泥田ノ底ニ隱シアリシヲ吾從卒探シ出シテ之レヲ本陣ニ献ス政宗公後藤ノ武勇ヲ賞シテ久シカリシト

河内志云フ　安宿郡古蹟ノ部ニ慶長戰場在二圓明寺、玉手、片山藤村之間一、慶長乙卯五月六日、後藤基次、薄田兼相、率レ兵出戰仙臺之家臣片倉小十郎擊破レ之、獲二基次、兼相等首一、奥田忠一、下野道三、及岡本、神子田、阿波、井上等、戰二死于此一云云

因ニ記ス、奥田忠一ノ墓ハ在二片山村一、伊豆守山口重政ノ墓ハ在二若江村一、但馬守弘藤建レ碑云云、長門守木村重成之墓、在二西郡村一、重成行年二十五、慶長二十年五月六日討死、同州丹南郡奥田戰場（在二羽曳野、木爪山間一）慶長乙卯年大阪之役、奥田幸村躬率二精兵一整々奮擊、衆軍披靡即此、而シテ越前忠直ノ兵奥田勢ト激鬪、銃丸ヲ注クコト雨ノ如シ、終ニ幸村ヲ斃ス、越前ノ家士西尾某幸村ノ首ヲ獲實驗ニ供ス、是ヨリ先キ幸村ノ嫡男大助ハ父ノ命ニ依ッテ城中ニ歸リ秀頼ニ殉セリト

澁谷右馬允ハ初メ江戸ヨリ白石ニ急行シ、兵ヲ徵シテ大阪ノ補充トシテ馳セ登リ漸ク戰ヒニ會フ、適々薄田兼相ヲ殪シ重綱ノ激賞ヲ受ク、此人白石ニ急下シ兵ヲ徵シテ西上セムトス、妻ノ父藤田藤左衛門今日出發ハ凶ナリ、翌日ヲ以テ西上スヘシト云フ、澁谷氏答ヘテ兵ノ御用ハ準備シテ出發スル日コソ吉日ナレ、奚ソ善惡ノ日ヲ選マムヤト、自邸ノ門ヲ過クルモ顧ミスシテ西上ス、其補充兵ヤ五月五日夜大阪ノ吾カ陣營ニ着ス、是ニ於テ吾勢力大ニ振フ、翌六日新手ノ激鬪ニ敵披靡敗色顯ハル、澁谷氏勇氣百倍終ニ薄田兼相ヲ殪シ首ヲ得タリ（河内誌ニ薄田兼相ノ墓、道明寺邊ニ有リト記セリ）

因ニ記ス、仙臺藩祖松平陸奥守左近衛少將四位侍從貞山公、木村長門守重成ト竹馬ノ交リアリ、依ッテ木村重成ノ將キル一隊ト接戰スルコトヲ避ケ、彼レヲシテ大阪城ニ退カシメムトセシニ、片倉小十郎重綱善キ敵將御參ナレト、突喊猛進木村ノ隊ヲ包圍シ屠殺セムトス、重成茲ヲ先途ト激鬪數次、適々同僚石川伊豆、木村重成ト搏ス、重成剛力伊豆ヲ組ミ敷キ首ヲ搔キ取ル所ヘ須藤作兵衛駈ケ付ケ重成ニ組付ク、重成怒ッテ作兵衛ヲ鐙掛ケニ蹴倒ス、作兵ノ大小刀自ラ鞘ヲ脱シテ地ニ委セリ、作兵小刀ヲ拾ヒ起ッテ重成ヲ刺サムトス然ル所ヘ井伊家ノ家臣庵原助右衛門駈ケ來リ、重成ノ右ノ股ヲ切リ落ス、助右ノ從士安藤長三郎重成ノ首ヲ授カリ、井伊ノ本陣ニ走リ行キ掃部頭直孝ノ實驗ニ供フ、作兵間髪ヲ容ルヽノ際ニ大功ヲ奪ハレタリトテ地ヲ踏ムデ惜イ事シテケリト嘆息セリ

又記ス、井伊家ノ臣庵原助右ハ元ト武田家ノ遺臣ナリ、須藤作兵ハ津田民部景康ノ家臣吾部下ナリキ、而シテ貞山公政宗自ラ重成ノ像ヲ画キ之レニ讃辭ヲ作レリ、一讀重成ト片倉二將ノ闘況ヲ知ルヘシ、今宇和島藩庫ニ存スト

仙臺志料云フ、慶長二十年五月五日、重綱自二奈良一進、陣二道明寺口一、奥山出羽、津田民部、指二示營所一、重綱曰、旁有二丘阜一、宜レ退二二町一、衆曰、戰有レ進而無レ退、重綱曰、前二山坂一、而陣、非二兵法一也、進二于可一レ進、退二于可一レ退、此爲二良將一、若敵陣二丘上一、萬砲下射、坐取二覆敗一、前設二戰地一、付二丘阜敵人一、置二伏兵丘上一、則必勝、諸老兵皆然レ之、乃分レ兵、爲レ二、伏二銃手二百、弓手五十、鎗手百人丘上一、騎兵及銃手百、弓五十、鎗兵一百、距レ丘、二町而陣、本夜重綱、巡二視陣中一、戒二糧食一、以待、敵將後藤基次、率二赤隊一、進至二丘下一、吾伏兵急起、發レ砲、基次不二以爲一レ意一、進至二牢腹一、重綱乘レ機進擊、少退、薄田兼相助レ戰、基次反戰、諸兵死鬪、屢退二敵兵嶮田口一、山村六右常誓三殉二死景綱一、此役以二景綱病篤一、請レ免、不レ可、及レ此、率二其隊一、殿戰死レ之、後藤、薄田二將已死、眞田幸村繼出、奥山出羽立レ備拒レ之、重綱擊二其横一、幸村奮鬪、道明寺口諸將、皆爲二重綱一所二薄擊一、酣戰至レ暮、進二陣嶮田市外一、前二流水一、布レ陣、七日曉進レ兵、陣二茶臼山、天王寺中間一、先鋒合レ鋒一再、敵已露二敗色一、此日城陷云云

叙上ノ記事ニテ片倉重綱ノ大阪戰況ハ瞭察スルニ足ルヘシ、又敵味方ノ中ト雖モ眞田幸村ガ片倉重綱ノ武士道ニ規範アルヲ欣望シ、愛子ヲ托シテ祖祀ヲ永刼ニ存セシメシヲ以テ重綱ノ人ト爲リヲ併セ察スヘシ、故ニ重綱ノ家士ニ於テハ數十萬ノ武人中ニ奇偉靈妙ノ功績ヲ竹帛ニ垂レシモノ少カラス、今其ノ二三ヲ擧クレハ、蒲倉仁兵衛ハ道明寺口ノ激戰ニ一番首ヲ献ス、少間アリテ歩士ノ某又敵首ヲ携ヘ來リ献ス、仁兵聞フ、吾レハ馬上、足下ハ歩士ナリ、必ス敵首ヲ獲ルヿ吾レヨリ早カリシナルヘシ、宜ク足下一番首トスヘシト、歩士答ヘテ曰ク、馬上モ歩士モ論スルニ足ラス、唯早ク献セシモノコソ一番首ナレトテ決セズ、時ニ眞山正兵衛首實驗ノ帳付役タリ、主公政宗顧ミテ正兵衛早ク決セヨト云ヘリ、是ニ於テ正兵筆ヲ執リ、馬上一番首某、歩士一番首某ト帳ニ記セリ、政宗侯莞爾トシテ笑ツテ之レヲ許諾セリ、其ノ禮讓ニ厚キコト世ノ龜鑑タリ、而シテ此ノ仁兵重綱ノ命ニ依ツテ五月六日ノ深更大阪城中ノ動靜ヲ偵ハントシ、從士二人ヲ率キテ往ク、闇夜ニシテ咫尺ヲ辨セス、城中ヨリ匐匍シテ擅木橋ヲ來ルモノアリ、仁兵モ同ク匐匍シテ其ノ橋ヲ城中ニ入ラムトシ、中途ニシテ互ニ額ヲ打チ合ハス、仁兵直ニ某ヲ組ミ合セテ誰何ス、某曰フ、淺野長晟（紀州ノ國主長政ノ二男ナリ）ノ家來向井久太夫ナリ、今城内ノ擧止ヲ窺ヒテ歸ル所ト答フ、仁兵然ラハ證無カルベカラズト、即チ久太夫一指ヲ截ツテ證ニ出ス、仁兵即チ久太夫ヲ拉シテ本陣ニ到リ政宗侯ニ情實ヲ言上ス、政宗侯按問シ不審ナシトテ久太ニ賞ヲ與ヘテ放チ還ヘセリ、是レ又陣中仁兵ノ持重厚キヲ賞讃セリ

又重綱ノ家士鵜飼藤藏大阪ノ役ニ敵ノ一將ト鎗ヲ合ハス、十數合ニシテ決セス、相云ツテ少時休憩シテ亦鎗ヲ合ハスコト初メノ如シ、而シテ復決セス、依ツテ互ニ議シテ一ト先ツ「武別」シ他日又相見エムト云ヒ、禮ヲ盡シテ別ル、凡ソ夫レヨリ二十年ヲ經テ突如一武夫白石城ニ來リ、門衛ニ云フ、吾レハ當城内鵜飼藤藏ナル人ニ面會セムコトヲ切望ス、未タ健在ナルカ否ヤト、門衛ノ士鵜飼氏幸ヒ健在ニシテ今日モ城上ニ出仕スト答フ、某武夫欣然トシテ面會ヲ懇請ス、即チ荆識ノ禮ヲ述ベ武夫云フ、某ガ父大阪夏ノ役ニ貴下ト鎗ヲ合

スルコト再度、然ルニ勝負決セズシテ「武別」シ、他日ヲ期セシモ某父ハ既ニ物故シテ今世ニ在ラス、終焉ノ言ニ奥州片倉家ノ鵜飼藤藏ナル人ノ如キ實ニ武道ノ達人、吾レ死後汝一度相見エテ大阪役ニ鎗ヲ合セシモ決セズシテ「武別」セシヨリ十數年ニ及フ、吾レ既ニ病魔ニ襲ハレテ起ツコト能ハズ、宜ク鵜飼氏ヲシテ軍功ノ賞ニ與ラシムヘシト云ヒ終ツテ瞑セリ、僕不肖ト雖モ亡父ニ代ツテ相見エ其遺言ヲ陳述シ以テ貴下當時ノ勳功ヲ永刼ニ傳ヘムトシテ始テ芝眉ヲ瞻ルヲ得タリ、鵜飼氏答ヘラク其事些ナリトテ敢ヘテ明ラス其無慾世ノ龜鑑タリ、片倉重綱其事ヲ聽キ双方ニ謁ヲ賜ヒ感狀ヲ各々ニ附與セシト、藤藏ノ對手親子ノ信義ヲ重ンズル眞ニ古聖賢ノ行爲ニ劣ラサルナリ、唯惜イ哉對手親子ノ氏名ヲ遺忘シテ傳ハラザルコト千秋ノ遺憾トス、仄聞スルニ某武夫重綱ノ感狀ヲ證トシテ某大藩ニ召サレテ仕事スト、此ノ事一ノ談柄トシテ今ニ古老ノ間ニ存ス、大阪夏ノ役與ル、重綱ノ家士澁谷右馬允江戸邸ヲ發シ、奥州白石城ニ到リ兵ヲ徵シ西上セムトス、右馬允ノ舅藤田藤左衛門、右馬允ヲ諫メテ云フ、明九日ハ大悪日ナリ、殊ニ月ノ九日ニテ凶日タレハ出陣ニ用フルコト兵家ノ戒ムヘキ日ナリ、宜ク其後ヲ以テ發程セヨト、右馬允物然トシテ云フ、戰場ニ向フ奚ゾ日ヲ選ムノ迂ヲ演セム、一タヒ機ヲ逸シテ事ニ及ハサレハ其レ武士タルモノヽ道立ツヘカラズ、主命ニ應シ御用ニ差當ルコソ忠義ノ最功トスヘシ、即チ其ノ發向スル日コソ大佳日ナレト、直ニ馬ニ鞭當テ逸散ニ西上ス、右馬允ノ妻子道ニ奉迎シテ一二日ノ滯留ヲ請ヒ、而シテ佳日ヲ選ミ出陣ヲ祝セムトセシモ、右馬允妻子ノ方ヲ見向キモセスシテ急行スルコト電光ノ如シ、重綱之レヲ聽キ澁谷右馬允ヲシテ夏ノ役先登第一ト賞詞ヲ賜ヒシト、又道明寺口ノ奮戰激鬪ニ敵ノ名將薄田兼相ヲ擊ツテ之レヲ殪セシ等ノ功大ナルヲ以テ凱旋ノ時、領内鷹巣村ヲ以テ增賞ス、右馬允固辭シテ云フ、某武士トシテ唯爲スヘキ事ヲ爲セシノミ、何ゾ厚賞ヲ貪ラムヤト云ヒテ終ニ受ケザリキ、人皆其ノ淡泊ニシテ誠忠ナルニ感セリト、又同役重綱ノ家士紺野藏人一武頭タリ、自ラ鎗ヲ揮ツテ敵ヲ突キ伏セ首ヲ揚ゲテ之レヲ從者ニ持タセ重綱ノ實驗ニ供フ、實ニ當日ノ一番首ナリ、而シテ藏人自ラハ他ノ敵ト激鬪甚タ多端ニ奔走ス、重綱是ノ首ヲ主侯政宗ニ献シ實驗ニ供フ、政宗侯左右ニ謂ツテ曰ク、藏人敵首ヲ獲ルモ自ラ實驗ニ供シテ誇ラムトナスニ非ズ、己レガ武頭ノ任務ヲ全フセムトシテ奔走スト聞ク、凡ソ士ノ戰ヒニ臨ム各任務アリ、藏人ノ如キ其ノ任ヲ知ル人ト云フヘシ、各々之レニ鑑ムヘシト大ニ激賞セシト云フ、又同役ニ重綱ノ家士ニ加藤孫助ナルモノアリ、敵ノ銃丸ニ中ル、之レヲ驗スレハ丸肩ニ透留セリ、重綱云フ、後トニテ丸ヲ拔クヘシト、孫助主ノ命ノ如クシ創ヲ裹ムデ復戰ヒ敵ヲ擊退セリ、又片倉家累代ノ家臣ニ佐藤治郎右衛門、同大學トテ兄弟アリ、先代景綱ニ從ヒ毎戰功ヲ顯ハス、就中須賀川合戰、大阪役ノ功最モ大ナリ、曾テ白石城攻擊ノ時小原郷（刈田郡ニアリ）ノ人民ヲ諭シテ主君ニ降ラシメ、糧食、馬秣等ヲ搬送セシメテ其ノ欠ヲ補ハシメシ功アリ、又大守政宗侯文祿ノ難問ニ招致セラレテ伏見ニ赴クトキ、佐藤兄弟策ヲ献シテ大守一行ノ旅裝ヲ最モ盛況ニ飾ラシム、是レ伊達氏ニ異圖ナキ爲メ平凡ヲ裝フニアルヲ示スガ爲メナリ、果シテ長途中伊達氏問罪ヲ以テ幽潛的ノ行裝タルヲ悟ラザラシメタリ、其ノ伏見ニ到リ豐公ノ詰問ヲ受クルヤ、一々政宗侯ノ辨疏明瞭シ、豐公ノ疑ヒ霧解ケシト雖モ唯政宗侯家督ヲ長子秀宗侯ニ讓リ、聚樂邸ニ退隱ヲ命セラレシノミニシテ、家名ハ依然トシテ存セリ、此等難事ニ關シ佐藤兄弟ノ功少カラズトシテ特ニ祿シ、且ツ領國中ノ傳馬頭ヲ許允シテ後昆

ニ餘慶ヲ垂レシメタリ、今ニ其ノ家孫白石ニ現存スト云フ、又大阪ノ役重綱ノ家士大内八右衛門驍勇ヲ以テ名アリ、適々病ニ罹リ從軍スルコト能ハズ、小十郎重綱ノ白石城ヲ出陣スルヤ、首途ノ吉方ナリトシテ大内八右ノ宅ニ入リ一泊シテ出陣セントス、八右病ヲ努メ饗スルニ酒肴ヲ以テス、肴ニハ勝栗（勝栗ハ乾栗ニ作ル）大豆、昆布、堅魚等トス、重綱大ニ悅ヒ出發ニ臨ミ白銀參枚ヲ賜フテ謝ス、且ツ八右ニ云フ、汝ガ武具、馬具一切ハ既ニ大阪ニ向ケテ搬出セリ、病氣全快次第參陣スヘシ、必ズヤ待タント云云、八右感激ニ堪エズ流涕雨ノ如カリシト（以上、別山代々記、伊達舊臣傳記、仙台志料、常山紀談、仙台士鑑、大阪陣供奉帳、同首帳等參錄ス）

慶長三年八月十八日豐太閤薨スルヤ、小十郎景綱豫シメ天下乱ルカヲ測リ大ニ兵備ヲ整フ領内ニ令シテ曰ハク、步士ト雖モ各々騎馬ヲ飼養シ騎術ヲ鍊磨スヘシ、萬一其費途ヲ辨スルコト能ハザルモノハ必ス鐵砲、鎗、刀ヲ用意シ閑暇ノ際武術ヲ鍛鍊セヨ、又百姓、町人ト雖モ馬ヲ飼養シテ馭術ヲ修得セル者ハ騎士同然ノ待遇ヲ與フナリ、若シ背クモノハ嚴法ニ處ス云云、故ニ後チ大阪ノ役ニ小十郎重綱ノ家士ハ馬上ニ銃ヲ放ツテ能ク命中セリ、步士ハ鎗ヲ揮ツテ敵ヲ突ク皆功アリキ

仙台士鑑云フ、慶長二十年五月大阪役復起ル、世ニ之レヲ夏御陣ト云フ、伊達家ノ諸將片倉重綱等最モ大功アリ、敵ノ名將後藤基次、薄田兼相ハ片倉氏ノ手ニ殪セリ、明石掃部介全登（一ニ守重元ト浮田ノ家臣）ヲ斬リ殆ント木村長門守重成ヲ得ントス、凡ソ獲ル所ノ首六百餘級（一ノ舊記ニハ片倉氏ニ於テ得タル鎧首百十三級トアリ、而シテ家士ノ討死スルモノ十七人トアリ、本文六百餘級ハ伊達家ニ於テ獲タル首級ノ總數ナル（シ）伊達家ノ優勢四海ニ轟クニ至レリ、是レヲ先代備中景綱小田原參陣如何ノ借問ニ答フ、今ヤ豐太閤ノ大軍ヲ敵トナス、譬ヘハ夏ノ蒼蠅ニ於ケルガ如シ、掃ヘドモ來リ復掃ヘドモ來ルニ同シ、時到ラサレハ絶エズノ諫言ニ主公政宗感得シテ參陣セリ、而シテ秀頼ニ至リテ其ノ家亡ブ、是レ時到レリト云フベシ、父景綱小田原參陣諫言ノ賞茲ニ至ツテ驗アリキ、其子重綱大阪役ニ群拔ノ功アリ、世ニ鬼小十郎ト稱シテ畏敬ス云云

因ニ記ス、大阪落城前五月五日ノ深夜小十郎重綱ノ陣所ヲ訪ル二人ノ使者アリ、重綱延見來意ヲ問フ、答ヘテ云ハク、吾輩ハ眞田左衛門佐幸村ノ臣、菅招覺左衛門、永招彌右衛門ト云フ者ナリ、主人幸村數日城上ヨリ關東軍ノ動靜ヲ視察セシニ尊公ノ陣容ノ整備シ、且ツ凛然タルモノ他ニ見ヘス、冀クハ幸村掌上ノ珠トセル大八ト云フ幼兒及娘二人アリ、落城モ近キニアルベシ、幼兒等ノ瓦ト爲リテ碎ケムモ忍ヒス、其萌芽ヲ託シテ遺幹ヲ存セムトスト、小十郎之レヲ諾シ夜中ニ其愛珠ヲ送リ屆ケヨト命シテ遣リ還ス、鷄鳴ノ比與四丁到着ス、小十郎審カリツヽ之レヲ檢スレハ幼兒大八及美女三人在リ、小十郎從士ノ病メルモノヲ本國ニ輸送スト云ヒ觸ラシテ東下セシム、右四人白石城ニ到着スルヤ父備中景綱是レヲ保護ス、内一人ハ武田信玄ノ遺臣穴山小助ノ娘ト云フ、各匕首ヲ懷ニス、其意ヲ問フニ若シ途中、幸村ノ娘害セラル、時ハ穴山ノ娘代リテ及ニ伏ス覺悟ナリキト、其用意殊勝ナリトテ備中夫婦已レノ子女ノ如ク育ミ居レリ、大阪乱平キ小十郎重綱凱旋スルヤ右孤託ノ子女ヲ延見シ、父幸村戰歿ノ顚末ヲ詳カニ語リ傳フ

又眞田喜平太家譜ニ云フ、大阪之戰眞田幸村、付ニ一男、三女於族人、三井備後、家臣西村孫右、吾妻佐渡ニ托ニ片倉重綱一、男幼字大八稱ニ片倉久米介一、後改ニ沖允一、名守信、長ニ于白石城一、給ニ參百石一、寛永十七年、出ニ仕本藩一、食ニ參百石一、寛文參年卒五十九歳、子辰信、

元祿年間、爲ニ公儀使一、正德貳年有レ命曰、不ニ必憚ニ德川氏一、始稱ニ眞田氏一、三女長爲ニ重綱繼室一、生ニ景長一、天和元年十二月八日卒七十八歲、葬ニ白石當信寺一、寺眞田氏所レ建（眞田氏差再建セシナラム）次嫁ニ石川宗雲一次嫁ニ青木次郎右衛門一（以上、仙台藩士ニアリ、菅沼永沼二氏ハ白石ニアリ）

一書ニハ直田幸村其臣菅沼覺左衛門、永沼彌右衛門ヲ使者トシ一人ノ娘ヲ托ス、重綱之ヲ諾ス、深夜與丁貳、重綱ノ陣所ニ到着ス、之レヲ檢スルニ芳紀二八許リ、孰レガ幸村ノ娘ナルカヲ訊問スルニ答ヘズ、二人匕首ヲ懷ニス、事急ナレバ其儘本國ニ送遣セリ（下略）

云云、前後差異アリ、故ニ疑ヲ存シテ他日ノ考ヘニ備フ

元和元年八月九日、薩州太守島津義弘（入道惟新）仙台江戸邸ニ客遊シ、小十郎重綱ニ對シ大阪役ノ戰況ヲ質ス、重綱實戰談ニ暴ヲ徒ス、島津侯大ニ悅ビ長光ノ刀ヲ賜フテ曰ク、之レ故太閤ヨリ賞賜セラレシモノト、重綱辭シテ云フ、斯ル寶刀ハ賤臣ノ受クベキモノニ非ズ、吾主公ニ贈ランコトヲ望ムト云云、依ッテ其ノ刀ヲ終ニ政宗侯ニ呈シテ去レリト、重綱ノ無慾且ヲ分限ヲ守ルコト每事此ノ如シ

元和年間ノ初メカ、主公政宗ノ實母最上老夫人先非後悔ヲ爲シ、政宗ヲ繾綣シ、情緒亂レ自ラ書ヲ重綱ニ寄セ政宗ニ往使ヲ思フテ止マズ、重綱納言公ニ情ヲ具シテ先夫人最上氏ヲ仙台城ニ移寓ス

因ニ記ス、最上夫人往年長子政宗ヲ憎ミ一日西館ニ政宗ヲ饗ス、政宗食傷生命危シ、小十郎景綱、原田左馬介匙ヲ付ケ介抱シ、錦織即休ヲ召シテ診療セシム、即休撥毒圓ヲ投ス忽チ解テ蘇生ス、其ハ夫人ノ侍醫高屋喜菴ヲシテ毒ヲ進ム、故ニ此ノ危險ニ陷リシモ錦織氏ノ靈方是ヲ救フヲ得テ主公平生ニ復セリ、其ノ奸策ハ長子タル政宗ヲ毒殺シ、季弟ヲシテ家督タラシメムト云フニ出ヅ、其證左暴露セシカバ政宗大ニ怒リ季弟ヲ手刃シ、實母ヲ原籍最上家ニ大歸セシメ以テ事無キニ至レリ、既ニシテ最上家滅亡、先夫人數年流浪遂次老耄ニ至リシヲ以テ重綱ニ書ヲ寄セテ政宗侯ノ奉養ヲ望ム、故ニ重綱諫メテ主侯政宗ヲシテ孝順ニ傾カシム、實ハ此ノ事幕府ニ於テモ干渉セシト云フ、政宗侯實母先非後悔ノ情明瞭セシカバ仙台城ニ移居セシメ、却テ厚遇セシト云フ、幕府特使ヲ派シテ其ノ孝養ノ殊ナルヲ褒詞セシト云云、最上夫人名ハ義姫、最上義守ノ女、十六世性山公輝宗ノ嫡室、天正十三年十月八日二本松義繼ノ爲メニ輝宗公暴卒ス、夫人以後寡居、同十八年嫡子政宗ヲ毒殺シ、季弟小次郎ヲシテ家名ヲ繼カシメムトス、其奸惡暴露セシカバ政宗季弟ヲ手刃ス、實ニ同年四月四日ナリ、尋テ實母義姫ヲバ最上ニ大歸セシム、後片倉重綱幕府ノ命ヲ含ミテ主公政宗ニ實母ヲ招還シ、孝養ヲ奉スベキヲ諫言セリ、主公之レヲ允許シ仙台城內ニ移寓シ專ラ存問ヲ絕タザリシト云フ、夫人老耄元和九年七月十七日卒ス、七十六歲、法諡保春院花窓久桑尼、墳寺覺範寺ニ葬ル（以上、仙台志料、仙台諸士錄、其他二三參取）

寬永初年五島壽安、其ノ領民福原（安積郡）十七ケ村水利乏シクシテ田灌用水ニ苦ミ餓死道路ニ橫ハレルコト數次、壽安憫然トシテ曾テ長崎市ニ遊學中、葡牙人ヨリ傳ヘラレシ西洋式機械ヲ以テ山岳ニ隧道ヲ穿チ、谿谷ニハ煉瓦ヲ積疊シテ水路ヲ延亘ニ架設シ以テ水ヲ流通セシメ、灌漑養水ヲシテ充實ナラシメタリ、是レヲ以テ旱魃ノ憂ヒナキニ至レリト、尙ホ餘水ヲ利用シテ郡野ヲ開墾シ田地ヲ作レリ、忽チ五千石餘ノ新田ヲ得ルニ及ヒ、舊田ト併セテ一萬石ニモ至ル、是レヲ以テ收納寬カニシテ壽安益々富裕トナリ、已レカ欲スル所一トシテ成リ調ハサルコトナシ、領民壽安ヲ神トシテ生祠ヲ建テ、歲時是レヲ祭レリ、壽

安元ト天主教徒ニシテ既ニ洗禮ヲ受ケ、彼ノ教徒ヲ募リシモ本邦ノ嚴律ニ制セラレテ長崎ヲ追ハレ、西海中ノ島嶼ニ潛ミ居ルコト數年、後奥州ニ歸リ醫ヲ以テ業トセリ、仙台藩召シテ侍醫ノ列ニ加フ、西洋醫藥ノ方ヲ以テ病ヲ治セシヲ以テ効驗太タ著シ、仍テ福原ヲ增賜セラレテ此レニ移ル、後チ前記ノ疏水工事ニ由ツテ民意ヲ得シカハ、是レニ乘シテ窃カニ天主教徒ヲ募ル、領民之レニ屬スルコト過半ニ至ル、尙ホ餘波隣藩ニ及ブ、仙台藩議シテ是ヲ撲滅シ、以テ國禁ヲ犯セシヲ謝罪セムトス、議片倉小十郎重綱、茂庭良元ヲシテ春安ノ一族並ニ其徒ヲ芟除セシム、兩氏騎士五百ヲ將キ福原ヲ圍ム、春安義ニ之レヲ探知シ秋田領ニ走ル、已ニシテ其ノ免レザルヲ悟リ妻子ヲ及シ而シテ自殺セリ、是ニ於テ奥羽ノ異教徒ヲ一掃シ、國教ニ復シ以テ平穏ニ至レリ

同參年大猷將軍入朝ス、納言公例ニ依ツテ前驅ヲ奉仕參内ノ陪伴ヲ勤メ　天顔ヲ拜ス、此ノ時政宗從三位權中納言ニ進ム、家臣ノ重ナルモノ敘氏叙爵ス（政宗權中納言ニ昇レリ、依テ納言公ト記ス、前後之レニ倣フ）

同九年筑前黑田藩宰、栗山大膳告ニ藩主之有ニ異圖一、納言公、有ニ戒心一、使四重綱上ニ家兵出ニ幾隊一、曰左右徒從百人（註之ヲ書ク、以下之レニ倣フ）馬上六十騎、槍兵百人、不斷隊銃兵百人輕卒銃卒百人、廣淵、大須兩村銃卒百人、輕卒弓手百人、銃卒百人鑓兵千參百五十人、内陪臣三百六十人、役卒二百二十三人、重綱曾閲兵、澁谷六右曰、雖ニ前田氏大兵一、可一敎蹂躪、重綱笑曰、未ニ必如レ斯ニ云云（仙台志料、柳營日記、其他參攷）

同十一年八月、三代將軍家光公ヨリ仙台藩領地確保ノ朱章ヲ賜フ、其文ニ云フ

陸奥國ニテ千貳拾ケ村、常陸國ニテ參拾四ケ村、近江國ニテ拾九ケ村、此高六拾貳萬五千百參拾壹石壹斗八升（目錄如別紙事）如前々全可領知之狀如件

寛永十一年八月四日　　家　光（書判）

仙台中納言殿

右ノ券紙ハ片倉氏柳營ニ登謁シテ拜受シ、仙台藩主ニ券紙拜戴ノ事ヲ言上シ、而シテ本券紙ハ片倉家ニ保管スルヲ例トス、將軍禪代毎其例ノ如クシテ明治維新更始ニ及ヒシト云フ此ノ特例ハ他藩ニ有ルヤ否見聞セサルモ多クハ殊ナル家法トスルナリ

（本券紙末尾ニ油利代片倉云ト添記シテ券紙ヲ片倉氏ニ授受セル理由ハ後ニ註スベシ）　油利代　片倉小十郎エ

同十三年、納言公江戸櫻田邸ニ於テ病ム、四月二十三日病重ル、五月二十二日將軍家光公親ラ臨問シ賜フ、納言公病ヲ努メ病床ヲ下リ服裝ヲ更メ以テ恩ヲ謝ス、將軍慰諭數言、後去ツテ別室ニ入リ片倉重綱、茂庭良元、中島宗信ノ三宰ヲ顧ミテ曰フ、政宗病篤シ實ニ十死ノ一生、恐ラクハ生理無シ蔭子忠宗在リ、豫シメ要意周到ナルモ且ツ六拾餘萬石ノ領内ニ此ノ事ヲ告知シ、遺漏ナカランコトヲ望ム云云トノ仰アリテ還御セラレタリ、衆皆平伏シテ奉送ノ禮儀ヲ盡セリ、玄關ニ於テ將軍、小十郎ト呼ビ聲ヲ潛メテ政宗他界ハ目前ニ迫レリ、汝宜ク懈怠スヘカラサルベシト特ニ注意シテ去リ賜ヘリト、翌々二十四日政宗正寢ニ於テ薨ス、享年七十

因ニ記ス、政宗ノ遺体ハ仙台城南經ヶ峰ニ葬ル、法證瑞巖寺殿貞山利公、廟瑞鳳殿ト云フ牌所ハ松嶋瑞巖寺トス、寛永參年九月六日後水尾天皇京都二條城ニ臨幸マシマセリ、時ニ天皇ノ御諱政仁ト奉稱シ賜フ、依ツテ政宗謹テ政ノ字ヲ憚リ避ケテ正ノ字ニ更メ稱スルコ

トヲ内奏シテ　勅許ヲ得タリ、爾後正宗ト書ス云云ト發表シ以テ諸官衙ノ公認ヲ受ケタリ
是レ本邦古來ノ舊例ト云フ、此ノ時正宗從三位權中納言タリ、其レヨリ凡ソ貳百八拾年ヲ
經テ大正七年十月十九日　今上天皇陛下畏クモ正宗ノ舊勳ヲ追賞シ從二位ヲ贈リ賜フ
同二十一年八月、仙臺藩當主從四位下陸奥守伊達忠宗侯ヨリ片倉重綱ニ領地黒印紙ヲ賜フ
其文義左ノ如シ

苅田郡　本郷、鷹巣村、坂谷村、藏本村、森合村、長袋村、八宮村、小原村、五個村
中貝村、齊川村、越河村、平村、三澤村、大町村、深谷村、宮村
桃生郡　橋淵村、皿貝村、深谷村、廣淵村、赤井村、須江村、右貳拾參ヶ村都合千六
百壹貫參百五拾貳文之所、下行之訖（目錄在別紙）全令領納者也

八月十四日　　忠　宗（黒印）

片倉小十郎殿

右黒印紙ヲ以テ片倉家ノ領地始メテ確保セラレタリ、當時ハ未タ貫文高ヲ以テ公認セシモ
ノトス、按スルニ奥州ニ於ケル當時ノ壹貫文ハ後世石盛田額ノ拾石ニ相當セシト云フ、其
取ケノ方法ハ能ク知ラザルモ約石盛田額平均壹石壹俵（壹俵參斗六升入）ニ當ルト聞ケリ、然
レバ片倉家ノ領地千六百壹貫六百五十二文収公ハ即チ拾倍ノ壹万六千〇拾六俵半餘ノ納米
ヲ得ベシ、但シ此ノ算法ハ確乎タルモノニアラズ、宜ク識者ヲ待ツ、附テ云フ、甲信兩國
ニ於テ武田家領知ノ頃ハ壹貫文ノ田反別凡ソ五六百歩トス、而シテ壹貫文ノ田租四俵（三
斗六升入一俵）ヲ收公セシモノ、如シ、若シ此ノ甲信ノ租法ニ積ルトキハ百石領ノ収公米六
千四百四俵餘ニシテ其差大ナリ、故ニ識者ヲ待ツ

慶安四年辛卯四月二十日、三代將軍德川家光公薨去ス、片倉重綱、主公忠宗侯ニ隨從葬儀
ニ參列セリ、且ツ藩臣ヲ代表シテ賻ヲ供献セリ
同年十月大猷院殿御嫡男家綱公、將軍宣下アラセ賜フヤ、小十郎重綱古式ノ例ニ依ッテ綱
ノ字ヲ憚リ避ケテ重長ト改メ稱ス、一書ニ改名ヲ承應元年正月ノコトトス
同年十二月本藩主陸奥守伊達忠宗侯、片倉家累代ノ勳功ヲ賞シ昇セテ一家ノ列ニ加フ
因ニ記ス、仙臺藩士ニ家格數種アリ、曰ク一門、曰ク一家、曰ク準一家、曰ク一族、曰ク
宿老、曰ク著座、曰ク太刀上等トス、以上ノ格式ヲ以テ勤務ニ輕重アリ、又婚約其他百般
ニ對シテ品位ヲ定ムルヲ大法トスト云云、一書ニハ片倉家一家ニ昇格ハ綱村侯ノ時トス非
ナリ
萬治元年七月十二日、藩主忠宗侯病卒ス、片倉重長哀悼ニ堪エズ、身体憔悴終ニ復活セザ
リキト云フ然モアルベシ、重長君侯ノ禮遇ヲ受クルコト左ノ如シ
仙臺志料云フ、（上畧）重長名望重ニ千一藩、義山公（忠宗侯ノ道号）常戒ニ諸公子ニ、汝等對レ
孤、有ニ無禮舉動一、猶加ニ含容一、唯重長社稷臣、若有下不レ禮ニ重長一者上、孤不ニ敢許一、其優禮
如レ此云云、　以テ片倉家ノ仙臺藩ニ於テ權勢高キコト、君侯諸公子ヲ戒メシ一事ヲ以テ察
スベシ、況ヤ一藩中ニ於ケル信頼ハ北斗曉星ノ光輝ヲ碧空ニ放ツガ如シ、聽宜ナル哉
片倉小十郎重長ノ逸事
小十郎重綱大阪夏ノ役出陣京都屯營ノ際、愛宕山祠ニ詣シ勝軍ヲ祈リシ事前述ノ如シ、其
ノ祠前ニ天狗ノ画扁ヲ掲クルヲ視ル、之レ京都所司代某ノ納ムル所、題シテ君ノ爲メニ非
ズ、我カ爲メニ非ス、天下泰平ノ爲メナリト云云、重綱刀ヲ以テ其ノ文字ヲ削リ去リ、側

ラニ大願成就片倉重綱納ムノ字ヲ書シ、祠僧ニ告ケテ云フ、画扁大ニ舊ヒタリ故ニ改削セリ、有名ノ畫工ニ請囑シ中央ニ太郎坊錫杖ヲ手ニシ野猪ニ騎スル所ヲ圖セシメ、尙ホ砂金百兩ヲ副ヘタリト、爾後扁額舞馬ノ變アル毎ニ火セスト、寛永五年愛宕山祠炎上セリ、依ツテ重長舊扁ヲ修補セントシ家士上野十次郎ヲ派遣シ、當時ノ名工山木素貞ニ命シテ繪ヲ作ラシムルコト舊圖ノ如クシ、妙顯寺敎海ニ囑托シテ文字ヲ書セシメタリ、其ノ事仙洞ニ達ス、旨有リ上覽シ賜ハムトス、乃チ池尻中納言ニ因ツテ覽ニ供ヘタリ

又一時幕府ノ士、野勢小十郎贈鶴使ト爲リテ仙台城ニ下向シ途白石城ニ一泊セリ、小十郎重綱之レヲ饗應ス、野勢氏云フ、足下名小十郎、僕亦小十郎ト字ス、而シテ世上足下ノ小十郎ヲ知ラザルモノ無シ、又足下仙臺城ニ在リ屢々田手又左衛門ヲ叱スト、幕府ノ諸士此ノ事ヲ傳ヘテ足下ノ勇ヲ稱セザル無シ、僕ノ如キ使命ヲ奉シテ東下ス、一人ノ僕ノ小十郎ヲ傳フルモノ無シ、是ヨリ先キ丹野源四郎、田手又左ニ因ツテ白石ノ隱事ヲ告ク、重綱登城又左或ル人ト座談スルヲ見、重綱刀ヲ撫シ盍ゾ又左高座ヲ避ケザル哉ト、又左愕然避ケ去レリ、此ノ一事四方ニ傳播シ皆快事ト爲セシト云云

慶安元年正月三日例トシテ始メテ狩獵ス、重綱納言公ニ告ゲ軍裝ヲ上覽セント請フ、本日兒景長ト徒歩士百人、維帷子ヲ被リ髪ヲ垂レ冑ヲ帶ヒ手ニ及鎗ヲ持セシム、澁谷右馬騎シテ殿ス、田村侯（一之關城主三萬石）整裝旁側ヨリ衛テ出會ス、重長馬ヲ留メ高聲ニ呼ツテ曰フ、臣既ニ先驅ニ列ス、諸公子ト雖モ又藩君ト雖モ、苟モ隊伍ヲ衛ク者ハ敢テ命ヲ用キズト云云、田村侯乃チ其ノ衆列ヲ返セリト（以上、仙台志料、仙台諸士蘇、其他一二採錄）

萬治二年己亥三月二十五日重長病歿ス、享年七十六、法諡眞性院殿一法元理大居士、墳寺ハ領内福岡村藏本、愛宕山下ニアリ、當家累代ノ主侯ヲ茲ニ納埋ス、故ニ御廟ト崇稱セリ牌所ハ白石町字寺前常英山傑山寺ナリ

△夫　人　針生氏

寛永參年七月一日歿ス、法名指月院殿玉窓桑珠大姉、享年三十三、江戸麻布飯倉町四丁目瑠璃光寺ニ葬ル碑石アリ

△繼　室　眞田梅子一ニ德子

天和元辛酉年十二月八日歿ス、享年七十八、法諡泰陽院殿松源壽清大姉、白石町淨土宗功德山當信寺ニ葬ル、碑石現立ス

補ニ云フ　諸記ニ眞田氏ハ石女ニシテ子女ヲ產セストアリ、然ルニ眞田喜平太家譜ニハ眞田左衞門佐幸村、大阪ノ役ニ片倉重綱ニ一男、三女ヲ付シ云云ト既ニ揭ケタルガ如シ而シテ其長女ハ重綱ノ繼室トナリ、景長ヲ產ム（下略）云云トアリ、仙台志料卷二、片倉景綱父景重、母本澤眞直女（中略）子重綱、母矢内定信女（中略）子景長、母眞田幸村女、七歳謁ニ納言公ニ、（下略）云云トアリ、其衝突差異甚シ、諸記ニ景長ハ松前安廣ノ子ニシテ重綱養ヒ取テ子トナストアリ、其ノ事後ニ景長ノ譜ニ註スヘシ

左門　母同重長

仙台志料古内志摩義如ノ養嗣子トナルト云云

因ニ記ス、古内義如ハ寛文十一年三月二十七日彼ノ仙台藩事變ニ關シ盡瘁シ、厩橋少將酒井忠清ノ邸ニ於テ最後ノ審理ヲ受ク、適々奸黨原田甲斐宗輔俄然刀ヲ揮ヒ忠臣伊達宗重ヲ斫ツテ斃セリ、尙ホ原田内廳ニ馳セ入リ殺伐ノ行爲ヲ遂ケムトセシガ宗重ノ黨與、柴田外

記朝意、原田ヲ斫テ殪セリ、此ノ時酒井家ノ衆多數拔刀シ來リ仙臺藩ノ忠士ヲ殺害セムトス、古内義如大聲ニ獄訟未タ決セズ、同僚ヲ悉ク殺害セバ誰有ッテ曲直ヲ陳述スヘケンヤト刀ヲ投シテ云フ、是ニ於テ酒井氏ノ士皆退キ去レリ、義如ノ剛氣見ルヘキナリ、依ッテ終ニ仙臺藩六十餘万石ヲ泰山ノ安キニ置クコトヲ得タリト今尚天下ノ談柄ニ存ス、板倉閣老現場ヲ綜合シ人ニ語テ云フ、古内義如ナルモノ死ヲ免レムコトヲ聲明ス、然レトモ其ノ云フ所同僚皆害ニ遇フトキハ寡君ノ爲メ事ノ理非曲直ヲ誰有ッテ陳辯セムヤト云云、之レニ依テ是レヲ觀レハ義如苟ニモ死ヲ怖レテ遁ルヽモノニ非スト云云、又義如其ノ從兄重直ト快カラス、仍テ左門ニ遺言シ吾死後必ズ重直ト絶交スヘシト、左門其ノ遺言ノ如クセリ依テ古内義如ノ子孫安寧ノ祀ヲ存セリ

女子　母同上

家臣片倉八郎兵衛某ニ嫁ス、法名陽清院殿之レナリ、墳墓ハ白石町當信寺ニアリ、其ノ子孫代々八郎兵衛ヲ襲名シテ白石藩ニ存ス

女子

女子

女子

女子

女子　左婿

法名照光院殿ト號ス、是レ又當信寺ニ墓アリ

景長　幼名三之助　小十郎

實者松前安廣ノ男ナリ

武田系圖一本ニ、武田信武ノ次男直信ハ藝州、若州武田氏ノ所祖ナリト、而シテ天龍寺供養帶劔ノ列ニ伊豆四郎トアル之レナリ、又安藝守、彈正直信ト諸錄ニ散見ス、兄信成ハ甲斐國武田總領職ヲ相續ス、又武田系圖ノ一本ノ若州武田系圖ニ、信光七代信在ヲ元祖トシ信繁、信榮、信賢、國信、信親、信元ト相次ク（下畧）仙台松前家系圖、寶德參年信廣下野國足利ニ來住、後享德元年三月奥州安東太ノ女婿トナリ蛎崎ニ住シ、次テ蝦夷ヲ征平ス其後松前ニ移住シ蛎崎信廣ト稱ス、四世ノ孫若狹守季廣、其子伊豆守慶廣、慶長四年己亥始メテ松前氏ヲ稱ス云云、按ルニ奥州松前氏始祖信廣ハ寶德中ノ人ト前記ニ云フ如シ、若州武田元祖信在ト畧々同時代ナルモノヽ如シ、若シクハ兄弟ニテ自然分流ヲナセシニヤ附テ以テ博考ニ備フ、當松前氏ハ渡嶋松前子爵家ト同祖ニヤ考ヲ俟ッ

重長養ヒテ以テ嗣トス、養母ハ眞田幸村ノ長女梅子刀自、生母小十郎重綱ノ娘妻ハ古内主膳重廣ノ四女ナリ

因ニ記ス、古内氏五女アリ、長女ハ山口内記ニ適セリ、次女ハ成田杢ニ、三女ハ大和田四左衛門、四女ハ即チ景長ニ、五女ハ奥山勘解由ニ各適嫁ス、子孫聯々今尚ホ現存セリト

寛永十三年四月二十一日、納言公江戸參勤ノ途例ニ依ッテ白石城ニ宿泊ス、重綱廩饌ヲ調度シ以テ公ヲ饗ス、陪伴スルモノ南松菴（南ハ氏号、松庵ハ名）ヲ始メトシテ重臣七人參列ス重綱問ヲ得、養子三之助ヲシテ上謁セシメ物ヲ献ス（大刀目錄、綿二百把、黄金拾枚）公重綱ヲ

顧ミテ云フ、白石ハ他州人往來ノ衝ニ當レリ、宜シク驛傳ニ意ヲ注キテ貨物ノ遲滯ヲ致スコト勿レ、金貨ヲ備ヘ城廓修理ノ用ヲ充實ナラシムヘシト云云、而シテ饗饌半バニ南松菴公ニ請フテ觴ヲ幼君ニ賜ハラムコトヲ望ム、公顧ミズ飲ミ了ツテ松菴ニ觴シテ云フ、重綱子ナシ、外孫ヲ養ッテ嗣トス、今年齒厘カ七歳寵愛特ニ甚シ、上謁ノ時其ノ氣色豪勢ヲ見ルニ佳ナラザルナシ、若シ之レニ觴スル或ハ容儀ヲ失ハム、則チ或ハ家ニ克カラザルモノアラムカ、故ニ觴セズト、公適々城殿ヲ退出スルニ際シ列座ノ諸臣ヲ顧ミテ云フ、景綱賢息重綱ヲ得巻ヲ天下ニ發揚シ武名赫著タリ、重綱ノ如キ眞ニ果報者ナリ、今又賢外孫ヲ以テ嗣トス、寵愛ニ溺レス良士ヲ得テ傅トナシ、其長成ヲ待ッニ必ズ以テ藝能ノミニ拘泥セズ、孱弱ニ流レシメス山野ヲ跳走セシメテ其身肢ヲ健全ニナサシムルヲ肝要トス、適々三之助、公ノ輿前ニ進謁ス、公親ラ小刀ヲ脱シ手ッカラ三之助ニ佩カシメ以テ賜フ、爾後片倉家ノ特例三本佩ノ刀劔ト稱シテ今ニ現存スト云フ、此ノ殊遇ヲ視テ重綱初メ諸臣感泣シテ以テ謝セリト、亦重綱驛停ニ公ヲ奉送ス、公其ノ手ヲ扼採シテ云フ、汝ノ聽事ヲ告グル者アリ、百方探偵スルニ皆無實無根ナリ、汝嫌ト爲スコト勿レ、唯意志ヲ用キ身ヲ儉セヨ第一驕奢ヲ戒メトスベシ、一朝天下ニ事有レバ汝ニ先驅ヲ任シ、伊達成實麾ヲ執リテ指揮セバ亦以テ老後ノ花ヲ咲カスヘシ、孤ハ病苦日ニ增ス、恐クハ再見覺束無カルヘシト言ヒ了ッテ淚ヲ流スコト潸々タリ、重綱聲ヲ發シテ泣ク、視ルモノ皆悉ク袖ヲ濡ハサザルハナシ（以上、仙台志料、重綱詳傳等參取採錄）

万治貳年參月、養父重綱（當時已ニ重長ト云ヘリ前掲參照）逝去スルヤ立ッテ家督ヲ繼ク、主命ニ依テ小十郎ヲ變名ス

同三年二月朔日、稻葉閣老（諱正則、美濃守從四位侍從）命ヲ傳ヘテ云フ、小石川ヲ浚ヒ且ッ更ニ堤堰ヲ作レト、依ッテ同年五月ヨリ工ヲ創ム、高壹万石ノ領土ヨリ工夫ハ百人ヲ出役セシムルニ準ス、是ニ於テ本藩六十二萬餘石ノ工夫ハ六千二百人ヲ出役セシムルニ當ル、則チ其ノ半數三千人ヲ本領即チ仙台領ヨリ徵シテ之ノ役ニ從ハシメ、殘半數三千人ハ臨機應變何人タリトモ雇傭シ以テ役ニ從ハシム、湟長サ六百六拾間、横三拾間、堤堰貳間半ッ、ノ出來形工事ナリ、片倉景長、茂庭定元、後藤某ノ三宰ニテ武頭貳拾人ヲ率キ以テ役ヲ董ス、世人之レヲ仙臺渠ト唱エテ江府第一ノ巨濠ニシテ船舟ノ航運府内中第一至便ヲ極ムト稱セラル、此役工費巨万、景長錢ヲ大櫃ニ盛リ隨意ニ攫取セシム、多攫スレハ擧張リテ櫃孔ヨリ出スコト能ハス、元來備錢ヲ限ラズ擅ニ多攫ハ欲スルニ放任セリ、故ニ競フテ工役ニ從事スルモノアリ、此當時乞食ノ輩或ハ浮浪ノ輩此ノ役ニ來屬セシカハ其跡ヲ絕チシト云フ、景長ノ明毅善斷ニ出ヅ、是レヲ以テ工事疾ク成リテ費用大ニ省ケリ、時人景長ノ才智機敏ニ感服セシト云フ（以上、仙台志料）

或時（年代不詳）幼主侯龜千代疱瘡ヲ患フ而シテ癒ユ、會々伊達兵部宗勝仙台邸ニ於テ將ニ賀莚ヲ開キ主侯ノ平癒ヲ祝セムトス、其前日景長、馬場某、亘理伯耆ト俱ニ兵部邸ヲ訪フ酒間言ヲ以テ意ニ忤フ、兵部小刀ヲ手ニシテ曰フ、足下ハ七十二城ノ一城主、我ハ六拾貳萬餘石ノ後見タリ、孰レカ尊シ孰レカ卑シ、今幼君ニ代リ家ニ幹タルモノ後見ト呼ブ無禮千万ト罵倒ス、景長進ムデ云フ、小人決シテ盛怒ニ觸ルベキノ事ヲ爲サス、一ニ君ノ爲スノ所ヲ聽カムト詰ル、左右兵部ヲ擁シテ別室ニ入ル、景長、伯耆ト是ノ事態ヲ諸臣ニ告ケテ去ルニ臨ミテ云フ、兵部平素匹夫ヲ以テ僕等ヲ待ッ誤謬ノ甚大ナルモノト、而シテ退去各

自邸ニ歸レリ、夜半兵部從士ヲ使シテ景長等ニ謝シ且ツ云ハシム、本日沈醉何ノ爲ス所ヲ記セス、七十二城何ノ指ス所ヲ知ラス云云、夫レ斯ノ如キ放言全ク酒性乱癖ノ爲メ眞情ヲ失ヒシモノ、某等特ニ來リ謝ス宜シク諒恕アランコトヲト、景長等後ヲ慎マシメテ使者ヲ去ラシム、爾後兵部宗勝ニ於テ景長ヲ恐怖スルコト鼠賊ノ猫ニ於ケルカ如シト

因ニ記ス、仙台志料云フ、仙台城ノ要害四十八館、以外ニ二十三館ト云フアリ、兵部ノ七十二城ト放言セシハ蓋シ四十八館、二十三館ヲ指シテノコトナルヘシ、仙台城ニ附屬セル城廓ハ唯白石、岩手山、金山ノ三城アルノミ、城ト館ト取リ違ヘシ如キ全ク酒狂上ノ放言ナリ、兵部宗勝ノ如キ淺慮終ニ大罪ヲ犯シ、土佐ノ僻地ニ謫セラレ汚名ヲ千載ニ遺ス、奚ゾ六十二万餘石ノ後見ニ任ス其器ニ非ラズ、故ニ謫所ニ歿シテ歸葬セラレス、子胤又滅亡積惡ノ餘殃ト云フ、夫レ是等ノ謂ヒ歟

仙台家中騒動ト云フ伊達家ニ於ケル一大不祥事アリ、是レ皆世人ノ知悉スル所ナリ、其顛末ヲ綜合シ以テ是レヲ述ヘムトセハ數十紙ヲ費スヘク、今茲ニ其大意ヲ採錄シテ其ノ要点ヲ擧グルニ止ム、仙台志料（中卷六二丁裏）柴田朝意ノ譜傳ヲ拔抄シテ之レヲ註フ

寛文十一年三月二十七日、宗重（伊達安藝ト稱ス）及古内志摩（實名義如）原田甲斐（實名宗輔）會ニ於大老酒井氏第ニ（酒井雅樂頭源忠清、從四位下當時上野國厩橋ニ居城、依テ一ニ厩橋少將ト稱ス、領高十二万石、江戸幕府大老職）蜂屋六左導レ焉、諸老糾問、甲斐詞屈而退、須臾甲斐又害ニ宗重ニ、將レ入ニ廳上ニ、朝意急追斬レ之、蜂屋聞ニ鬨聲ニ、馳至、斬ニ甲斐ニ、邸士四集從レ背斬ニ朝意ニ、大呵退レ之、途死與中、年六十二、次日蜂屋死、葬ニ東禪寺ニ（下略）云云

仙台志料（卷六ノ三丁裏）古内義如ノ傳記ニ（上畧）桑名松雲語ニ友人ニ曰、吾曾仕ニ板倉閣老ニ（諱重矩、内膳正從四位侍從）宗輔害ニ宗重ニ、開老歸レ自ニ酒井氏第ニ、語曰、變起、酒井氏家臣狼狽乱斫、欲ニ悉殺ニ諸士ニ、古内志摩投レ刀大聲曰、獄訟未レ決、同僚盡死、誰爲ニ寡君ニ陳ニ曲直ニ者、請莫レ及レ僕ニ、於レ是酒井氏士、皆退、以レ此觀レ之、義如非ニ苟遁ニ者ニ云云

補ニ云フ　仙台家中物語、寛文十一辛亥參月ノ變、古老遺筆ト題セル書ニ由ッテ其ノ概畧ヲ抄出シ以テ左ニ叙述ス

伊達兵部太夫殿ハ政宗末ノ御子、忠宗ノ御弟ニ御座候、何卒天下ニ御濟被成度旨ニテ御若年ヨリ江戸ニ御詰、樣々ト被成候得共、天下ニ其ノ類多ク御座候故御有附候コト不被成候、早五十九迄御暮シ被成候、忠宗ノ御取持ニテ酒井雅樂頭樣御娘子ヲ兵部殿御子息市正殿ト申スヘ御前ニ御呼被成候故、雅樂頭樣ト兵部太夫殿ハ實親ニ御座候、然ル所忠宗樣御死去之時分何卒仙台ヲ取度ト内々ニ心ニ御掛候得共御代繼ニ綱宗樣御座候故不相叶ニ付、口惜ク思シ召シ綱宗樣ヲ兎ヤ角ト拵ヘ氣遣ヒニ仕立、其ノ上御隱居ヲサセ申シタ、二歳ニ御成被成候龜千代樣御代繼ニ立申候ハ御成人ノ内ハ、兵部殿番代（番代トハ當時名代人トモ又手代トモ云フ本人ノ代表也）可レ仕由、從ニ上樣ニ（上樣トハ幕軍家ヲ指シテ云ヘリ）被仰付タル樣ニ雅樂頭樣ノ御才覺ニテ埒明キ、偖一兩年中ニ龜千代樣ヲ殺シ申候ヲ則チ仙台ヲ我領地ニ被成候儀案ノ内ト思シ召シ、御隱居ノ次第ヲ片倉小十郎、伊達安藝守殿外御一門、家老衆ヘ御談合ノ上、上樣ヘ被仰上候得バ無相違被仰付候（中畧）彼小十郎、安藝守殿、何レモ番代ハ入レ不申義ニ候間、二歳タリト申候得共御登城並ニ大名役目右不相替被仰付被下置度旨達ヲ御訴訟有之候故、左候ハバ兵部太夫殿ヲ後見ニ可被仰付由ニ御座候、其時片倉小十郎、御一門衆、家老中申出候ニハ兵部一人後見被仰付義如何ニ奉存

候間、迚モ之御事ニ龜千代伯父ニテ國ニ罷在候田村隱岐守ヲ同役ニ被仰付、兩人後見仕候樣ニ被仰付被下度旨頻ニ御訴訟申上候所、如何ニモ今望之通罷成候、最早此時ニ兵部殿彌逆心指發シ、夫レヨリ原田甲斐守ヲ語リ合ヒ付一味同心ト成リ、已ノ年ヨリ段々ノ企ニテ候、同役田村隱岐守殿ニハ每物道ヲ以御勤被成候故、其旨難計意ト被存候ヘバ終ニ相談無之由ニテ候、偖兵部殿、甲斐守兩人仕置不宜候ニ付度々兵部殿ヘ諫言被申候得共承引無之故、田村殿ニハ不及是非思シ召シ、夫ヨリ段々病氣ヲ構ヘ諸事ノ仕置ニ構不被申、兵部殿計リニ打任セ江戸御下屋敷ニ引籠居被申候（中略）殊ニ三年以前兵部殿指圖ヲ以テ道益ト申ス醫者ニ申付ケ、龜千代樣ニ大毒ヲ進セ申筈ニ申付候得バ、道益モ樣々辭退仕候得共不及異儀合点サセ申候、毒之用意致シ有ル時御料理ヘ彼ノ毒ヲ入レ、御膳番衆ニ持タセ道益モ其ノ御膳ニ付キ、上サセ申候所ヲ元來ヨリ「おに」番衆ト申シテ御次キヨリ段々三ケ所ニ居申候テ御膳「おに」仕リ上ケ申候故、其ノ御膳ヲモ「おに」可仕由申候得ハ彼道益近頃迷惑申候、我等儀者醫者ニテ御近所ヲ離レ不申候故、其ノ御膳ヲモ「おに」不申共何怪シキ事可有之哉、氣遣ヒ致間敷ト申候得バ、彼御仁番衆（おに番、一ニ御仁番ニ書ス、此ノ役儀ハ御贊番ノ意味ナラムカ、御贊即チ調理、或ハ料理方ヲ監視スル任ニテ、俗ニ御毒見役ノ事ニ通用ス（シ）申候樣、此ノ義ヲ役目ニ仕リ大分ノ御厚恩ヲ蒙リ罷在ル身ノ御手前、左樣ニ被申トテ任其ノ意申義、御奉公ノ詮無之候間是非ヲ申シテ「れに」仕候所、即時ニ「おに」番衆二三人相果申候故、御膳ヲ押ヘ御勝手ヘ持參候テ仲間衆、犬二匹ニ喰ハセ候得ハ是等モ即時ニ死候、御近習其ノ外何レモ驚入、右之後見兵部殿、田村隱岐殿ヘ此段注進候得者、其ノ時隱岐殿ハ兵部殿ヘ被申越候ハ御前（御前トハ主君ノ前ト云フコト）ヘ御出被成候ハバ御立寄可被成候、大事之義ニ候間致相談可罷出候、幸私宅ハ路次筋ニモ御座候ト被申遣候得ハ如何ニモ心得候由、返事有之ニ付キ隱岐守殿待受被申候、隱岐守殿ヘハ寄不被申、直ニ御臺所ヘ御越候テ樣子之義御尋被成候得ハ、御近習衆委細申候故、道益ヲ御呼ヒ、口ヲ開ク休ニテ手討ニ被致候、御膳番衆、御料理衆、彼是七八人片時之内ニ切殺サレ申候、夫ヨリ段々會議ノ上、女中抔モ十人計リ殺候、トヤ角取鎭メ申由ニ御座候、是ニハ品々多義御座候

伊達安藝守（諱宗重）殿ハ龜千代樣御爲メニハ遠キ御親類ニテ仙臺ニテノ役目ニハ陸奥守樣江戸ニ御詰被成候内、右安藝守殿、伊達隱岐守殿、伊達上野介殿、石川大和守殿（以上、御一門ト稱スル家格ニテ主公ノ分流ナリ）此ノ四人ニテ五日之番被仰付、番前二十日之内ニ朔日、十五日、二十八日、其ノ外ノ禮日ニ相當候時、仙臺ノ城ヘ御登城被成惣家中侍衆之禮ヲ御受被成候役目ニテ餘事ニハ少シモ構ヒ無之候、是四人ノ内安藝殿年高ケ大分別仁ニ御座候故家中仕置之次第万事可然趣衆テ及ヒ見及ヒ聞所々役目之者共穩密ニテ呼ビ、樣子共ヲ聞屆ク彼レ是レト思案被成候中ニ安藝守殿、古來ヨリ天下ニモ知レ代々預リ申候谷原ト申ス谷地（遠田郡ニアリ、谷地ハ森林ノ一）九千町之所、有之ヲ御隱居綱宗樣御弟伊達式部殿ト申シテ、壹萬三千石取リト云フ在所ニ城ヲ御持御入候、其知行之内ヘ彼ノ谷地過分指入候ニ付キ、右式部思召ニハ縱ヘ安藝守古來ヨリ被預候トテ當分我知行之内ヘ指入候ヲ安藝守ニ指引サセ候義口惜ク被思召候故、龜千代樣ヘ御訴訟被成候ハ先年ヨリ谷原谷地ヲ安藝守ニ被預置候得共、當分過ニ知行所ヘ指入候間此ノ度私ニ御預ケ被下樣ニト被仰立候得共、殿樣ニハ相叶間敷由被仰付候得ハ、重ネテ又是非共御預被下旨御願被申

（中略）兵部殿甲斐守被申候ニ我共ニ扱申樣ニ被仰付候、右谷原谷地二ツハ式部殿へ、一ツハ安藝守ト有リケレハ早速御答迄被成各御扱被申、殊ニ殿樣ニモ御苦勞ニ被遊候ト承申上ハ少シモ異議申事無之候、何分ニセ各次第ト御返事被成候、夫ニ就キ谷地見分トシテ志賀右衛門、濱田市郎兵衛、今村善太夫、横山彌次右衛門、此四人被遣候所ニ見分ノ仕樣殊之外惡敷、安藝守殿方ヘハ漸ク五六ケ一ノミ、私ナラデハふみ分不申候故安藝守殿立腹、右見分衆之内今村善太夫、横山彌次右衛門ハ御目付役人ニテ諸事仕置ニ相加ハリ候故、此兩人ヲ安藝守殿御呼ヒ被成、分ケ樣之次第去リトハ去リトハ不埒ニ候、何迚ケ樣ニふみ分候哉、諸事有体ニ不申候ハバ全ク座敷ヲ立間敷クト立腹ニテ御尋ネ候得ハ（中略）万事兵部殿被仰付候通リニ仕候、左樣ニ御心得被下度段申上候得バ、委細御聞届兩人ハ御歸シ被成候、第一是レヲ意趣ニ思召、前々ヨリノ惡事、谷地分ケ樣ノ次第彼レ是レ兵部太夫殿、甲斐守殿兩人ノ惡事共二十六ケ條之訴狀御認メ候テ仙臺之奉行所ヘ御出シ被成、殿樣ヘ申上候樣ニト被仰付候得共奉行衆モ遠慮被致候ニ付キ、左候ハバ上樣ノ御老中樣ヘ取次候得ト被仰候得共、兎ヤ角ト申候故、安藝守殿家來ニ持タセ、江戸ヘ御登ラセ年寄（年寄トハ古來勤メ來リシ役人ニテ議權アリ）ヲ以テ久世大和守（藤廣之、下総國關宿城主五万八千餘石）板倉内膳正（實名重矩、從四位侍從）（内膳正モ當時丹波ノ亀山城ニ居住セシニヤ、寛文十二年ニハ下野國烏山ニ封ヲ受ケシト武鑑ニ見ユ、如何カ是非未考）各樣ヘ御上被成候得バ御請取立御内々ニテ御僉議之上、翌年亥正月中旬ニ安藝守殿ヘ御老中ヨリ仰出被下候義ハ去年八月被指上候訴訟之趣、爲ニ仲間一、被ニ披見一就レ夫申上候義モ有之候ハハ勝手次第可被登由被仰下候ニ付、安藝守殿之外御悦則貳月貳日ヲ吉日ト定メ、涌谷居城（遠田郡ニアリ）ハ子息兵庫殿（申歳三十二歳）ヲ御呼ヒ候テ被仰ハ内々心掛之候儀ニ付此度江戸ヨリ御呼出被レ下罷登候就レ夫此度之儀、理運ニ成候ハ案之内ニ覺エ候、万一仕損シ候ハバ生キテ歸ル事有間敷候、縱ヒ心之儘ニ仕おふせたりト云フトモ我命不レ可レ助我命捨候テモ殿樣ノ御爲メニサヘ成リ候ハバ本望ニ候間其旨被相心得尤ニ候、偖我江戸ニテ相果テ候ハバ則致覺悟、仙臺之城ヘ家來之者不殘召連早々取籠、小十郎殿、安房守殿、上野介殿、大和守殿抔相談ヲ以テ天下ノ勢ヲ受無油斷籠城可レ有、偖又我等死申程ナラバ天下ヨリ其方ヲ呼ニ召狀可レ來候、幾度召狀來リ候トテモ返ス々々登申間敷候、万事ハ小十郎ニ可申置候間左樣心得可レ申由申渡、安藝守殿ハ家ノ古キ侍ハ一人モ不召連、若侍之利發者四五人其外五十騎ニテ登リ被申候、仙台之城ヘハ惣大小名御呼被成候テ右之段々被仰渡候ハ此度殿樣御爲第一ト奉存身ヲ捨テ罷登候、死候ト御聞キ候ハバ殿樣御身体退轉之事ト相心得面々此城ヘ引籠リ、小十郎殿ヲ大將ト致サレ天下之勢ヲ引請何年トモ籠城可有候、小十郎殿サヘ大將ニシテ各心ヲ一ニシテ取リ籠リ候ハバ、三年ヤ五年ニテ落城有ル義ニ無之候、左樣ニ致シ年月ヲ送ル中ニハ國々ヨリ如何樣ノ事モ可有之候其ノ時各存分之通リニ可致候、返ス々々モ此約束たがへ有間敷候（中略）次日小十郎在所白石城ヘ御着、小十郎ニ對面之上右之段具サニ物語リ候得バ、其時小十郎御挨拶ニ國元之儀ハ少シモ御氣遣ヒ相成間敷候、御同姓兵庫殿ト相談ヲ以テ我等下知仕候ハバ、よもや城迄ハ易々ト渡シ申間敷候、只江戸ニ於テ首尾好ク御利運之上目出度御下向待入候由、終夜之物語ニテ江戸ヘ御着即チ亀千代樣ヘ御目見相成、夫レヨリ後御休息成サレ候内、芝御屋敷ニ御隱居ニテ御入成サレ候綱宗樣（亀千代君ノ父君ナリ）ヨリ御狀遣サレ、安

藝守方へ遣サレ候ニ津田玄蕃ト申シテ、奉行役ニテ其比江戸ニ相詰ラレ候テ御隠居へ度々呼バセラレ万事相勤メラレ候、或ル時此玄蕃ヲ御頼ミ其方ナラデハ此狀無恙ニ相屆者無之候、安藝守へ可相屆由仰ラレ候ヘハ、委細畏リ申候ト御狀請取リ罷歸リ、安藝守へハ其狀ヲ見セ申サレズ、兵部殿、甲斐殿へ其狀ヲ見セ申サレ候、其御狀ニ御使殊ニ此度江戸登別而大義ニ存候夫レニ就キ當陸奥守爲ヲ存知諸事　上樣へ言上可仕之覺悟誠ニ以テ神妙之至リニ候、万事貴方へ任入ル間何卒利運ニ龜千代ノ爲メ宜敷樣ニ賴入申シテル儲江戸ニテ兵部太夫、甲斐守カ仕置キ斯樣ニルト惡事共一々遊サレル御狀ニ御座ルヲ兵部太夫、甲斐守、金兵衞彼レ是レ寄合ヒ此御狀ヲ書替エルハ何トテ今度安藝守罷登ル哉先達テ何ヤラム訴狀上ル由、去トハ大不屆ニル、今程國モ靜マリ龜千代世ヲ目出度治メル時節公事心懸ケル義不屆至極ニル、御老中へ之申譯ハ此方ヨリ可爲致ル間、其方ハ早々國元へ歸リ可然ト存ル、此ノ外ニ樣々書替エ彼玄蕃ニ持タセ安藝守方へ遣ハシル得ハ此御狀拜見、仕案ニ相違之御書故、膽ヲ消シ兎角ノ御返事ニモ不及日ヲ送申サセル、綱宗樣ニハ何トテ返事モ不仕ル哉ト御不思議ニ思召サレ、或ル時綱宗樣ヨリ又餘人ヲ以テ仰ラレルハ、何ト致シ返事不仕ル哉ト仰セ遣サレル時ニ安藝守去リトハ斯樣之義御恨ミ至極ニ奉存旨申上ルヘバ、其時御隱居樣ヨリ夢々左樣之儀僞リニル、此方ヨリノ狀ハ斯樣ニシテ遣ハシル由ヲ重ネテ又右ノ御文章ニテ御書キ下サレルヲ致二拜見一テ安堵仕リル此ノ玄蕃ト申ルハ兵部殿方ト申シ、又甲斐守ノ爲メニハ小舅（甲斐ノ妻ハ玄蕃ノ姉ナリ）ニテ御座候、右之通リニ候由、御隱居樣ニハ一身ノ次第夢々御存知ハ無御座候、玄蕃モ御隱居樣ヘハ御通レ無キ内ニ御座候ニ付キ、安藝殿此等之趣キ心ニ籠メ追々訴狀ヲ書キ、二月十五日ニ御上ケ成サレ候ヘハ同二十日ニ御會所（當時ハ御老中ノ評定所ヲ會所ト云ヒシナリ）ヘ安藝守殿被召出候テ酒井雅樂頭樣、久世大和守樣、稻葉美濃守樣（相州小田原城主）板倉内膳樣（諱叙爵等前ニ出ツ）土屋但馬守樣（諱數直、從四位侍從、常州土浦城主、九萬五千石領之）井伊掃部頭樣（實名直澄、從四位下少將、始直興後直治又今ニ改ム、近江國彦根城主、高三十五萬石領之）島田出雲守樣、戸田伊賀守樣、大井新左衞門樣、妻木彦右衞門樣（以上ハ幕府ノ諸役人衆）其外御役人衆御寄合ヒ、正月二十二日迄兩通ノ訴狀御扣ヘ置キ一々御聞キ被成候所、三日之間一言前後無之心ニ有体之義少シモ不殘被仰立由ニ御座候、其時御不審御打被成候ハ板倉内膳正樣、久世大和守樣御兩人ニテ御座候、明細ニ御尋ネ被成候得バ少シモ驚キ不被申常ノ咄シノ樣ニ被申上、三日之内一言前後無之ニ付、内膳正樣ニモ御手ヲ打タセラレ安藝守程ノ口才大武邊ノ分別者ハ無之ト、安藝守居リ被申候所ニテ殊ニ御譽メ被成候由、同二十五日右之御寄合衆不殘御出、伊達兵部太夫殿ヲ被召出、樣子之義御尋ヲ被成候所ニ一ケ條モ其晴悅（晴悅トハ諒解ト云フカ如シ）無御座候、其ノ日ハ會所モ御立チ被成候、重ヲテ兵部殿不被罷出ト申候、偖次ノ日原田甲斐守ヲ被召出御穿鑿被成候所、猶以テ「はは」つれ」（ほはつれトハ方外、一ニ法外ト云フニ同シ）御座候、程過テ三月十日頃ニ双方安藝守ト甲斐守ヲ被召出御穿鑿被成候、且對決被仰付候、先ツ安藝守被申ハ此ノ次第如何晴申候ト甲斐守ヘ「ひし〳〵」ト被仰懸候、甲斐守一ツトシテ首尾好晴不申候、初日ニハ五ケ條ノ對決ニテ御座候、是ヨリ間置十五日、十六日又々對決被仰付候ニ如每度安藝守殿段々被仰懸ケ候得バ、十六日ノ對決ニ二十ケ條之毒之次第被仰候得バ、兎角ノ返答ニハ不及体ニ御座候故、其時内膳正樣御腰物ニ御手ヲ懸ケサセラレ、片膝ヲ御立テ候テ甲斐守ヲ以

テノ外御叱リ被成候、座敷可罷立由ニ御座候、其時内膳正様仰出候者雅樂頭殿ニハ何ト御聞キ被成候哉、もはや落着相究ハマリ申候、幾度ノ對決ニモ甲斐守ガ申分少シモ承届不申候、第一此ノ毒之次第ニテ餘事入不申候、安藝守申上候條々僞リ無之ト被仰候得者何レモ様御同意ニ御座候由ニテ御退出被成候、其ノ後ハ定メテ各次第ト被仰付計ニテ可有之ト何レモ相待チ候所ニ雅樂頭様ヨリ御老中様ヘ被仰合候様ハ、甲斐守ガ申シ殘シ候義御座候間今一度致ニ裁評一呉レ候得ト申候、此度ハ我等宅ニテ御聞キ可然由被仰遣候得バ、何レモ様何分ニモト御返事御座候間、三月二十七日右安藝守、甲斐守其外奉行役之柴田外記（實名朝意、當時仙台城執政、一ニ國老）古内志摩（實名義知、當時仙台城國老職）爲ニ御聞番一蜂屋六左衛門被召出、右之通リニ御聞キ被成候得ハ別而相替申分一ツモ無之候、其ノ時安藝守殿、甲斐守ヲ以テノ外御叱リ被成候、偖貴方ハ何之申分モ無之儀兎ヤ角ト申上ケ御公儀様ヘ御苦勞ヲ懸ケ申義去リトハ去リトハ大不届千万御前ヲ罷立候得ト叱リ被申候御老中様ニモ安藝守ハ大氣成者能キ侍イヤト御耳次キニ御咄シ成サレ候、夫レヨリ御老中様ハ古内志摩ヲ御呼ヒ成サレ、御入リ候間ニ諸事可被仰付次第其、御相談ナサレ候内安藝守ハ表大廣間之次キ御座敷ヘ引込ミ二ノ息ヲ繼キ休息ナサレ候、甲斐守、柴田外記モ兩人共ニ同座之下ニ二間程モ下リ居リ申サレ候、蜂屋六左衛門ハ其ノ次キ障子ヲ隔テ罷在リ候、然ル處甲斐守何ヤラム書付ヲ持チ安藝守殿前ニ向ヒ此ノ義ヲ申シ殘シ候、兎角此ノ義ハ御入ヘ通リ可申上ト存シ候間、貴公ニモ御出ナサルベキ由申シナガラ少シ立チ去リ則チ脇差ヲ拔キ兎角己レガ儕故ト聲ヲ懸ケ安藝ヲ二刀切リ申候、深手故其儘御果テナサレ候、甲斐守ハ安藝守ヲ討チ則チ御入リエ一二間走リ入リ候ヲ柴田外記聲ヲ懸ケ脇差ヲ拔キ追掛ケ候所ニ振リ返リ外記殿ノ正面ヲ一刀切リ申候、切ラレナガラ甲斐守ヲ二刀切リ候ヘ共着込ミヲ着居リ候故切レ不申候、外記殿是レハ着込ミヲ着居リ候ト心得脇指シヲ持直シ突キ申サレ候、少シ弱ル所ヘ御次ヨリ蜂屋六左衛門駈ケ來リ前後ヨリ討留メ申候、雅樂頭様衆ニモ切リ申サレ候哉、甲斐ハずた〳〵ニ罷リ成リ候ヲ御門外ヘ投ケ出シ候得ハ、津田玄蕃家來ヲ遣ハシしまわれ候由云云、又柴田外記モ深手故死ニ絶エ蜂屋六左ハ伊達遠江守様御上屋敷ヘ移サレ參リ色々致養生候得共不相叶二十八日八ツ時相果テ被申候、右安藝守殿、外記、六左衛門三人ノ衆ヲ御老中様方ニテモ殊ノ外御惜ミナサレ候、安藝守殿ハ不及是非候、外記、六左衛門兩人ヲ何トテ相助ケ候様ニ可仕トテ雅樂頭様、御藥師衆、又御典藥衆迄御附ナサレ御養生下サレ候得共深手故其甲斐ナク候雅樂頭様衆兩人手負ヒ申候、外記、六左衛門ハ雅樂頭衆ニモ切ラレ候由ニ御座候其日同道ニテ召出サレ候古内志摩ハ其難ニ不逢次第ハ右ニ申候通リ御老中様ニテ御用共仰付ラレ候内、右之狼藉出來申候ニ付キ外記、六左衛門被致討死候得共、志摩ハ其ノ難遁カレ申サレ候テ彌々奉行役ニテ繁昌致サレ候（古内志摩ハ片倉小十郎重長ノ弟左門ヲ養子シテ家ヲ嗣カシム、即景長ノ伯父ナリ）尤モ外記子息ニ中務ト申シ二十五歳ニ被成候ヲ召出、則チ奉行役ニ被仰付、今程ハ古内志摩、柴田中務ト兩人ニテ御座候云云

原田甲斐守在城信夫ト申ス所ニ御座候子供大内藏ト申スヲ惣領ニテ四人御座候、弟共皆々餘所ヘ聟世繼成候ヲ飛脚ヲ以テ呼寄セ、信夫之城ニ引籠リ申候、甲斐守子息大内藏之家老ニ片倉隼人トヤス者御座候、是ハ大武邊ノ骨切ニテ御座候故、籠城之用意專一ニ仕候、兄弟四人ハ親之逆心之次第ヲ承ハリ左ノミ籠城ノ心懸ケモ深ク不思入様子ニ候得共

彼ノ隼人頻リニ進メ申候故諸道具用意致シ今ヤ々々ト仙台ヨリノ討手ヲ相俟チ申候、此次第仙台ニテ皆聞及ヒ討手ニハ我等ヲ御遣ハシ被下候得ト小十郎殿ヘ望ミ申ス者大勢御座レ、中ニモ安藝守子息兵庫殿、小十郎殿ヘ被仰レハ親之敵ニ御座レ間、甲斐守子供我等ニ御討タセ給ヘレ得ト訴訟之所、小十郎殿被仰レハ尤ニハ存レ得共是レニハ思案有ル儀ニ御座レ間、時節ヲ御待チ可被成レ、甲斐守子供何樣ニ用心致シレ得共討取ヲ義中々易キ義ニレ得共、天下ニ對シ其恐レ多ク御座レ、江戸ノ御老中之御前ニテ何モ狼藉致シ皆死ヲレ事ハ天下ヘ對シ大キ成ル徒事ニレ得バ陸奥守御爲メモ如何心元無ク存レ、國ニ於テ原田ガ城ヲ攻メヲス抔ト世間沙汰モ有之レ得バ彌々以テ御爲メ惡敷クレ間、我等仙台ト江戸之落着聞キ屆ケ進退ニ少シモ障リ無之ト承ハリレハバ、其時ハ何モ存分之通リニ原田ガ城ヲ攻メ、子供ヲ殘ラス討捕リ軍神ニ祭リ天下ノ勢ヲ引受ケ可ヲレ間、其内ハ我等次第ニ被致レ得ト被ヲレ故、何モ此ノ義ニ隨ヒ罷在レ、偖江戸之樣子モ大方埒明キ御禮ノ爲メ陸奥守樣御登城被成レ趣キ、又仙台ヲモ小十郎ニ宜ク計ハセヲ樣ニ被仰下レニ付キ其ノ時手前ノ家老ニ申付、甲斐守ガ子、大内藏並ニ兄弟共ヘ被申越レ樣ハ、此度御親父甲斐守仕合可申樣無之レ、夫レニ就キ各々籠城之用意如何ニモ武士道之器、去リトハ感シ入リ尤至極ニテ何分ニモ其ノ方ノ望ミニ任セ討手ヲ可遣レ得共是レ又被思案候別テ殿樣ヘ御恨ミハ毛頭有之間敷候、兵部太夫殿大惡人ニテ諸人ヲ進被申候所ニ甲斐守運命盡キテ同心有之義其ノ上　上之御老中之宅ニテ狼藉致サレ候得ハ天下ニ其ノ聽レナク、甲斐守殿ヲハ大逆心者ニ申ス由ニ候、其ノ上貴方兄弟、家之子迄籠城致シ、殿樣ヘ弓引可被申覺悟去リトハ去リトハ見苦敷キ仕合ニ御座候、去リ乍ラ親ノ逆心ノ其ノ子其

ニ候得バ御助命無ク、縛リ首其外見苦敷キ御成敗ニ可有之ト思召籠城成計ハレ專一ト御心掛至極千万ニ候、併シ日比御親父ト別テ入魂之義ニ候得バ、其子孫如何可致如在トハ夢々不存候間、此ノ度ハ小十郎ニ御任セ我等在所ヘ被預尤ニ候、隨分我等身上ニモ申替エ候而成共御兄弟衆之御命計リハ相助ケ候樣ニ可仕、殊ニ以テ他ヲ繼ク御人御衆抔ハ少シモ構無之義ニ候間、必ズ々々籠城之覺悟以テノ外惡敷キ事ニ候間、左樣ニ心得可被成候、能々思案ヲ以テ斷シ申ス樣ニ使者ヲ被遣候、此ノ使者覓ヤ角ト念頃ケ間敷ク一兩日逗留致シ唯々常ノ咄ノ樣ニ語リ候得バ、大方合点ニ相見ヘ候得共、彼ノ隼人氣色ヲ替エ合点シ候、返事出候ハバ彼ノ使者又ハ主人ノ首共ニ切リ城ニ火ヲ懸ケ可致自害覺悟ニテ急度相待チ申候故、大内藏殿使者之者ニ被仰候ハ先ヅ町屋ヘ御歸リ休息被申候得ト被仰候而御返シ被成候、其後隼人ニ相談有之候得バ隼人以テノ外立腹ニテ返スヽヽ小十郎方ヨリかたりニ御のり被成間敷候、謀リテ縛リ首ヲ切リ可申覺悟ニテ可有之候間必スヽヽ心得之返事成サル間敷候、同ハ使者ヲ打殺可然ト樣々進申候得共、子供衆一切同心無之故齒噛ミヲ致シ候由、其後子供衆ヨリ使者ノ方ヘ狀ヲ以テ申シ遣ハシ候樣ハ、我等ハ小十郎殿ノ異見（異ハ意ノ誤リカ下同シ）ニ付何分ニモ貴方次第ニ可致候得共、隼人ガ斯樣々々ニ思ヒ切リ少シモ弱ケ見エ候ハバ、則チ我等共ニ助ケ間敷キ氣色ニテ御座候間、此度ノ御異見ニ付候義罷リ成ル間敷ク候間、小十郎殿ヘモ能ク御申可給候由被申越候、此ノ使者御狀披見御返事申樣ハ如何ニモ御尤ニ奉存候、小十郎方ヘ委細可申聞候、併シ小十郎ガ異見御付ナサレ御命計リ先ヅ御助カリ被成候義者紛レ無ク御座候、御死シ候得ト隼人ガ進シ申ス義去リトハ去リトハ一圓合點無御座候、左樣隼人ガ存シ詰メ候ハバ何樣ニ思